

銀鷺 黒淵 燈籠 山嵐

銀鷺

「兄様、兄様に肖て居るよ。そりや女と男だから、ちよいと見ればまるで違つて居るけれど、第一恰好がそつくりだもの。だからね、僕はね、矢張母様にも肖て居るだらうと然う思ふさ。ほら、三上の叔母さんも、湯屋の女房さんもいつたぢやないか。兄様はおつかさんに、そつくりだつて。兄様が東京へ行つた翌年の冬だつて。紫谷に銀の鷺鳥が出来たの。置物だつて、作は佳いか悪いか知らないけれど、何しろ大きなもので見事だつて、評判だもんだから、父様が一度見て置きたいつてね。それがはじめツから、然ういふんなら都合もあるのに、父様は例の如しで、不圖思ひたつたんだと見えて、湯へ行つて歸途に、おい、一寸寄つて行かう、といつたんだよ。さうするとね、其前の日から舊藩主の侯爵が来て、紫谷に逗留をして居るんだらう。十何年ぶりて来たんだつて、市中大騒ぎをやつて、提灯を釣す、旗を出す、旗なんか新らしく拵へて騒いだんだ。

其上にね、兄様、ちやうど其日は侯爵が皆に顔を合せるといふ日なんだから、士族どもは夜が



明けないうちにどしどし詰懸ける、羽織袴やら、洋服やら、士官の細君やら、お祭のやうで、う  
つかり路もあるかれやしないのに、差合も何もお構ひなしに、思ひ立つたら何てつても肯入れな  
いで、すん／＼行くんだものね、僕は困つたの。

一人で待つては危ないから、ついて行くと、もう紫谷の一町ばかり手前から、両側へ車が並  
で、あの狭い町の真中をすれ／＼に通る位なの、それに推合ふんだもの。

こんな時、行つたからつて、何が見られるものですか。彼處の家も目が廻るほど忙しいでせう、  
また出直して来ませうつて、袖を引張らないまでに留めたけれど、父様は、から平氣で、可い  
ら来い。御新造が居るから大丈夫だ、汝の知つたこつちやあねえつて、さつさとさきへ立つて行  
くんだもの。仕方なしつて行くとね、もう門の内は人でいつぱいで搔分けるやうにして通らな  
きやならないのを、やう／＼玄關へ行つて、父様がまじめな顔で、頼む、頼むていふのさ。誰が  
取合ふもんかね、兄様、あけひろげでもつて、皆がすん／＼出入をして居るんぢやないか。  
三十分も立つて居ると、小僧がね、それでも聞つけたものと見えて、何でございますつて出て  
来たから、これ／＼だつて、父様がいふと、笑ひ出したんだあね、僕あ極が悪かつたのなんのつ  
て。

案の定斷つたさ。すると父様が、何、上杉だつて奥様にさう申して見なさい、御承知だから、

ともかく、といつたもんだから、小僧は分つたのか、分らなかつたのか、其ま、ふいと入つち  
まつた。

しばらくすると、女中が出て来て、何うしたわけか、此方へお上りなさいつて言ふから、連れ  
られて二室ばかり通つた時、袴を穿いた奴が出て来て、口早に何か女中に尋ねると、はい、それ  
はといつて、其奴を案内していそがしさうに行つちまつた。

父様も僕も何うすりやい、のかわからないから、茫乎立つて、うろ／＼して居ると、むかうの  
襖の處から半分ばかり顔を出して、圓鬘に結つた美しいのが、恚う手招をしたんだがね。大勢人  
は居たんだけれど、何故だか此方を呼ぶやうな氣がしたから、僕がね、父様の手を引張つて、其  
處へ駈けて行くと、部屋なんだ。立派だのなんのつて。矢張紫谷は大きなものだね、家中煮える  
やうな騒ぎなのに、此室の方はひっそりして、聲音も聞えないで、ぞつとして寒かつた。  
而して父様に挨拶して、

(お初に)といつたぜ。

兄様、父様は豪いことをいつて、まだ逢つたことはなかつたのだねえ。それから僕の顔をぢつ  
と見て居て、極が悪ぢやないか、  
(おとなしいねえ、新ちゃん。)



てツて莞爾笑つた。父様はちやうど飾つてあつた鷺鳥の置物を見てうっかりしておいでだつたが、新ちゃん、といつたもんだからね、兄様、兄様のことを尋ねたことと思つたのか、彼は東京へ行つて居ります、と然ういふの。

(そんなことを承つて居りました。それでは……おや、弟御様、まあ可愛らしい。)ツて天窓を撫でたよ、兄様、僕あ嬉しかつたよ。

而してね、

(彼處ぢや、おかはりもございませんか。)

とお聞きだから、僕がいつた。達者ですツて。それからね、

(新ちゃんはおいくつなの?)

(十八になります。)

(まア。)ツて呆れた顔をして居たつけ、が聲を出して笑つてさ。

(お聞き申したのは、このお兄様のことですのに。新ちゃんは、もうそんなにおなり遊ばしたかねえ。然うでございませう、久しくお目にかゝりません。實家へお遊びに入らつしやつたのは、ちやうどこのお兄の時分でございませう。)

僕のね、手を、掌で蓋をして然ういつたよ。それから自分で茶を入れたりなんかして、取込ん

で居りますので、おかまひ申されませんで、眞箇に優しい人つちやあない。ねえ、兄様さうぢやアないか。僕のことをね、新ちゃんくツていふの、さうしぢや、

(おや口癖になつて。)  
と笑つて居たつけ。

其の時は初めて見たんだから、そんなに氣も着かないでしまつたけれど、其次餘所で逢つた時に肖てるやうだと思つたのは、使に行つて歸る道で。あの黒淵のがけ裏ね、彼處から芝居まではすぐだもんだから、腕車にも乗らないで、若い者が一人と、小僧が一人と、女中が三人で供をして行く處で出ツくはしてね、顔は覚えてたんだけど、むかうが大勢で僕はいやだつたから、俯向いて、通過ぎて、すつと離れてから一寸振返つて見ると、見返つたよ。またしばらくして後を見ると、またむかうでも振返つたから、もう一度、今度は餘程來過ぎてから見て遣つた。

其時はね、彼の人ばかりぢやなくつて、小僧も、女中も、一所に皆で此方に向いたから、僕は遁出してしまつたさ。

今でも目に着いて居るがねえ、其時や、ひどく派手な装をして居たつけ。

それから一二度も見たことがあつたらうか、つい此間は、あの、通の紫谷の出店で見た。さつき兄様に話したツけね、何だつて店は人だけだつたものね。彼家には紫谷の妾が置いてあるツ



て皆が然ういふ。僕は其奴も見たま。其がねえ。頻りにお世辭を振撒いて、此方へお入り遊ばせ  
ッて丁寧にお辭儀をして居たが、大事にして、敬まつて居るらしい。でも急いで居たのか。内へ  
は入らないで、上り口に腰をかけて、片足は駒下駄を穿いたまゝ、扇をねえ、少しあげて口ん處  
へあてて、俯向いて、何か其妾がいふ毎に、

(え、え、え。)

てつちや、領いて居たんだよ。え、髪かい、髪は其時や圓鬘ぢやなかつた。

(奥様だよ、奥様だよ、紫谷の奥様だよ。)と嘯きあつて、往來が立停つた。しばらくして歸りさ  
うだつたから僕は家の方へ戻つて來ると、提灯が二ツ、はたくと駈けて來て、僕の先になつた  
奴が、紫谷に走りついて、もうお歸宅だからと女中に門口で言つて居た。兄様、い、人だねえ。  
兄様が小兒の時にはなかつたつたつていふぢやないか。  
と弟は予に語りぬ。渠は何心もなかりしならむ。

### 黒淵

水底の土の色なるべし。水の流黒ければ名としたり。岸にのぞみたる石垣の高さ四五間もあら  
む。其上に板塀あり。石垣と連りて、町の角を繞りて立てり。

いろ／＼の草石垣の間に生ひ、灌木は枝を交へたるに、小笹、熊笹茂れり。この淵の流れいと  
緩やかなれば、夜は静なれども、水の音せず。

土手、石垣の間、路はいと細うして、衣の袖の茨の棘にかゝらざるやう、人一人肩をすばむれ  
ば通るを得べし。横さまに延びたる楊柳の葉は、頭に支ふるばかりなり。

川上三町ばかりの間は、市街の中央を横ぎりて遊里の岸を流るゝより、人音、物音遙に繁く、  
冴え切りたる婦人の聲の、聞えてはまた止みなどす。月は出でたれど空曇れり。

折からそよとの風もなきに、石垣の草の中より、落つるが如く螢たちて、土手の上に光りしが、  
すら／＼と行きて大川の半ばに消えたり。

静に見送りて、ふと我に返りぬ。

秀がこゝに嫁ぎしは、今より六年の前なりき。紫谷の裏手なるものを。こは予が來べき處にあ  
らずと、思はず慄然とするほどに、石垣に生ひたる笹の、ざわ／＼と揺れて蠢くものあり。

立去らむとせし足を留めて、腕を組みつゝ屹と見上げぬ。

しばしもの音もなかりしが、やがてまた動き出して、石と石とのあはせ目に、足を交るがはる  
踏かけつゝ、しづかに下りるは人なりき。  
訝かしと見たる目の、いかでか渠を慰たむ。夜目にも富の市なりしをや。



渠は人ありとも知らざりき。草の根に縋りながら、爪探りにおりたちたる、下には丸き下駄ありて、一足正しくならびたるに、落着きて爪先を踏あてて、杖を取りて、ぬつくと立ちて、空を仰ぎて、といきをつきしが、肩を垂れて俯向きぬ。

予はいきを凝して見たり。

されど何等のことも仕出ださず、渠は徐に歩行き出しぬ。螢の光二度ばかり、しよぼけたる其背姿と、予とを遮りて顯れしが、ふわと消ゆる時、見えずなりぬ。

見送りて予は、思半ばに過ぎたり。

去にし年、師のミリヤアド、文して我を招きし時、秀に別れを告げむとて、深水の家を訪ひたる夜、山鳩の聲懐しく離れがたき心の出で来て、其夜より降りし雪の降りやまで積りたれば、上京の道開けずといふをかこつけに、いまにも發程むと思ひたる、初一念はあだとなしつ。

なすこともなく年は暮れたり。明くるを待ち、暮る、を待ちて、日に日に秀に慕ひ寄りては、何事をかし出でたる。歌留多雙六は上手になりぬ。學びの道は打荒びて、大空にもを思ひてき。

戒むる人ありて、強ひてまた數學教ふる私塾に塾生とはなれりしかど、同數異號の和は零なりと、寢覺にも呟きし、教師の口癖を習ひ取りて、人の氣に染まぬことをいふことに、横を向きて、(同數異號の和は零なりですから。)

恠いひ消しては、笑ふことの、快きを覺えしのみ。十月三日、日もなほ忘れず。挾むこと渠が如くなりし富の市の、六月七月逢はざりしが突然予が塾におとづれ来て、

(新ちやん、秀さんが、嫁入をします。)

と一言いひて歸り去りき。日もなほ忘れず、十月三日。

### 燈籠

東京にわがきたるも、また秀のあればなりき。

一夜予が弟の、不圖熟睡の蚊帳を出でて、一文字につか／＼と戸口に行きて、半ば入口を開けたるを、慌しく抱止め、叱れど、ものもいはでうつとりする、目は全く眠りたれば、太く怪みながら其ま、臥床に推遣りしに、はたと倒れてまた寝たり。あくる日になりて問ひたれど、露ばかりも昨夜のことを知らずといふに、人は時としては夢の中に、實際ある働きを爲し得るものぞと確めたるより、予はみづから危みき。

紫谷は近し、予が家より幾程もあらざるを、いかなることをかしいださむ、とために上京も急ぎしなり。今年やまひありて歸りし身の、秀が三たび顧みたりと、弟が告げたればとて、黒淵の崖裏を、夜深くなりて徜徉ふことか?!



母上、憐みたまへとて、予は其の墓前にうなだれぬ。

墓の際なる松の枝より、背後なる卒堵婆に繩を渡して、燈籠三ツばかり結びかけつ。油さしの未だ來ざれば、灯も點さである、山中の日は黄昏れて、森の中暗うなり、手向けたる線香のそよ吹く夕風に灰落ちて、赤々と燃ゆるが見ゆ。

心細うなるに、蚊の聲低く耳許にひとつ鳴く時、墓經讀む法師來れり。童顏仙軀、髻白く頤を埋み、白き眉長くぞ低れたる、渠は尊き聖人とよ。麓の庵に住み給ふが、予が六歳七歳の頃も今もなほおもかげかはらで、身も太く健かなるが、飄然として來給ひぬ。

座を譲りて傍にある時、つと前に進み給ひて、妙なる法の聲はや聞えたり。讀經やがて半ばにして、油さしの老夫巡り來て、三ツの燈籠にみな灯を點じて、竹と、わがねたる藁繩を兩の手に提げたるま、背ざまに手を組める、腰はや、前の方に屈みたり。年紀五十を越えたらむ、口はキト引緊りてものしく見ゆるから、無作法に太き眉つきと、しをらしき目に愛嬌あり。深き皺幾條か刻みたる額禿げて、白髪まじりの頭髮なほ濃なるが、聞惚れたる面色して、片頬に笑を含みつ、予が背後に聽聞す。膝切の股引短く、太き筒袖の腰までなるを着て、胸毛黒々と襟廣く、小倉の帯の幅狭きを前さがりに結びて居れり。

燈籠あまた、び風に戦ぎて、明くなり、暗くなり、消えむとして、さだまりて、蠟のながる、音す。

讀經しはて給ひたれば、ソト布施を參らすに、老僧は受納めて、しわびたる掌もて、童かなんぞのやう、しづかに予が頭を撫で給へり。

「せいだしておとなになれよ。」  
と微笑して、念珠持ち給ひたる手の衣の袖に隠る、はしに、老夫は身を退りて一揖し、

「和尚様、彼處でお墓經を、と申して待たつしやりますで。」  
「あい〜。」

と頷き給ひ、老夫を具して去り給ふ。  
立ちあがりたるあたり、遠く、近く、十ばかり、一ならびに三ツ二ツ、處々に、遙に離れて一個

など、數百の燈籠風をさそひて、樹間々々に暗く見ゆ。  
母の墓なるが蠟盡きて、なかの一個いま消えかゝり、ぱち〜と煮ゆる音に、ふと見返れば、

予が家より參らせたるもののほかに、別に一個の燈籠あり。印の小松の根に寄せて、墳墓の上に置きたるが、夜露にすら〜と濡色茂れる、夏草の葉越に透きて、山風に濕りたる灯の影冴かに、

小松の翠色淺く、一葉一葉に宿りたる、露玉くる〜と照り添ひて、奥床しうも優しく見えぬ。



山 嵐

盂蘭盆の魂祭に、迎火送火は焚かざれど、菩提寺に、墓地に、祖先を祀りたる處には、家々より燈籠を携へ行きて、墓詣の時御明を點するなり。家の内に、魂棚はいま造り設けず。燈籠は一  
家、親族、寺は違へ、墓こそ別なれ、志す靈のあるものは、皆靈前に手向くる習ひを、誰が母上  
に供へくれけむ、心當りのあらざるにぞ、予は露の中をすかしたり。

志す佛の名と、手向けし者の姓名とを、書着けて置くなれば、とさし覗き見たりしが、草の葉  
蔽ひ茂りたれば、此方よりは讀めざりし。掌をさし入れて、少し押分くるに、ひやくと指ぬれ  
て、可惜露はらくとこぼれぬ。

字は鮮かに讀まれたり。

新ちやんの母様 御墓 紫谷内

と書つけたる、二ならびの女文字、ぢつと見詰むる瞳に映じて、其文字燈籠をはなれつ、露  
白く、草青き、灯影のなかに鮮かに描かれて、空に浮びてちらりと見えたる、爾時松の梢颯とな  
りて、夜風冷かに身に染みぬ。

他の二個の燈籠は、かはるゝともれはてつ。今は唯其一つのみぞ残りける。

あたり暗うなりたれば、墳墓の上の草の中のみ翠滴りて、松の葉すこしばかりあかりのもれた  
る、其處ばかりは、いよく照り増りて、露の色一入うつくしきに、青き蝗の小ささが一ツ葉末  
に縫れり。

近よりつ、また遠のきつ、視め飽すイむに、谷一ツ隔りたる向の峰裏に打鳴せし輪鉦の音の、  
ふと亂れ初めて、山おろし烈しくなりぬ。

草の葉颯となびきて、蝗の足動き出せり。袂も裾もあふりはじめぬ。

遠き山、近き谷、今は數ふるばかり消え残りたる、燈籠の灯のあかきと、くらきと、上下に皆  
動けり。

鳶が峰の樹立深きあたり、波立つ如き風の音して、轟々とばかり吹きまきる。

右にめぐり、左に立ち、前を蔽ひ、背後を圍ひて、墓所の風を遮れども、彼の燈籠のあふち烈  
しく、蠟の灯ひたとおし伏せられては、心細くなりゆくに、堪へず草の中より取出だして、おろ  
して、墓前の地に据ゑつ。

兩袖をもて圍ひしが、なほ隙間もれて、あはやと蠟の灯のまた、くにぞ、消されむことの口惜  
しきに、手早く胸の紐解き棄てて、予は羽織を脱取りつ、燈籠を上より包みたり。

灯影はやがて靜になりぬ。



星の影樹の間に洩れたり。

時にこの前を登音して、森を二人ばかり過ぐると覺えし、急に立停りて、

「あれ變だぜ。」

「何うかしてゐるんぢやないか。おや、」

と囁き合ひて、わが方に近寄る氣勢す。予は胸を打ちて、疾く躍まりし身を起し、故と顔見らるゝやう、其方々向きて少しく笑を含みしに、俄にひっそとなりぬ。稍ありてはたゞと遠ざかる音高く、遙にわつといふ聲せしが、其の後は聲もせず、風もまたいつしか止みたり。

輪鉦の音も聞えずなりぬ。

ひとつ消え、二つ消えゆく山中の燈籠、纒に草がくれの螢かとはかり消えのこる。

いまはとて伏拜み、ふたゝび舊の處に置きて、幽なる其あかりを辿り、二本三本、松杉を潛り出でて、見返れば、燈籠の灯はなほ點れぬ。

小戻りせしが思ひ返しつ。一反ばかり隔りて、更に遠ざかりて、更に歩を移して、また更に顧みたる、満山黒き森の中に、青き灯影の草の露、母の精靈の消えやらず、君が情は盡きざりき。

## 四之卷



こだま 有明 柴垣 几帳 三日月

こだま

森を出でて見返れば山暗し。風は風ぎぬ。燈籠みな消えて、星あかりの山路たどくしく、草の徑を分け行くに、稻子はらくと飛び交へり。

麓におりるなかばにして、土の崩れし處一個處あり。恰も丘の半腹にて、ひとなだれの谷深く、縄に足溜とすべき路の危げなるを、なまじひに知れる身の、今しも其處に臨みつと足敷にて計るとともに、一步も踏出すこと能はずなりぬ。

路はなほ、一條別にありたるを、恁と知りなばそなたよりぞすべかりし。引返さむとするに心から身は其細道のなかばとも思ふ處に居て、前にも進み難く、後にも退き難き心地ぞしたる。

わづかのあひだ二間には餘らぬ處を、草の根に縋りなばと、左手なるがけを搔探れば、茨に掌の傷つけり。

詮方なく、イむに、爪尖のこそばゆく、身はわなき、浮足になりて心細さ限りなし。予は草叢に膝を折敷きて、覺束なく星を仰ぎぬ。



空の色たゞならず、野の末、峰の裏あたり、星は數を盡して輝くに、この谷の上の方のみ、雲ありとしもなきに暗うなりたり。

「おい。」

其處ともわかず、人影のありとも見えで、蕭びたる太き聲していふ。

こだまの呼ぶと思ひつゝ、予は氷を浴びたる心地して、ひたと草の根に身を寄せぬ。

「誰だ、其處に居るのは誰だ。」

予はいきをこらせり。

「邪魔になる、退かぬか、退かぬか、えゝ！退かぬかといふに。」

語勢烈しく頭上に迫るに、走り退かむと心は急けど、一步をあやまれば九仞の谷の眞底に落ち

むず危さ。身を起すべくもあらざるにぞ、さゝやかになりて踞まる。

「おのれ、退かぬな、退かぬな、……可し。」

とはや何等か、害を加へむとする氣勢、聞覚えある聲音なり。予が心決まりぬ。

激しくものをいはむとして、打ちふるうたる唇を、ひらかせあへずひしと蔽ひて、耳に囁く優

しき聲あり。

「黙つて、黙つて、新さん、私だよ、私だよ。」

と、忍音ながら力の籠れる、教會なる操の聲なり。

口には堅く蓋されたれば、切なき胸の躍るのみ。

「黙つておいでよ、恐うござんすから。可いから、私が居るからね。」

と背後に居てもものいへりし、渠が身は衝と前にまはりて、予を其胸に抱き緊め、兩の袖もて頸

を蔽ひて、

「可うござんすか。おつとして、静にしておいでなさいよ。恐うござんすからね。」

とひそめき告ぐ。暗きなかに、わが顔は渠の胸にひたとつきたれば、其姿は見えざれど、ひた

すらものの恐しければ謂はるゝまゝにいきをひそめて、身動きもせで取継れり。

爾時聲を高うして、

「はい、はい、あの、新さんはもう歸りました。此處には居りません。はい、いゝえ、まったく

です。何の私が祕ますものですか。——神よ守らせたまへ——」

とて其額をつけたらむ、わが肩ものに觸るゝを感ず。婦は黙して打念する氣勢なりしが、恐し

き聲は聞えずなりぬ。



「もうようござんす。さ。」

と婦人は予を放たむとしたりけるが、急にまたしつかと抱けり。わが居たる上の峰の方にて、細くて清き聲のやゝふるへたるが、

「新ちゃん。」

と呼懸けたり。

胸に徹する聲なり。予は耳を欬てぬ。

「黙つて、黙つて。」

とまたさゝやきいへり。

「新ちゃん。」

やゝありて、

「新ちゃん、新ちゃんぢやないの。あれ。」

予は答へむとして顔を上げるに、操はひしとばかりおさへたる手を弛めず、

「何故、然うですよ。ものをいつちや悪いといふのに、年上のいふこと肯くもんです。」

とひそめきながら、叱るが如くたしなめられて、心ならずも黙してけり。

「新ちゃん、新ちゃん、新ちゃんといふのにさ。」

「いゝえ、いゝえ、いけません、返事をしちやいけません。いふことお肯きなならないとミリヤアドにいひつけて叱らしてあげます。」

と屹となりて戒めいふ。

峰の上にては、しばし聲の途絶えたるが、此時また、

「あの、新ちゃん、其處において遊ばすのは新ちゃんではござんせんか。」

「違ひます、何の、こんな處、新さんの来るやうな處ぢやございませぬ。新さんはこんな處へ来るものですか、私の、私のいゝ兒はね、富の市ぢやありません。」

「あ。」といふ叫、耳にのこりて、峰の上ひッそとなりたり。

予は懸念に堪へず、振りはなさむと身をさせるに、彼の人少しく手を弛べて、

「ね、何にもあなたを呼んでやしないの。みんな僻耳です。新ちゃんく〜てきこえたつて……そりや山鳩の聲でせう。あれ〜あれ、鳴いてるのが聞えませう。」

耳を澄せば果せるかな、遙かに遠く、三ツ山、四ツ谷、十森の彼方の、洞の中の奥深く鳴くかと思ふ心地せり。

「いまのうちに早く、さあ、お歸り。」  
と姿なきものの導くをば、怪しともみざりしが、たしかに秀のわが名を呼びたる、上なる峰に



心残りて、さまでに渠が戒めたる、緘黙の掟を破りつ。

「姉さん、姉さんかい。」

とばかり峰を仰ぎ呼びぬ。

「お、新ちゃん。」

と應ふるに、堪らず走り寄りむとせる、わが手をむすと引留めて、

「おい。」

と寂びたる聲を懸くる。啊呀と見ればいまのままで、予を護りたる操はあらで、世にも恐しき富の市の、左手に予が手を扼り、右手には秀の腕を掴みて、深さ幾丈とも分たざる、眞暗き谷に臨み居れり。

「おにげなさいよう。新ちゃん、あれ！」

富の市は苦しげに吐息をつき、

「秀さん、こ、こ、を見て、私がこ、を見て。だ、だれがこんなになりました。」

と矢庭に秀を引寄せて、其胸をさしつけたる、肋骨白く見え透きて、譬へば拳の入りむばかり、胸の一部の肉を抉りて、背にも届かむ穴あきて、眞蒼に黒き皮膚を染めつ、鮮血其疵口より噴出でたり。

「こ、こ、こ。」と富の市は、予を、捉へたる手を放ちて、秀に疵口を指したる、節だかき指の尖わな、きぬ。

今はハヤわるびれたる状なくて、肅然と立つたりし、秀の頸に手をからみて、横倒れになつたる富の市！ひとしく崖をふみはづして、あはやと見るまに陥りぬ。

白き踵のちらくと、空より雪の降るかのやう、眞暗き谷の底へ、底の方へ、すんくすんすんすんくくと果なき深みにおちいりゆく、秀を見るわれ堪ふべきや。

續いて飛込まむと片足かけて、屹と瞰下したる谷の底より、綿の如き白雲の、むらくと渦き出で、谷一面にひろがり、蔓り、かさなりあひて、恰も蓋したらむ如き奇觀に驚き、茫然として見詰めたる、谷の半ばの雲の中に、浮みもやらず沈みもはてで、秀のみ一人漂へり。

月に銀波の輝く如く、折から洩れたる有明月の、絲の如きがきらくと、かの白雲をぞ照したる。

秀の黒髪颯と亂れて、横ざまに臥したるにぞ、予は心地酔へるが如く、再び足を爪立てき。

「新次！」

と一聲背後より、妙なる聲のいと清きが、少しく怒を含みて呼ぶに、胸を打ちて見返りぬ。

茶博多の帯、胸高に占めたまひし、亡き母の胸のあたりのみ、わが頭より少しく上に、月あか



りに仄見えたり。

飛継りたる手はそれて、それかと思ふまぼろしの、白雲みてる谷間を切つて、矢よりも疾く一文字に、むかひの山にわたりゆき、岬の如き峰のはしに、一本高き松の梢に、斜にかゝれる月の上に、後姿の頸のあたり黒髪をよくと靡くと見えしが、一刷淡き朝霧のしらくとばかり姿うすれて、東雲高く消失せたまひぬ。

とばかりありて夢さめたり。胸の中安からず、秀の身の心許なさ限りなかりき。

### 柴垣

予が日毎、醫師の許に通へる路は、かの黒淵の裏にはあらず、紫谷が家の表の門を、よぎなくいつも通りしなり。

人知れず心咎むれば、其と向ひ合ひたる家の、裏庭の柴垣の方に身を寄せては、足早に過ぐるを例としき。さりながら昨日一昨日、おなじ其柴垣の、とある棕櫚繩の結目に如何ならむか鳥の抜毛の、一片の雪の縁を墨もて細く染めたる如きが、風、雨にも取り去られでかゝりたる、おなじ處に袂觸れて、われ知らず立淀むを、心着くま、人やあるとあたりを見ては、慌しうぞ立ち去りたる。

醫師は紫谷のならばにて、一町ばかり隔りたる曲角の邸なり。

十日目の朝なりけむ。近きあたりの病家より、迎ふるまゝ出でたりとて、先生は留守なりといふ。

「別に診て頂かなくても、かはつたことはございません。お薬だけ頂きませう。」

と傍に置きたる、水薬の瓶を取り、薬局の卓に出さむとして、ふと見れば違ふたり。おなじほどに見えたるが、予が量よりも小さき瓶に、紫谷氏令息新三郎君とぞ書いたりける。

「あゝ。」

薬局の書生はむかうより覗き見て、

「そりや、何です。このさきの紫谷の兒様なんで、お名がちよいと似てますから。」

といひかけて打笑みたり。

恚は誰が名づけしぞ。秀の子の頭字は予とおなじ。予とおなじ。と思ひしが、みつめてしばらく放ち得ざりき。

「病氣ですか。何、薬を取りに来れば病氣に違つたことはないけど。」

と予は故と微笑みぬ。

薬局生は何氣なく、



「しかし、そのお子はもうよくなりました。いまお不快のは御新姐様で、實は先生も紫谷へ参つたんです。」

歸途にもまた知らずく柴垣に寄添ひて、紫谷の門を見たる時、予は更に懸念なきこと能はず。さらぬだに去し夜の、不快なる夢もあるを、秀が身に疾病ありとは。奥深き家の勝手の方に下婢どもの語るらむ、婦人の聲もれ聞ゆる。門には二頭の荷駄馬あり。近山より薪、炭など持運ぶものなるが、悠々と秣食ひ居れる、草どもあちこち取亂せし門邊に風もあらざるにぞ、心少しく安んじたり。

おのが病氣に思ひ至りて、手にせる薬瓶に心着けば、予が名を署したるレツテルの、むかうざまに、紫谷の門に向きたるにぞ、はつとばかりに袖以て蔽ひぬ。

日毎おなじ時、おなじ處を過る身の、いつとなく家内の目に留りて、遠目にも予が名を知られむかと、門前を通るには、必ず瓶を蔽ひ隠して、予が名のうはさされざるやう、上杉といふ言の、一言も秀の耳に入らざるやう、はた秀をして思ひ起さざらしめむと勉めたる、心づかひを人知るや。

### 几帳

前年深水の店に居たる友吉の、家を持ちて、おなじ時計店を開きたるに、一日通懸りの予は期せずして呼込まれぬ。

打出ては醫師にも聞きづらかりし秀の容體は、今もよりく紫谷に出入をすなる、渠の口より語られき。

「新ちゃん、さあ、まただ、もう、いまぢや何處か大人ぶつて、斯う見ると、いやにお澄しで、つらが憎い。ほい悪氣でなし、ほんとのことだ。新ちゃんといふ柄ぢやおあんなさらないけれど、まあ、御免蒙つて、いひ馴れた處でやつときませう。新ちゃん、こゝで、あいよ、といつて下さらないと調子が悪いな。は、は、は、笑ひごつちやありません。ほんに私等も、ないく心配して居ますがね。困つたもんです。ぶら／＼やまひで、何とも方つかないので、お醫者もかたがつて居るんださうで。」

如彼弱々しくお見えなすつても、あれで、どうして御氣象もんでおいでなさるから、どんなに氣むづかしくつても、鬢の毛一筋ぶらさげておいでなさらうぢやなし、まだ深水の時分は、あれでもあどけなくつて在らつしたただけれど、むかうへお興入のあつたあとは、ちやんとしまつて、高い聲でお笑ひも出ないばかり、其の癖ちつとも澄さないで、今でも私が伺ひに降りや、友さんかえ、といふお聲懸。



始終笑顔で在らつしやるつて、彼處の女中衆もいつてます。何時も奥様の不機嫌な顔つては見たことありません。其で、ちやんとおもしろが利いて、支店、本店、何十人といふ奉公人が奥様といふ聲が懸ると、そりや居すまひを直します。一體がらが大きいので、きり、として立たせると、まつたくあたりを拂ひまさ。

其で居て例の通りお優しくつて、庭の草取にだつてぞんざいな言をお懸けなさるでなし、坊ちやんが小間使をお使ひなすつても、新ちやん、御苦勞だつたと、さうおつしやいよ、とかういふ調子ですもの。

だから御覽なさい、いつぞやも紫谷で舊諸侯のお宿をなすつた時も、其のまた御臺様がね、新ちやん、孔雀の土用干見たやうな洋服かなんかで、いやに反りやあがつて、横柄なことをいつたもんなら、さあ小間使どもが、何でさ、内の奥様にだつて、呼すてにはされやしない私たちだ。何の西洋手品の幕中で風琴を引張らうといふ身で、生意氣なつて、同盟罷工をやらうとした位でさ。

華族の奥様だつて、面とむかつちや聖目です。紫谷のといへば聞えたもので、誰だつて立停ります。美しいつてことは私のおふくらだつて知つてますけれど、あの方は出ぎらひな質だから、見たものは餘りないので、私だつて何ですぜ、あ、この廣大もない邸の中にや秀さんが居るなど

思ふと、何だか其奥ゆかしさといふものは、几帳の蔭にでも在らつしやるやうな気がして、紫谷の門の前を通る毎にや、懐しいやうな、貴いやうな、嬉しいやうな、泣きたいやうな、え、泣きたいつて、何です、たゞ譯のわからない気がしますから、然ういつて見たものです。

妙ぢやありませんか。人の身分といふものは、もう、あの方なんざ、おうまれなさると直ぐにあ、いふ果報が備はつて居たんですね。何だつて、新ちやん、お家は、アノ通り、名所の瀧がひとつ庭にあらうといふ位、姑はなし、可愛い坊ちやんはおできなさる、旦那はあの通りのお人品で、まるで坊ちやんです。ちつとは浮氣もなされば、お妾もあるけれど、何があの奥様だから、妾の方で恐れ入つて、小さくなつて、とても叶はないものとあきらめて居るんで、旦那に殺文句ひとつ言はうでなし、あんな奥様があるのにまあ旦那はお茶人ぢやないかつて、人の前で笑つてまさ。平氣なもんです。

みんなが懐いて心底から大切にして居るので、氣あつかひをなさらうでなし、御兩親もお達者だし、ほんとでさ。それにもうちやんとお位がそなはつて、争はれないもんです。深水においでの際は悪くすると背中の一ツぐら叩きかねなかつた私だけれど、今ぢや何うしてむかうでおかほりなく、友さん、とおつしやるけれど、其聲を聞くと何だか冥加ないやうで、嬉しいやうで、恐れ多いことだと思つて、おのづと俯いてしまひますよ。



すると、この病氣といふものが、錢金づくぢやいけないんで、何に不足のない方でも、こいつだけは仕方がないんです。それもね、踏脱いだせるで噓をするとか、くらひ酔つて頭痛がするとかいふんなら、まだ斷めも着くんでさ。

妙なことをいふやうですが、新ちやん、お醫者にや分らなくツても、私なんざ知つてますぜ。富の市ね、彼です。御病氣のもととは彼なんで。彼奴あ何です、如終何です、紫谷へ其の、ぬつと入つちや出て來ますがね、え、怪しからんぢやありませんか。

一體さう毎日々々何の用がありますものか。深水だつて何でさ、大したお知己といふんぢやなし、ほんの見知越であつたばかり、其家の娘さんが縁着いたからつて、嫁入先へさうく押懸る奴が何處にあるもんです。いえ、何も私がこゝで威張つたつて仕様のあることぢやないんですけれど、頃日はもう毎日だ、といふから呆れるでせう。

さうかといつて、別に亂暴もしないものを追出すといふ譯にやゆかす、物貰ひでもないものを巡査に引渡す分ぢやなし、彼でなまじつか、いゝ家の跡取だけに、いま私の家へやつて來た處で、矢張ともかくもお客でさ。まあ富の市さんといふので、そりや番茶でも出さなければならぬといふもんです。

そこは勝手でも氣を着けてて、今日はお奥で少しお取込が、と恚う先づやります。それでもち

つとも、おかまひなし。はあ左様ですか、といつたきり平氣であがり込む。それでもいけないんで、敬して何とやらいふ術ださうで、番頭さんのさしがねで、彼奴を据ゑるやうにして、いや、御上使の格であつかつて、何ぞ御用でございましたら手前までさうおつしやつて遣はさりました、といはせて見ると、ニヤリと笑つて、いえ、用はありません。遊びに……と恚うでさ。

さあ、さういふものを何とも仕方がないので、對手にならないで引退ると、誰に談話をしようでもなし、ぼんやりと火鉢の前へ坐つて見たり、庭前へ立つて居たり、襖の蔭に踞つたり。

悪くすると、秀さんがばつたり出ツくはす、其時は顔色がおかはんなるさうで、あゝいふ方だから目に見えりや、うつちやつてお置きなさらす、ちとおはなしなさいましたなんて、あひかはらずおつしやるさうですが、新ちやん困つたもんぢやありませんか。

はじめの内こそ、皆が嫌な奴だ、憎らしい按摩だつて、敷居の上へ煙草盆を置いて躓かさうの、目が見えないから憚りなし箒を立てる、鹽を撒くと、それでもまあいくらか取合つて居たさうですが、いまぢやもう女中衆なんざ、氣味を悪がつて夢に見て魔されるといふ化方でさ。そら、瘡ッこけて、顔色の蒼いによつて如件、といふ白痘痕の、眉の消えさうなのが、日ましにやつれて、肩をゆすツて、鼻呼吸がふんく。それでニヤリと來た日にや、ちいつと人間にしちや行過ぎています。お互だつて驚きまさあね、暮合なんざ不氣味でせう。人間も何です、まだまあ人の眼



顔が見えたり、差をくる内や色氣がありますけれども、もうあゝなつちや捨鉢でね、始まつにおへたもんぢやアありません。

飛だ魔ものに魅込まれなすつた、秀さんがお可哀相でさ、

いつたやうな御氣象で、別に床に就いて入らつしやりもせず、屈託顔もなさらないけれど、ちやんとして在らつしやりや、在らつしやるほど、帯のしめ工合までが、まるで切ないのをおさへつけておいでなさる様に見えるんです。私あ思ひますがね、まつすぐに屹と立つたものは、バツタリと倒れるでせう、ほい、鶴龜。ものの譬へでさ。案じ過すのもそんなことがあつちやならな

いと思ひますからのこと。さうかといつて何處がどうといふでもなければ、お食も細るツて風説だし、新ちゃん、思ひなしか知りませんが、何だかあの莞爾お笑ひなさるのが、寂しくおなんなすつたやうで、情なくつてなりません。

と友吉はいひかけて、煙管持てる手の火鉢の上に暗うなるに、透して予が面を見しが、

「おや、新ちゃん、何うかなさりやしませんか。」

「否。」  
といふ時、駒下駄の音高く、店頭にカラリと止む。

三日月

婀娜たる聲せり。

「友さん、お精が出ますね。」

友吉は頸をのばして、

「よう、お部屋様。」

「厭だよ、不景氣な。」

「いえね、今もさう申して居た處でございますよ。何うも紫谷のお部屋様はおうつくしう在らつしやるつて。」

「ふウ、」

と笑ひながら面を背けて、柱に背を凭たせつゝ、たそがれの空を仰ぎ、

「おゝ、三日月様だ。」

と呟きつゝ、急に二足ばかり外へ出でて、

「あ、あ、新ちゃん、新ちゃん。」

予は振り返りぬ。



「乳母さん、此處だよ、此處だよ。」

と手招きせり。乳母なるべし。容色よき婦人、四つばかりの愛々しきをさなごの手をひき、招かる、ま、此方に向ひて來ぬ。

「あれ、坊ちやま、お銀さんが。」

といひかけて乳母は立停れり。

お銀といへるは、紅の袂を踞ひて、をさなごの手をおのが手に持添へる。

友吉は微笑みて、斜に顔を傾けたり。

「坊ちやん、入らつしやいまし。」

乳母は其肩に手を懸けながら、

「あい、と御挨拶を遊ばしな。」

心着けられてをさなごは、

「あ。」といひながら傾きぬ。

「はい、今日は。」

「お利口ですなえ。よくお覚え遊ばした。」

とお銀は其首を撫でぬ。

「こちらの兄様にも、御挨拶遊ばせな。」

何を予に思へとや、秀の兒を推向くる。愛らしき目の予を瞻りて、また其頭を下けたる時、

「あら、ちよいとあなた御覽遊ばせ。」

と予を顧みてお銀といへるが、あてやかにほ、笑みぬ。

あはれ、予をして抱かしめよ。予は其胸に額を伏して、思ひのたけを泣くべきなり。

予はたゞ笑を含みしのみ、ものをもいはで頷きぬ。

や、ありて乳母はお銀にいふ。

「お湯ですか。」

「はあ、お前さんは。」

「何處へ。」

と友吉もまた問ひたり。

乳母は其答はせで、肩越にをさなごの顔を差覗き、

「坊ちやん、何處へ行つて参りましたつけね、ね、坊ちやん。」

と裏問ひぬ。

をさなごは答へ得で、いぶかしげに乳母の顔を見たり。



乳母は空を仰ぎて三日月を指しながら、

「の、様ね、の、様。」

月は恰もむかひの家の土蔵の屋根と、角家の窓とのあひだに、すら／＼とたけのびたる柳の梢に青くかゝれり。乳母の言に困りて、をさなごはさとりけむ、いたいけなる掌を犇と合せて、三日月を打仰ぎ、

「母様。病氣、の、様、あ、の、様、あ、。」

と伏拜む、足許の覺束なく、よろけては、乳母の手に支へられ、うつくしき迷子札ゆら／＼と淺葱縮緬の帯房やかに結びてさげ、また拜みて屈むとて、砂を掃くにぞ、お銀は其尖を掲げ持てり。人々は見て目を合せぬ。をさなごはなほ人の答へざるに繰返しては伏拜めり。

「の、様、あ、の、様、あ、。」

堪へずなりけむ、お銀は店頭に踞ひたるまゝ、横様に膝に抱きあげて、

「お、いまに快くおなり遊ばしますよ。母様が御病氣で、お寂しからう、おかはいさうに。」と涙くむ。友吉は屹と乳母を見て、

「乳母さん、悪いこつちやないが、情ないことを教へるね。」と顔を背向けてしばた、きぬ。

乳母はしをれて首を低れたり。

「はい、さうおつしやれば、なるほど私が悪うございました。ついおもりがてらにおまるりをしますもんですから、いつかお覚えあそばして……坊ちやま御堪忍なさいまし。もう／＼母様はすぐによくおなり遊ばしますから、そんなこと遊ばすんぢやございませぬ。御氣がお鬱ぎ遊ばすかして奥様が輕う御ものもおつしやらず。お抱き遊ばしてもたゞお顔ばかり見つめておいで遊ばすので、私でさへ心寂しいもの、坊ちやまはどんなでせう。乳母や、母様かと蔭でそつとおつしやると、もう／＼胸が裂けるやうで。」

といひかけしが聲うるみき。

時に三日月のかけ淡く、人々のかほ仄になりたり。肋骨白く血の色黒かりし盲人の俤の、予が眼を遮りしが、あれと見る時柱に消えき。片膝立ちぬ。富の市！



五  
之  
卷



山櫻 女淨瑠璃 なざれの歌 翡翠

山櫻

「美人だ、そりや口でいふやうなものではない。君なんか西洋人だといふと、一概に何だ、棕櫚の毛のちぢれ髪で、脊高の尖ッ鼻の、團栗目とばかり思つてゐるだらう。まあ、ものは試だ、いえ、何も媒妁を頼まれた譯ではないが、そりや御覽なさい。クラス中の丈の高い奴よりや餘程脊が低くツて、ちつともをかしからず、莞爾する處なんぞ、まるで美しい佛様が世話で顯れたといふ倅があるよ。むかうの婦人は太く少く見えるツていへば二十五六でもあらうかな、二十位にツきや見えないけれど、それで先生だからい、ぢやあないか。君むかうの婦人は、人なかへ出て平氣だといふが間違ひだと思ふ。まあ間違ひでないにした處で、こゝはといふ豪傑どもが、總勢七十何人といふ一クラスだもの、可哀さうにいつも眞赤になつてらあな。そりや氣のほせもするだらうさ。處がね、妙といふのは、あの人數の皆にじろく顔を見られた日にや堪つたもんぢやないけれど、そこはまた能くしたもので。得て仰ぎ見るものなし、大分皆が俯向くよ。それが其何なんだ、馴れないせるもあり、多人數



なら一々名が覺えられるものでもなし、それに面とむかつて殊更で、むかうも極が悪いかして、其方の方を見て居て顔のぶつかつたものをつかまへちや、

(貴下。)といふので問題を與へるだらう。何うして分る奴はすくないから、問はれてまごつくのを恐れ入つて、いや、不殘傍見よ。

まあ来て見たまへ、君、なか／＼珍さ。此間も何だつた。ミリヤアドが、内から櫻の花を持つて来て、時間に出て、とツつきがなかつたか、はじめの内は黙つて、うつむいて、かう、兩手で、胸ン處へ花をあてて、頻りに見詰めて居たつて、其何うもあどけなくツて、美しくツて、品のいゝ趣ツたらなかつたもの、僕はじめ見とれたさ。するとね、何とかいふ、熊の様な英雄が一人クラスに居る。其に其目がぶつかつたと見えて、

(貴下、何、此色は?)

とつか／＼と寄つて櫻を見せてさ、そして指をさして問うたんだ。わざ／＼内から材料を持つて来た位、腹案があつたらしい。答は英語ですることになつてたんだが、桃色とでも、薄紅とでもいつて欲しかつたものと見える。それにしちやね、君、對手が悪いぢやないか。僕のやうな風雅男を、それ見計らつて聞けばいゝのに。

英雄や、しばし無言で、口をむぐ／＼とやつて居たつて、仰山に卓子をたゝいて、

(む、や、やまと魂!)とやつた。わかるまい。

通じないので問返すと、

「やまと魂の色です。其やまと魂……え、ジャパニイス……」

といひかけて、してやつたといふ顔でにつこりして、

(ジャパニイス魂のやうな色です。)ツさ、秀句だね。此人にして此答あり。英雄、山櫻と解いたんだ君。

ちつと見當違ひの答案だから、ミリヤアドは妙な顔をして、

(いゝえ、色です。色のこと。)

とやり返すと、英雄居丈だかになつて、

(なあ、諸君。)といふので、號令のやうな聲を出すと、兒分大勢、違ひません、そりや大和魂、大和心です。と疊みかけて五六人きそひたつていつたもんだから、そこはもう一概に自分の思つてることを立通して、

(いゝえ、違ひます。)

(違ひません大和魂!)

(いけません、—大和魂—いけません。)



ときつぱりいつて、つんとむかうを向いたんだ。さあ、堪らない。國家の干城を以て任じてる連中だから、愾くいはれて靜まるものか、英雄腕まくりをして、

(何だ、いけない。)

と席を立つて、づいと出ると、ばら／＼と五六人列を亂して立つやつさ。」

### 女淨瑠璃

「失敬な、大和魂がいけないたあ何だ。」

(詰問しろ。)

ツて、君、なぐりかねない勢で詰懸けるんだもの、ぢいツと見ながらあとすさりをして入口の處で押着けられて、

(御免なさい、御免なさい。ツて悲しい聲で、君、わびたらうではないか。)

やう／＼あの頭を七分三分にキチンと濡らして分けてる色の白い幹事が来て、みんなを取さへて、やう／＼治めたが、ミリヤアドがね、廊下を、君、俯いて出て行つたぜ。

もう來やしまいと思つて、僕なんざ、頗る詰らない感情を起して居ると、あくる日もあひかはらず出て來たが、ひどくしよげて、無用心にや、ものもいひ得ない。もとからちつとふさぎ込む

婦人だつたが、それ以來はまた格別さ。けれども其故か、いつそ内氣に、しとやかになつて、ときたま笑顔を見せる時も、何かあはれみを乞ふやうに見える、しをらしくなつたから、僕なんざ大恐悅。

おかげさまであの學校は男教師の洋服の着こなしたものだ。どうやら然うみんなで顔を見たり、張る氣だつたりするのを見ると、教師とはいふものの、何だ、まるで學校のかんぱんのやうで、煙草屋の寫眞だの、雜誌屋の油繪だのと、たいした違ひはないけれど、ありや何だ、思ふに豊でないらしい。

其證據にや、それこそ垢のついたもんなんざ、さすが着ちや出ないがね、もうちつとも飾ツ氣のない、一色で、手袋だつて、手巾だつて、君、木綿ものを持つてではないか。

何時もつツと入つちや直ぐ教場へ出て、濟むとまた直ぐに其教員の溜の前まで行つて、敷居も跨がないで遠くから挨拶をして、其ま、出て行く、しじううつむいてるから、しをらしいや。

それに往來を歩行く時だ。他の奴あ、いやに反りやあがつて、見てくれがしに風を切つて通るといふもんだけれど、其は全くだ、實にひかへめで、傍見もしないでさつさと歸る、何か愾う、はにかんででも居るやうで、服装が悪いせるとでもいふのかな。おなじ國の者にでも顔を見られるのが厭な様子さ。



何うしたといふんだらう。何でもあんまり、人づきあひをしないのに違ひはない、一本だちでひどく心細いといった様子だ。

僕なんざ、大に同情を表する一人さ。つい此間も何ね、あまりゆかしい気がしたんで、門口でちやうどあつた時、

(會堂はどちらです。)ツて問うたよ。考へた、だしぬけにお宅はともいへないやね、さうするとあのちよいと顔を赤くして、うつくしい前歯を少し見せて笑つたね、おい、聞いているかい。」

「聞いているよ、何だ、遠まはしに妙な處へ持つて来たぢやないか。」

「いえ、悪氣なし、聞き給へ。さうすると、其何かいつたが英語だからわからなかつた。が、澄して(いえす)と答へたさ。」

「度胸のいゝもんだ。(氣障だよ、此人は)とでもいやしないか。」

「大きにさ。」

「そこで御本人(いえす)と答へたはい。」

「昨今だからね。はゝゝ、けれど、くはしく番地をいつたよ。で、其家は前で覗いたばかりだが、ちつとも會堂らしくはない、柴垣の木戸附で、すぐ縁側が見えようといふ、まづな四室ばかりの一軒家だ。門に古い名札の引べがしたあとがあつてさ、其わきに假名で、ミリヤアドとば

かり、窓かけも何にも見えない。鉢木が三つばかり縁さきにあつて、すかすときものがかけてある、女住居と見える。婆さんが庭を掃いて居たつけ。間違へてうちを教へただけれど、別にそれが縁にもならず、見たばかりで歸つたが、君いゝぜ。美人だといふに、まあ来て見給へ、授業料は女義太夫へ十日ばかり行く分だ、安いものさ。」

と壁越に人憚らぬ高談話、新次こゝにあるを知らでや語る。

### なざれの歌

時間は適宜なり。東京の繪入新聞二種ばかり讀み聞かせたまはむには、其報酬といふをもて、月々の費を給すべしと、ミリヤアドのいふまゝに、當時渠が住ひたる麻布の最寄に下宿して、日毎其許に通ひたり。

上京せし後、ミリヤアドに逢ひたるは、はじめて都を見たる年の冬、クリスマス夜の夜なりき。

外國の婦人の名だかくつくしきが、洋琴を奏でて、わが(なざれの歌)を唄ふ番組あり。來り見よ、と其折から、予が學費を補助したる林ながしの男に、山子といふ人、予を誘ひたれば行きぬ。

をさなきものの聖書の誦誦、會話など二ツ三ツ濟みし後、洋行がへりの紳士がなせし感話とい



ふもの、あまり長かりしかば、予は暖かき暖爐の傍をば離れて、入口の右手に番人が住める一室に入りたり。皆一堂に會しつゝ、其夜の興象たけなはなる頃なりしかば、室の片隅に煤けたる笠被せし二分しんの釣らんぶのかゝれるのみ。火鉢の火も消々なりしを、辛うじて蓆につけて、つめたき風心地よくつゞけさまにくゆらせし、煙の形おもしろく、むら／＼と低くなびきて、むかうざまに立ちわたる、襖のかけの、うすぐらき柱のなかより、髪、容、あざやかに、うすく化粧うたる女の十七八と覺しきが、徐に出でてわが方に進み寄りぬ。

「御免遊ばせ。」

思ひ懸けず、予はすかし見たり。

「あの……誠に申かねましたが、外國人だものですから、それに何でございます、あつちは大勢で、頭痛がしてなりませんさうで、少しばかり休まして居りますので、飛んだわがま、な、申譯もないことですのでけれど、何卒あしからず、大そうあの、何を、嫌がるんでございます。もう推しつけがましい、申しかねますんですが、お煙草を、あのちよいと堪忍なすつて、いえ！もう此室はかまひません、何誰でも御自由にめしあがります。奈ういたして咎立てをいたすなんて、あなた、飛んでもない、奈ういたしまして。さつきからちよい／＼こ、へお入りなさつちや、皆さんがめしあがりますが、何とも申しはしませんけれど、あんまりお氣毒で私が差出がましくお頼み

申すのでございます。皆さんは二三人づれでお入り遊ばすので、私も極りが悪くつて申されませんで、其まんまで見てましたつけが、ついお年もお少し、お一人だもんですからまあ申上げて見ようと思ひ存じまして、つい、お背き下さいまして何うもありがたう存じます。飛んだ地獄ですこと、おほ、。」とばかり立あがるを、予はたゞ黙してうなづきたり。

女は其のま、彼方に行きぬ。すかし見れば灯の光のいたらぬ限に、いま一人俯向きて人立てりし、と見るとき其もの歩を運びて、上靴の音なづるやうに近づきながら、

「すみません。」

と正しくいひたり。思はず立ちて、

「ミリヤアド！」

とばかり進み寄りぬ。ミリヤアドは一足すさりて、ちつと此方を見詰めにき。

しばしありて、来て、うつくしき手をのべつ。

予が指はわな、きぬ。あはれ此上手のかなづるよ。山子の「なざれの歌」には過ぎたり。

翡翠

ミリヤアドは深くもの思ふ目に此方を見て、眉宇の間に心を籠めつゝ、



「何故……」

と早や詰り出でたり。頓に應ぜむすべあらで、しばらく顔を見合へる折しも、ハタ／＼と手を拍つ音。紳士が感話果てつと思ふに、忽ち戸の外にあわたゞしき楚音して、山子は急ぎ来て、「それでは唯今、ちやうど人も揃ひました。君來たまへ。ミリヤアドお早く。」と何かしきりに急き居れり。

ミリヤアドは無言なりしが、そのまゝ手袋を脱ぎて打揃へ、衣兜にいれて立直りぬ。傍より、

「唯今。」

「來たまへ、君。」

といひあへず、山子はいそ／＼として出て行きぬ。ミリヤアドの予を見返るを、女は互に顔を見て、

「まあ、あとでおゆつくりおはなさないまし、待つてるでせう、あなた。」

うなづくと、やがて出でて、あまたの來客と女學生の多人數が二ならび椅子にかゝれるなかを、肅然として横ぎりぬ。其の横ぎる時、わきめもふらで、さら／＼とさばくとて、右に、左にひたうつ裳の、泥まみれなる人の靴さきに觸るゝもいとはで、たをやかなる身をや、横さまに、せま

き人なかをすりぬけつゝ、祭壇の傍に据ゑたりける洋琴に打むかふより、直にうたひはじめたり。衆はみな耳を澄せり。

山子がてら／＼とぬれ色見せし天窓の髪、ていねいに撫附けたるが、音調の一抑一揚、光澤をおびて、七分三分にあなたこなたに動いて見ゆ。

曲は讚美歌、九十の譜、歌こそは星月夜の、ナザレに於ける羊かひを七五の調にてうたひしものなれ。予はしば／＼山子の口より讀きかされ、其拙なさをば語じたり。

ミリヤアドが聲の清らかなると、あまりに其しらべの妙なるとに、予は人ごとのそれながら、うら恥かしくもまたあはれなるに、全くは聞くに堪へず、歌はいまだ半ばなるに、座を立ちて、再び番人の室に忍び入りぬ。

耳は蔽ひたれど、聲の透れば、なほさわやかにぞきこえける。かなではてつ。喝采の聲哄と起りて、かなたには鳴りもやまざるに、ミリヤアドのいたくつかれし姿は、疾く戸口に歸り來れり。女はハタとあとをば鎖しぬ。

「まあ、ようございました。」

ミリヤアドはといきをつきて、衣兜より手袋を取出し片手をはめながら予を見たり。予はそのつかれしさを見ゆるが悲しかりき。慰めんとて微笑みて、



「あんな長いのを、よく覚えました。」

「え、二月か、りました、私頭痛がして、気分が悪い。よく覚えられませんで、ことわつたの。けれども神様につかへる務だといつて、堪忍しません。私どうしても覚えられないで、あやまりましたけれども肯きません。何うしてもうたはなければなりません。頭痛がしました、酷うございしました。あたまが重くツて起きられない。無理に勉強して覚えました。上杉さん、恥かしい、あなたは覚えがよくなつたでせう。」

と、しみじみといひてまたといきせり。

予はおもはず憤然として、

「あんな、つまらないものを。」

「え。」

「何です！子守唄にもなりやしない。」

いひ放てる胸はすが／＼しくなりぬ。

女は横をむきて手を其面にあてたり。

ミリヤアドは目を睨りて、さわがしきあなたをキツと見たるが、ぴり、と手袋を裂いてすてて、  
「私は洋琴を十年。」

とて身をふるはして忍び泣きぬ。

やがて端然と姿を正して、

「歸りませう。一所に、直ぐ、上杉さん。こんな、こんな教會、私は最初から嫌だつたの、日本のおともだちがみんな勧めます。きかないと、もうともだちでないといひますから、寂しいから参りました。あんな歌、それでもみんな立派な歌だといつていただきました。口惜しいこと、そんなものにはあはせるため音楽は習はないのを、みんなで、私をなぶつたの。まづい歌、悪い人、もう友達になつていりません、高津さん。」

と女を見て、

「おいで！歸りませう、上杉さん、さ。」

と風采凛として、気色ばみたる面だけかう、戸を出づると入り違ひに、山子はものをかへて、であひがしら、うれしげに立迎へ、

「よく、忘れないで。結構、贈物をみんなに分けました。貴女の分、番です。は、は、は、うつくしうございませぬ、誰が贈りましたか知らん。」

と上機嫌の笑ひ高く、一雙の翡翠の剝製なるを、見よがしに、ミリヤアドの胸のあたりに差寄せて、



「ね、翡翠、翡翠の贈物。」

といふ聲やまず。ミリヤアドはおもてを赤めて、手強く拂ひ退けたれば、渡さむとして手の弛める、籠はハタと床に落ちぬ。

翡翠の位置も、山子の顔色も、満場の光景も、ミリヤアドがひや、かに戸を出づる時みな變り。變らざるはたゞ電燈の光と、つや、かなる、山子が天窓の髪分けめとのみ、相てらして依然たりき。

少年の情の激したる、何の考ふこともなく、山子をば見も返らで、予は直ちにもなはれて、ミリヤアドの家ゆきぬ。

## 六之卷



卯月朔日　みなし兒　袖の雨　母上　坂の下

卯月朔日

ミリヤアドが學院に於ける境遇の、聞くが如きものならむには、予はあまり不慮過ぎたり。渠に教を受くるものは、皆予がミリヤアドに對するとおなじものぞと、思ひしは誤謬なりき。さることとも知らざれば、今朝も新聞讀まむとて行きたる時も、ミリヤアドはなほ臥床にありて心地あしとて起きざるよし、高津のいひたるが、またわがまゝの起りしよとのみ、心にも留めで一室なる額の繪など見まはしなどす。ふと思ひあたりたるは、其日の卯月朔日なりしことなりけり。大方の人は知りてやあらむ、(えぶりる、ふうる)の當日なるを。よきこと思ひ出でたり。懐しきミリヤアドに、いでわれ心ばかりのもてなしをせばやと思ひぬ。

「まだ何うもお寒いぢやございませんか、上杉さん。」

高津はかく聲をかけて、ミリヤアドが臥床に行く。手にせる珈琲茶碗には、温き牛乳を入れた。戸も襖も冷かなる朝風に濃かなる湯氣の立てるが見ゆ。

「ちよいと、牛乳かい。」



「はあ、何うしたの。」

「まあ少し待つて御覽、僕がね、今好い事をするから、ちよいと、今朝米を磨いだんでせう。」

「磨ぎましたよ。」

と顔を見る。

「あつてくれりや可いが、氣なしたから棄ててしまつたんでせう、あのね。」

「はあ。」

「磨水はありませんか、米の、何、少しでい、けれど。」

「へい、何になさるの。」

「何でもさ、少うしありや可いがなあ。」

「見ませう、待つて頂戴。まあ、牛乳をあげてから。」

と行懸る、前途を塞ぎて微笑みつ、

「それを飲ましツちまつちや仕やうがないや、耳をお貸し、ね、可いでせう。」

高津は目を睜りて一足すさり、

「まあ、そんなことを。」

「可いからさ。何他の日ぢやなし、今日のことだもの構ふもんか。」

「それでも何ですよ、頃日は大抵、何や、彼や、苦勞をして居なさるんですから悪うございませう。眞個にさ、そこどころぢやあございせんわね。」

「そんな陰氣なことばかしいつておいでだから不可んだ。一番笑はうのに、可いぢやないかね。」

高津は少し考へたり。

「それも然うですね。新さんなら可うございませう。悪く取つたつて、腹は立てもしますまい、では。」

「あのね、よく沸かさなくツちや、身體に悪いと大變だよ。」

「は、可うござんす。」

牛乳持ちたるま、高津は勝手にゆきぬ。予は見送りてひとり笑壺に入りたり。

良ありて予があつらへを齎らしたれば、先づなめて鹽梅を試むるに、鹽を少し加へしなど、其不味いはむ方なきに、思はず打撃みたる予が顔を見て、高津はまた更にきづかひぬ。

「餘りですわ、まあ止ませうぢやアありませんか。」

「可いよ、可いよ、そつとおし、早くさ。」

と無理に推遣りて其臥床に入るを見るよりはやく、あとを追ひ行き外に立ちて、襖に耳をあてて聞きぬ。



寝返る氣勢す。

「然う、上杉さんが煮てくれて。」

といふはミリヤアドなり。わが胸はさすがに轟きぬ。

「あれ。」と呼びて高津の走り退く音したれば、予は慌しく遁げぬ。ミリヤアドには首尾よく米の磨水を飲みおほせき。

門口に出づるひまなくて、庭下駄を引懸げさま、背戸の戸をあくる時、寢覺の顔にやつれの見えて、髪少し亂れたるミリヤアドの、身にはゆるやかに夜の衣まとひたるが走り來て、縁側に出でたるが、はれがましき日向の庭には下り立ちあへず、莞爾と笑ひ、予が名を呼びたる、口惜しき状見えき。

「御機嫌よう。」

といひすてて其ま、歸りぬ。

### みなし兒

人の風説聞きたれば、予は其夜ミリヤアドが家に行く道を、しをくとして通りぬ。かくのごとくなりしことは未だ一度もあらざりしを。幾度も繰返して、予はあまり無遠慮なりし、と心咎

したればなり。

まだ宵なれば、門は鎖さず。寢音も忍ばれつ、勢なく進み入る、其框の戸はなかなば閉ざれたり。さうなくは上りも得やらで、しばしイみ、差覗くに、今朝われ庭口より遁歸りたれば、庭下駄を穿きて、こゝに忘れおきしその穿きものは正しく向をかへて揃へて直されたり。見るよりふと予を待ちつゝあるかの感起りぬ。

急しく呼びぬ。されど低聲にて、

「高津さん、高津さん。」

「はい。」

といふ聲耳許に聞え、ぱつとさす燭の影に紅なる色こそ見えたれ。しとくとある緋縮緬の長襦袢のみ引絡へる、胸高に扱帯をわがねて、ゆるやかに結びさげ、燭をかゝげたる、白く清げなる腕あらはに、裕をもれたる膚の色雪を欺くに、燃立つばかりなる紅の照り添ひて、嬋嬋に立つたる姿、けやけくあざやかなる美しきものふるまひに面をうたれ、予はものもいひあへず目を睜りて立ちぬ。

紅なる立姿は、片袖をかざして予に其面を背けつゝ、透し見るや、頭をば少しく傾けて、身動もせざりしが、予が呆れ顔可笑しかりけむ、堪へ兼ねたる笑ひ聲、ふつとばかり吹き出すより早



く、落すやうに燭を置いて、身を返さず奥の方に走り入りしは、うつくしき外國人なり。あとに續きて足早に入りぬ。椅子にかけたるミリヤアドは見るよりまた微笑みぬ。

高津は背後より背を叩けり。

「お手柔かなしかへしで、まあ新さんも結構でございました。お驚きなすつたでせう。」

「何うも、實に。」とばかりなりき。

高津は頻りに打笑みつ、

「何うして新さんを驚かすまでにや、大抵な騒ぎではありません。もう一日がかりの御趣向で、やうく出来あがつたんでございますわ。待つても急に、見えなさらぬものだから、薄着であなた、先生がお困りだらうぢやございませんか。寒いんですもの。ぶる／＼震へて在らつしやるのよ。あら、串戯ぢやありません、ほんとうに、貴下風邪をひきますよ。」

ミリヤアドは肩をすぼめて、何とかしけむくづぼれし、頤をば襦袢の襟に埋めて居たり。背より軽く羽織らせたる、高津の手を密とおさへて、ミリヤアドは顔をあげぬ。

「まあ待つて下さい、」

予が方に打向ひ、すゞしき目に涙をうかべて、

「上杉さん、貴下も母様がありません。」

と沈みたる聲にこそ、さはまたわれを泣かするや。さしうつむきてうなづきぬ。

かくいひ出してはミリヤアドが、其母のことを語りつぎて、予を泣かしむるが常なりき。

母はわが國の婦人なりし由。父なる人ゆゑありて其故郷に歸る時、ともなはむといひしかど、大和の地棄て難くて辭みしかば、さりとも強ひかねて、女兒のみ引放ち、洋を渡りて米國に歸りしはミリヤアド三歳の年のことなりとぞ。

父年老いてみまかりたれば、たよりなきみなし兒の、たらちねの懐しとて、一人のみまたわが國に渡りしかど、二十歳あまりは二昔、其人の行方知れず。恵みもし、欺むかれもし、つかひもなくして、大方の財産ははた失へる、日毎心細くなりゆくに、彌増に戀しく慕はしき母にはめぐり逢はずといふ。おなじ繰言も血を吐く思は、いつもほとゝぎすの初音とこそ聞け、予は其時も涙ぐみぬ。

### 袖の雨

予が涙ぐみたるを見て、ミリヤアドの、あれよといひたる、身の動きに椅子は摺れてぞ音せし、風もなく朧夜の静なり。

「否、ね、御覽なさい、美しいでせう、きれいだこと。」



と緋の長襦袢の袖を引き、襟のあたりを撫でても見せ、

「御覽なさい、きれいでせう。」

また少し椅子をば寄せぬ。

高津は背より、

「おや、あかん坊のやうですこと、うつくしいきものを見せてすかすぢやありませんか。新さん、をかしいね。」

「何、綺麗だよ、ミリヤアド、そりや、高津さんの衣ですか、よく似合ふんだもの。」

「い、え、高津さん、澤山衣持つて居ました、みんな、私のために、あの……」

とや、激して言ひいつ。予は驚きて高津を見たり。女は慌しく遮りて、

「あら、そんなことをいふもんぢやありません。新さん、うそですよ。」

「い、え、ほんとう。みんな私に貸して、もう何にも持つて居ない。可哀相に抽斗はからッぽになりました。」

と寂しく笑ひぬ。

「だつて、其代り私にや母様があるから可いぢやございせんか、ねえ、新さん。」

予は答ふる處を知らず。

「ミリヤアドはお可哀相に、便のない方ですもの。些少はお力になつてあげる人がありさうなものだのに、見ツともない、みんな(なざれの歌)ばかりで、餘計な世話までしたがるんですもの。誰がそんなものに世話をして貰ひますもんかね。おなじ國の宣教師なんぞ頼もしくもない、わざと困らせて、仕様がなくなつた時分に、何うにかしようとするんださうで、もう此節ぢや寄りつかず、大方此方から泣込むのを待構へて居るのでせう。教會へもあれツきり入らつしやらす、學校は學校でまた何ですツさ、随分つらうございますツて、私や毎朝學校へ入らつしやるのを送るたびに、後姿を見ちや、あ、觀物になりにおいでなさると、いつも然う思ひますわ。おうつくしいし、お若いので、何處にかねえ、新さん、先生の様子があります。まるでなぶりものにするんだもの。私や口惜しくツてならないけれど、いま彼處をお留めなすつちや、他に收入の道はなし、それこそまた、(なざれの歌)や宣教師に嫌味なこともおき、なさらなくツちやなりません。それも何だし、(なざれ)だつて、意地になつて、新さん、あなたの學資までお手つだひをしないやうになつたぢやありませんか。皆なそれです。まだまあ名義だけでも先生で在らつしやるのが可いと、私も存じますから、時々もう我慢が出来ないとおつしやるのを、無理に勧めちや出してやります。ほんとに涙が出るんですの。」

家へお歸りなすつたつて、それこそ私が届かないから、慰めてあげることも出来ません。始終



くよ／＼して在らつしやる、まあ、御覽なさい、今日はあなたをだますんだつて、朝から元氣よくお騒ぎなすつて、こんななりをなすつてからに、何うも、震へて在らつしやるんです。それでも、何なにか氣晴になつたでせう。これが新さん、精々なお樂なの、はかないねえ。」

といひかけて、ミリヤアドの背後に立ちつゝ、肩に衣服を被せかけながら、あらためて語を繼ぎ、

「ねえ、ミリヤアドさん、私のことなんざ、何うでも可うござんす。そんなことをおつしやらないで、おもしろいお話でもなさいましな。」

「否、濟みません。皆なくしました、何うしたら可いでせう。心配するけれども仕方がない。高津さんは國から歸れといひます。けれども、私が可哀相だつて歸らないで居てくれます。家で大變怒りました、もう構はないつていつて寄越しました、而して二人とも婦人です、高津さん、私、二人とも婦人です。」

と兩手に胸を搔抱き、

「母様には逢はれません。もうなくなりましたかも知れません、これは記念です、母様が着て居ました。」

とうつむきさま、袂を取りて引きのばして、つく／＼見たる襦袢の袖に、はら／＼と落涙せり。

## 母 上

高津は其背を搔擦りぬ。や、ありて思ひかへせしさまに、あはれなる顔をばあげき。

「上杉さん、貴下の母様もこんなきもの着て居たでせう、然うでせう。」

ミリヤアドのわけもなきことをいふ、高津とわれ顔を見合せぬ。

母上の紅き手がらかけたる髪結ひて、欄干に倚りたまひしを、目にきざみたるものの、嘗て予に語りしことあり。さる時や、兒なる予が今の年よりも一ツ二ツうらわかくて、かゝるものも着たまひしなるべし。なつかしき紅の色なるかなと、くもりたる目におぼるげながら、霞のなかの色どとばかり、ミリヤアドの姿瞻りぬ。

「ね、然うでせう、矢張着て居たでせう。」

とうら問ふまゝ、或は違ふまじと思ひて頷きぬ。いかなりけむ、予は茶博多の帯のみ目に残れど、紅き手からかけたまひしことありと人のいへば。

予が頷くをみて、ミリヤアドもまた打ちうなづき、

「上杉さん、私、母様の着物を着ました。母様、ね。而してあなた、母様がおありでない。こゝに母様が居ます。もう泣かないでも可い、私も母様がありません、私が母様です、母様がありま



すからミリヤアドも泣きますまい。あなた、ミリヤアドになつて、私が母様になつて、あなたが上杉さんで、私がお母様で、而して遊びませう。今晚は四月一日、あなたは今朝私をだましました。こんな母様、あなたは厭でせう、けれども、だまされるが可い、うそならば構ひません。」

母ぞといふより、血の色其頬にのぼり、目の中さえくしく、眉動きて、肩を震はし、つと立ちて、椅子をはなれ、引寄せて、予が手を取りたり。

高津は莞爾と笑ひながら予がつむりを撫でぬ。

「大きな坊やが泣蟲だねえ、どれおめざを持つて來てあげませう。」

とまた打笑ひて勢よく室を出でたり。

ミリヤアドは太く激せる狀にて、つくつくと予が顔をみまもりぬ。

「ミリヤアド。」

と叫びつゝ、ミリヤアドは、あはれなる其兒の額に接吻せり。つめたき髪は予が頬にふれて、あたく柔かなる其白き胸は、躍りたる予が動悸をおさへぬ。

蹙音したれば身を分てり。

### 坂の下

高津は菓子皿を据ゑ持て來り、卓子の上に置いて、いざとて勸めしが、手のふるへたれば取らで差置きぬ。

「めしあがれな、をかしの坊やだこと。ほゝゝゝ、」

ともてなし顔に、一ツ取りてさしよする、拳ばかりの大ききなる、名は知らねど辭みも得で、手に取りて口をつけたるに、意外なる舌觸を、わが唾かわきつ、とのみ怪しきまで、いま一齒ぞかけたる。

「おや!」と思はず叫びぬ。

「好い氣味!」とミリヤアド手を拍きて笑ふ。

「それ御覽なさい、やうく敵を取つてあげた、ミリヤアドさん、可うございましたねえ。」

「あゝ。」といふ面はれやかなり。

「そりやもう私といふ、助太刀がついて居るんですもの。新さん、綿の館といふものは新發明ですが、いかゞなものでございますね。何うでございました。折角、ミリヤアドさんと二人で拵へてあげたの、大抵な御馳走ぢやありませんよ、澤山おあがんなさいまし、まだ、いくらでもございます、何うです、もう一ツ、たつた一ツめしあがれな、いゝえ、餘所ではなし、御遠慮には及びませんよ、おほゝ。」



と獨悦に入る。

「御馳走様、もう澤山。」

「いゝえ、それがあなた、さうおつしやるのが餘計な御遠慮と申すものでございます。何の書生さんが菓子をばくつくのは當前でございますわ。さあ、めしあがれ、よう、おあがりなさいましな、お、嬉しい。」

「馬鹿だねえ。」

「まあ、人が折角志をお勧め申すものを、そんな御挨拶つちやあるもんぢやございません。お氣には入りますまいけれど、何うぞ召食つて下さいましな。」

とわざとらしく揉手をしながら、高津の嵩にかゝりたる、予の困じたる、二人の状をば、つくづくと見たるミリヤアドの晴々しきさまに引かへて、然も憂はしげに、聲も沈み、

「もう堪忍、澤山です、可哀相。」

といひかけて、くはせものの菓子的一個を手に取りて、ものをもいはで視めしが、ふるふ手さきの瘦せたるを、予が肩にかけてうつむき見つ、

「坊や、眞個にこればかり、さうでない御馳走をしたくつても、今日は出来ません。私貧乏、母様、意地氣がない、堪忍して、上杉さん。」

と情れたる目の中に露を宿し、思入りたる状なりしが、何とかしけむ、空を仰ぎ、美しき眉根の蹙むと見えつ。苦と叫び、胸をおさへて、よろ／＼と倒れかゝる、長椅子に足を投げつ、腰を振りて身を絞り、片手を卓子につきて掌を口にあてし、はんけちの裏透す、血汐の紅、眞白き指を洩れて見ゆるに、啊呀とばかり継り寄る、高津も顔の色をかへたり。唯一度のそれながら、多量の咯血に弱り果てて、綿の如くなりたる身體を、搔抱くやうにする、予も夢心地に手を添へて、助けて臥床に入らしめたる、素人の二人が手して、水よ薬よといふ容體かは。

高津はといきして咳く如く、

「咳はなざるし、顔の色はお悪いし、こんなことでもなければ可いと思つて居たに、」

と聲をうるます心細さ。

「何處、醫者を、醫者は、」といふのみ。

「いゝえ、あなたが行らつしやつても一寸は分りません。近うござんすから一走行つて参りませう、お頼み申します。」

と早や帯を引緊むる。

「それでも夜分だから。」

「構ひますもんですか、其上かういふ時は、男の方が力になります。病人も何んなにか、あなた



を便たよりにして居ませう。洋燈ランプをあかるくしてあげて下さい。つい一走り、可ようござんすか、新しんさん頼たのみました。」

といひすてに、忽たちまち門かどの戸とに登あしおと音聞きこゆる、四角よつかどあたり犬いぬの聲こゑ、うらかなしげに吠ほえ出いだして、表おもて、裏町うらまち、坂さかの下した、一齊いっせいにうなりかはす、山やまの手ての大路おほぢ夜更よふけたり。

誓之卷



團欒 石段 菊の露 秀を忘れよ 東枕 誓

團欒

後の日のまどるは樂しかりき。

「あの時は驚きましたたつねえ、新さん。」

とミリヤアドの顔嬉しげに打まもりつゝ、高津は予を見向きていふ。ミリヤアドの容體はおもひしより安らかにて、夏の半一度その健康を復せしなりき。

「高津さん、ありがたう。お庇様で助かりました。上杉さん、あなたは酷い、酷い、酷いもの飲ませたから。」

と優しき、されど邪慳を装へる色なりけり。心なき高津の何をか興する。

「ねえ、ミリヤアドさん、あんなものお飲ませだからですねえ。新さんが悪いんだよ。」

「困るねえ、何も。」と予は面を背けぬ。ミリヤアドは笑止がり、

「それでも、私は血を咯きました、上杉さんの飲ませたもの、白い水です。」

「いゝえ、いゝえ、血ぢやありませんよ。あなた血を咯いたんだと思つて心配して在らつしやい



ますけれど血だもんですか。神経ですよ。あれはね、あなた、新さんの飲ませた水に着て在らつしやつた襦袢のね、眞紅なのが映つたんですよ。」

「こじつけるねえ、酷いねえ。」

「何のこじつけなもんですか。眞個ですわねえ。ミリヤアドさん。」

ミリヤアドは莞爾として、

「何うですか。ほ、ほ、」

「あら、片鼠尾を遊ばしてからに。」

と高津はわざとらしく怨じ顔なり。

「何だつて然う僕をいぢめるんだ。あの時だつて散々酷いめにあはせたぢやないか。亂暴なものを食べさせるんだもの、綿の餡なんか食べさせられたのだから、それで煩ふんだ。」

「おや、飛んだ處でね、だつてもう三月も過ぎましたぢやありませんか。疾くにこなれてさうなものですな。」

「何、綿が消化れるもんか。」

ミリヤアド傍より、

「喧嘩してはいけません。また動悸を高くします。」

「ほんとに申戯は止して新さん、きづかふほどのことはないのでせうね。」

「い、え、わけやないんださうだけれど、轉地しなけりや不可ッていふんです。何、症が知れてるの。轉地さへすりや何でもないつて。」

「そんならようござんすけれど、而して何時の汽車だツけね。」

「え、もうそろ／＼。」

と予は椅子を除けてぞ立ちたる。

「ミリヤアド。」

ミリヤアドは頷きぬ。

「高津さん。」

「はい、ぢや、まあいつていらつしやいまし、もうねえ、こんなにおんなすつたんですから、ミリヤアドのことはおきづかひなさらないで、大丈夫でござんすから。」

「それでは。」

ミリヤアドは衝と立ちあがり、床に二ツ三ツ足ぶみして、空さまに手をあげしが、勇ましき面色なりき。

「こんなに、よくなりました。上杉さん、大丈夫、駈けて見ませう。門まで、」



といひあへず、上着の片襖搔取りあげて小刻に足はやく、颯と芝生におり立ちぬ。高津は見るより、

「あら、まだそんなことをなすツちやいけません。いけませんよ。」

と呼び懸けながら慌しく追ひ行きたる、あとよりして予は出でぬ。

木戸の際にて見たる時ミリヤアトは呼吸忙しくたゆげなる片手をば、垂れて高津の肩に懸け、頭を少し傾け居たりき。

### 石 段

「いゝめをみせたんですよ、だからいけなかつたんです。あの當時しばらくは何ういふものでせう、其はね、眞個に嘘のやうに元気がよくおんななすツて、肺病なんてものは何でもないものだ。こんなわけのないものはないツてつちや、室の中を駆けてお歩行きなさるぢやありませんか。さうしちやあね、(高津さん、歌をうたツて聞かせよう)ツてあの(なざれの歌)をね、人の厭がるものをつかまへてお唄ひなさるの。唄つちや(あゝ、こんなぢや洋琴も役に立たない)ツて寂しい笑顔をなさるとすぐ、呼吸が苦しくなツて、顔へ血がのぼツて來るのだから、そんなことなすツちやいけませんツて、いつでも寢さしたんですよ。」

しかしね、こんな鹽梅ならば、まあ結構だと思つて、新さん、あなたの處へおたよりのするのにも、段々快い方ですからお案じなさらないやうに、然ういつてあげましたつけ。

さうすると、つい先月のはじめにねえ、少しいつもより容子が悪くおんななすつたから、急いで醫者に診せましたの。はじめて行つた時は、何でもなかつたんですが、二度目ですよ。二度目にね、新さん、一所にお醫者様の處へ連れて行つてあげた時、まあ、何うでせう。」

高津はちつと予を見たり。膝にのせたる掌の指のさきを動かしたつ、

「彼處の、あればかりの石壇にお弱んなすツて、上の壇が一段、何うしてもあがり切れずに呼吸をついて在らつしやるのを、抱いて上げた時は、私も胸を打たれたんですよ。」

まあ可い、可い！こゝを的に取つて看病しよう。こん度來るまでにはきつと獨でお上んなさるやうにして見せよう。さうすりや素人目にも快くおんななすつた解りが早くツて、結句張合があるとと思つたんですが、もうお醫者様へ行らつしやるのが出來たのは其日ツ切。新さん、矢張りけなかつたの。

お醫者様はともいけなかつて云ひました、新さん、私やちつと堪へて居たけれどね、傍に居た老年の婦人の方が深切に、(お氣の毒様ですなえ。)

といつて呉れた時は、もうとても我慢が出來なくなつて泣きましたよ。薬を取つて溜へ行ツち



や、笑つて見せて居たけれど、どんなに情なかつたでせう。  
様子に見せまいと思つても、ツイ胸が迫つて来るもんですから、合乗で歸る道で私の顔を御覽  
なすつて、

(何だねえ、何うしたの、妙な顔をして。)

と笑ひながらいつて、憎らしいほどちやんと澄して在らつしやるんだもの。気分は確だし、何  
にも知らないで、と思ふとかはいさうで、私やかはいさうで。

今更ぢやないけれど、こんな氣立の可い、優しい、うつくしい方がもう亡くなるのかと思つた  
ら、ねえ、新さん、いつもより百倍も千倍も、優しい、美しい、立派な方に見えたらうぢやあり  
ませんか。眺へて拵へたやうな、かういふ方がまたあらうか、と可惜もので。可惜もので。大事  
な姉さんを一人、もう、何うしようと、我慢が出来なくなつてね、車が石の上へ乗つた時、私や  
ソツと抱いて見たわ。」とぞ微笑たる、目には涙を宿したり。

「僕は何だか夢のやうだ。」

「私だつて眞個にやなりません位ひどくおやつれなすつたから、ま、今に覽てあげて下さいな。  
電報でもかけようか、と思つたのに。よく早く出京て来てね。始終上杉さん、上杉さんツてい  
つて在らつしやるから、何んなにか喜ぶでせう。しかしね、急にまたお逢ひなすつちや激するか

ら、そツとして、いまに目をおさましますツてから私がよくさういつて、落着かしてからお逢ひ  
なさいましょ。腕車やら、汽車やらで、新さん、あなたもお疲れだらうに、すぐこんなことを聞  
かせまして、もう私や申譯がございませぬ。折角お着き申して居ながら、何うしたら可いでせう、  
堪忍なさいよ。」

### 菊の露

「もうく思入こゝで泣いて、ミリヤアドの前ぢや、かなしい顔をしちゃいけません。そつとし  
て置いてあげないと、お醫師が見えて、私が立廻つてさへ、早や何か御自分の身體に異つたこと  
があるのかと思つて、直に熱が高くなりますからね。」

それでなくツてさへ熱がね、新さん四十度の上あるんです。少し下るのは午前のうちだけで、  
もうおひるすぎや、夜なんざ、夢中なの。お薬を頂いて、それでまあ熱を取るんですが、日に四  
度ぐらゐづ、手巾を絞るんですよ。酷いぢやありませんか。それで居て痰がかう咽喉へからみつ  
いてて、呼吸を塞ぐんですから、今ぢや、ものもよくは言へないんでね、私に話をして聞かして  
と始終さういつちやあね、詰らないことを喜んで聞いて在らつしやるの。  
何んなにか心細いでせう。寝たつきりで、先月の二十日時分から寝返りさへ容易ぢやなくツて、



片寝でねえ。耳にまで床ずれがしてますもの。夜が永いのに眠られないで悩むのですから、何んなに辛いかわりません。話といつたつてねえ、新さん、酷く神経が鋭くなつて、もう何ですよ、新聞の雑報を聞かしてあげても泣くんですもの。何かねえ、小鳥の事か、木の實の話でもッておつしやるけれど、何ういつていゝのか分らず、栗がおツこちるたつて、私や縁起が悪いもの。いひやうがありません。それでなければ、治つてから片瀬の海濱にでも遊びにゆく時の景色なんぞ、月が出て居て、山が見えて、海が風ぎて、みさごが飛んで、さうして、あゝするとか、かうするとかいつて、聞かせて、といひますけれど、ね、新さん、あなたなら、あなたならば男だからいへるでせう。いまにあなた章魚に灸を据ゑるとか、蟹に握飯をたべさすとかいふ話でもしてあげて下さいまし。私にや、私にや、何うしてもあの病人をつかまへて、治つて何うしようなんていふことは、情なくツて言へません。」

といふ聲もうるみにき。

「え、新さん、はなせますか、あなただつて困るでせう。耳が遠くおんなすつたくらる、茫として在らつしやるのに、悪いことだと小さな聲でいふのが遠くに居てよく聞えますもの。」

せいゝゝツてね、痰が咽にからんできますのが、いかにもお苦しうだから、早く出なくなりますやうにと、私も思ひますし、病人も痰を咯くのを楽しみにして在らつしやいますかね、果敢ない

ぢやありませんか、其が、血を咯ぐより、なほ、酷く悪いんですとさ。

それで居てあがるものはといふと、牛乳を少しと、鶏卵ばかり。熱が酷うござんすから舌が乾くツて、とほし、水で濡して居るんですよ。もうほんとうにあはれなくらのおやせなすつて、菊の露でも吸はせてあげたいほど、小さく美しくおなりだけれど、ねえ、新さん、さうしたら身體が消えておしまひなさうかと思つて。」

といひかけて咽泣き、懐より桃色の絹の手巾をば取り出でつ、目を拭ひしを膝にのして、怨めしげに瞻りぬ。

「新さん、手巾でね、汗を取つてあげるんですがね、そんなに弱々しくおんなすつた、身體から絞るやうぢやありませんか。眞個に冷々するんですよ。拭くたびにだんゝお顔がねえ、小さくなつて、頸ン處が細くなつてしまふんですよ、ひどいねえ、私やお医者様が、口惜くツてありません。」

だつて、はじめツから入院さしたつて、何うしたつて、いけないツて見離して居るんですよ。今ん處ぢや唯もう強いお薬のせいで、やうゝ持つて居ますんですよ、ね、十滴づゝ。段々多くするんですツて。」

青き小瓶あり。取りて持返して透したれば、流動體の平面斜めになりぬ。何ならむ、この薬、



予が手に重くこたへたり。

ちつとみまもれば心も消々になりぬ。

其口の方早や少しく減じたる。其をば命とや。あまり果敢なさに予は思はず眩きぬ。

「たツたこれだけ、百滴吸つたらなくなるでせう。」

「いえ、また取りに参ります……」

といひかけて顔を見合せつ、高津はハツと泣き伏しぬ。あゝ、悪きことをいひたり。

### 秀を忘れよ

「餘り何だものだから、僕はつい、高津さん氣にかけちや不可い。」

「いゝえ、何にもそんなことを氣にかけるやうな、新さん、容體ならいゝけれど。」

「何うすりや可いのかなあ。」

唯といきのみつかれたる、高津はしばしものいはざりしが、

「何うしようにも、しやうがないの。唯ねえ、せめて安心をさしてあげられりや、ちつとは、新

さん何だけれど。」

と予が顔を打まもれり。

「其が何うすりやいゝんだか。」

「さあ、母様のことも大抵いひ出しはなさらないし、他に、別に、かうといつて、お心懸りもお

あんなさらないやうですがね、唯ね、始終心配して在らつしやるのは、新さん、あなたの事です

よ。」

「僕を。」

「ですから何うにかして氣の休まるやうにしてあげて下さいな。心配をかけるのは、新さんあな

たが、悪いんですよ。」

「え。」

「あのね、始終さういつていらつしやるの。(私が居る内は可いけれど、居なくなると、上杉さん

が何んなことをしようも知れない)ツて。」

「何を僕が。」

予は顔の色かはらずやと危ぶみしばかりなりき。背はひたと汗になりぬ。

「いゝえ、眞個でせう、眞個に違ひませんよ。それに違ひないお顔ですもの。私が見ましてさへ、

何ですか、いつも、もの思をして、うつらくとして在らつしやるやうぢやありませんか。誠に

お可哀相な様ですよ。ミリヤアドも然ういひましたつけ。(私が慰めてやらなければ、あの兒は何



うするだらう)ツて。何もね、秘密なことを私が聞かうぢやありませんけれど、なりますことなら、ミリヤアドに安心をさしてあげて下さいな。え、新さん、(私が居さへすりや、大丈夫だけれど、何うも案じられて。)とおつしやるんですから、何とかしておあげなさいな。あなたにや其工夫があるでせう、上杉さん。」

名を揚げよといふなり。家を起せといふなり。富の市を憎みて殺さむと思ふことなかれといふなり。ともすれば自殺せむと思ふことなかれといふなり。詮ずれば秀を忘れよといふなり。其事をば、母上の御名にかけて誓へよと、常にミリヤアドのいへるなりき。

予は黙してうつむきぬ。

「何もね、いまといつていま、あなたに迫るんぢやありません。何うぞ悪く思はないで下さいまし、しかしお考へなすツてね。」

また顔見たり。

折から咳入る聲聞ゆ。高津は目くばせして奥にゆきぬ。

良ありて、

「ぢや、お逢ひ遊ばせ、上杉さんですよ、可うござんすか。」

といふ聲しき。

「新さん。」

と聞えたれば馳せゆきぬ。唯見れば次の室は片付きて、疊に塵なく、床花瓶に菊一輪、いつさしすてしか凋れたり。

### 東 枕

襖左右に開きたれば、厚衾重ねたる見ゆ。東に向けて臥床設けし、枕頭なる皿のなかに、蜜柑と熟したる葡萄と装りたり。枕をば高くしつ。病める人は頭埋めて、小やかにぞ臥したりける。思ひしよりなほ瘠せたり。頬のあたり太く細りぬ。眞白うて玉なす顔、兩の臉に血の色染めて、うつくしさ、氣高さは見まざりたれど、あまりおもかげのかはりたれば、予は坐りもやらで、襖の此方にイみつ、みまもりてそれをミリヤアドと思ふ胸は先づふたがりぬ。

と座蒲團差よせたれば、高津とならびて、しをくと座につきぬ。

顔見ば語らむ、わが名呼ばれむ、と思ひ設けしはあだなりき。

寝返ることだに得せぬ人の、片手の指のさきのみ、少しく衾の外に出したる、其手の動かむともせず。



瞳キト据りたれば、わが顔見られむと堪へずうつむきぬ。ミリヤアドとばかりもわが口には得出でなむ、強ひて微笑みしが我ながら寂しかりき。  
高津の手なる桃色の絹の手巾は、はらりと掌に廣がりて、軽くミリヤアドの目のあたり拭ひたり。

「汗ですよ、熱がひどうござんすから。」

頬のあたりをまた拭ひぬ。

「分りましたか、上杉さん、ね、ミリヤアド。」

「上杉さん。」

極めて低けれど忘れぬ聲なり。

「こんなになりました。」

とや、ありて切なげにいひし一句にさへ、呼吸は三たびぞ途絶えたる。晝中の日影さして、障子にすきて見ゆるまで、空蒼く晴れたればこそ慙くてあれ、暗くならば影となりて消えや失せむと、見る目も危ふく寒れしかな。

「切なうござんすか。」

ミリヤアドは夢見る顔なり。

「耳が少し遠くなつて在らつしやいますから、そのおつもりで、新さん。」

「切なうござんすか。」

頷く状なりき。

「まだ可いんですよ。晩方になつて寒くなると、あはれにおんななさいます。其上熱が高くなりますからまるで、現。」

と低聲にいふ。かゝるものをいかなる言もて慰むべき。果は怨めしくもなるに、心激して、

「何うするんです、ミリヤアド、もうそんなで居て何うするの。」

聲高にいひしを傍より目もて叱られて、急に、

「何ともありませんよ、何、もう、いまによくあります。」

いひなほしたる接穂なさ。面を背けて、

「治らないことはありません。治るよ、高津さん。」

高津は勢よく、

「はい、それはあなた、神様が在らつしやいます。」

予はまた言はざりき。



月凍てたり。大路の人の蹠音牙えし、それも時過ぎぬ。坂下に犬の吠ゆるもやみたり。一しきり、一しきり、檐に、棟に、背戸の方に、颯と来て、さら／＼さら／＼と鳴る風の音。此の風！病む人の身を如何する。ミリヤアドは衣深く引被ぐ。慥は予と高津とに寝よとてこそするなりけれ。

かゝる夜を伽する身の、何とて二人の眠らるべき。此方も唯眠りたるまねするを、今は心安しとてやミリヤアドのやゝ時すぐれば、ソト顔を出だして、あたりをば見まはしつゝ、いねがてに明を待つ優しき心づかひ知りたれば、其夜もわざと眠るまねして、予は机にうつぶしぬ。

搔卷をば羽織らせ、毛布引かつぎて、高津は予が裾に背向けて、正しう坐るやう膝をまげて、横にまくらつけしが、二ツ三ツものいへりし間に、これは疲れて轉寝せり。

何なりけむ。ものともなく膚あはだつに、ふと顔をあげたれば、ありあけ暗き室のなかにミリヤアドの雙の眼、はきとあきて、わが方を見詰め居たり。

予が見て取りしを彼方にもしかと見き。ものいふ如き瞳の動き、引寄するやうに思はれたれば、搔卷刎ねのけて立ちて、進み寄りぬ。

近よれといふ色見ゆ。

やがて其前に予は手をつきぬ。あまり氣高かりし狀に恐しき感ありき。

「高津さん。」

「少し休みましたやうです。」

「さう。」

とばかりいきをつきぬ。良久しうして、

「上杉さん、あなた何うします。」

予は思はずわなゝきぬ。

「何を、ミリヤアド。」

「私なくなりなると、あなた何うします。」

涙ながら、

「そんなことおつしやるもんぢやありません。」

「いゝえ、何うします。」と強くいへり。

「そんなことを、僕は知りません。」

「知らない、いけません、みんな知つて居る。かはいさうで、眠られませんか。眠られませんか。上



杉さん、私、頼みます、秀、秀。」

予は頭より氷を浴ぶる心地したりき。折から風の音だもあらず、有明の燈影いと幽に、ミリヤアドが目光したり。

「秀さんのこと思はないで、勉強して、ね、上杉さん。」

予は伏沈みぬ。

「かはいさう、かはいさうですけれども、私、こんな、こんな、病氣になりました。仕方がない、あなた何うします。かはいさうで、安心して死なれません。苦しい、苦しい、かはいさうと思ひませんか。私、あなたをかはいがりました。私を、私を、かはいさうとは思ひませんか。」

一しきり、また風の戸にさはりて、ミリヤアドの顔蒼ざめぬ。其眉擡み、唇ふるひて、苦痛を忍び瞼を閉ぢしが、十分時過ぎつと思ふに、ふとまた明らかに睜けり。

「肯きませんか。あなた、私を何と思ひます。」

と切なる聲に怒を帯びたる、り、しき眼の色恐しく、射竦めらる、思あり。

枕に沈める横顔の、あはれに、貴く、うつくしく、氣だかく、清き芙蓉の花片、香の煙に消ゆよとばかり、亡き母上のおもかげをば、まのあたり見る心地しつ。いまはハヤ何をかいはむ。

「母上。」

と、ミリヤアドの枕の許に僵れふして、胸に縋りてワツと泣きぬ。

誓へとならば誓ふべし。

「何卒、早く、よくなつて、何にも、ほかに申しません。」

ミリヤアドは目を塞ぎぬ。また一しきり、また一しきり、刻むが如き戶外の風。

予はあわたしく高津を呼びぬ。二人が掌左右より、ミリヤアドの胸おさへたり。また一しきり、また一しきり、大空をめぐる風の音。

「ミリヤアド。」

「ミリヤアド。」

目はあきらかにひらかれたり。また一しきり、また一しきり、夜深くなりゆく風の音。神よ、めぐませたまへ、憐みたまへ、亡き母上。



襄谷



見るから膚の粟立ツばかり涼しげなる瀑に面して、背を此方に向けたるは、惟ふに彼の怪しの  
姫なるべし。

蕨谷の螢には主ありて、みだりに人の狩るをゆるし給はず。主といふは美しき女神にておはす  
よし、母のつねに語り給ひぬ。

谷をのぼれば丘にして、舊城のありたるあとなり。下は一面の廣野にて、笹川といふ小川其あ  
ひだを横ぎり流る。

はじめは其廣野にて、ともだちと連れなりしが、螢一ツ追ひかけて、うか／＼と迷ひ來つ。  
野に居たりし時ハヤ人顔の懐しきまで黄昏れたりしを、樹立彌が上に生茂りて、空の色も見え  
わかざる、谷の色は暗かりき。

地も、岩も、木も草も、冷き水の匂ひして、肩胸のあたり打しめり、身を動かす毎にかさ／＼  
と鳴るは、幾年か積れる朽葉の、なほ土にもならであるなり。

瀑は樹と樹の茂り累なる梢より落つと見えぬ。半ばより岩にかゝりて三段になりて流る。左の  
方に小さき堂あり。横縦に蔦かづらのからみたるを、絆と封じて鎖を下せり。岩にせかる、瀑の

雫、颯と其堂の屋根に灌ぎ、朽目を洩れて、地の上に滴りたり。傍に一尺より二尺までの大きき  
の地藏尊、右の方を頭となし、次は次より次第に小さきが、一ならびに七體ぞ立たせ給ふ。たゞ  
瀑のみならず、岩よりも土よりも水とところ／＼湧き出づれば、此處彼處に溜りたる清水溢れて、  
小石のあはひを枝うちつ、白き蛇のひらめくやう、低きに就きて流る、音、ものの囁くに異ら  
ざるを、鬱蒼たる樹立の枝を組みて、茂深く包みたれば、きく耳には恰も御佛達その腹の中にて、  
ものをいふらむ響す。

かゝる處に、身に添へる影もなくて唯一人立ちたる婦人の、髪も見馴れざる結方なり。黄昏の  
色と際立ちて、領の色白くあざやかに、曙の蒼き色の、いと薄き衣着たまへる、ふみそろへたる  
足のあたりは、くらき色に蔽はれて、淡き煙、其帯して膨かなる胸を籠め、肩のあたりのさやか  
に見えて、すらりと立てる瘦がたの身丈よく、ならびたる七つの地藏の最も高きものの頭さへ、  
やうやく其胸に達するのみ、これを彼の女神ならずと誰か見るべき。

予が追來りたる一ツの螢の、さきよりしばし木隠れて、夕の色に紛れしが、青き光明かに、彼  
の小さき堂の屋根に顯れつ。横さまに低く流る、如く、地藏の頤のあたりを掠めて、うるはしき  
姫の後姿の背の半ばに留まりぬ。

谷 蕨 「あゝ、」 姫なる神よ、其螢たまはずやといはむとせし、其言いまだ口を出でざるに、彼の君あ



わたゞしう此方を見向き、小さき予が姿を透し見さま、驚きたる状して、一足衝とすさるとて、瀑を其頭にあびたり。

左右の肩に颯と音して、玉の簾ゆらくとぞ全身を包みたる。

「螢、下さいな、螢下さいな。」

と予は恐氣もなく前に進みぬ。

螢は彼の君の脇を潜りて、いま袖裏より這ひ出でつゝ、徐に其襟を這ふ時、青き光ひたゞと、ぬれまとうたる衣を通して、眞白き乳房すきて見えたり。

鼻高う、眉あざやかに、雪の如き顔の、やゝおもながなるが、此方を瞻りたまへば、

「ねえ、螢一ツ下さいな。母様は然ういッたけれど、あの、神様が大事にして居るんだから取ッちやいけないッて、さういつたけれど欲いんだもの、一ツ位いゝでせう。」

と甘ゆる如くいひかけつゝ、姫の身近に立寄るに、彼の君はなほものいはで、予が顔を瞻めたまふ。目の色の見ゆるまで、螢の光凄く冴えたり。予は少しく恐氣立ちぬ。其姿の優しければこそ、来るまじき處に来て、神の稜威を犯せしを、罪したまはばいかにせむと、いまは其あまり氣高きが恐しくて、予は心細くも悲しくなりぬ。

あとへ〜と退りながら、

「御免なさい、御免なさい、こんだツから来ないから。あれ、うちへ歸して下さいよう。もうもう螢なんか取らないから、御免よ〜。」とぞわびたりける。

姫が顔の色や、解けて、眉のび、唇ゆるみぬ。肩寒げに垂れたる手を、たゆたげに胸のあたりに上げて、

「これかえ。」

といひながら、つまみて、掌に乗せたる、青きひかり裏すきて、眞白なる手の指のあひだの見えすくまで、太くも渠は瘦せたるかな。

「上げませうか。」

と呼びかけて、手をさしのべたる、袖の下に、わがからだ立寄る時、彼の君のぞくやうに俯向きたれば、はらくと後毛溢れて二度ばかり冷かなる雫落ちぬ。胸に抱緊められたる時は、冷たさ骨髓にとほりつゝ、身は氷とや化すらむと、わが手足思はずふるひぬ。

「坊や、いくツだえ。」

「なゝツ」と呼吸の下に答へし身の、こほそもいかなることぞと、予は人心地もあらざりき。

「名は。」とまた問ひつゞけぬ。

予は幽に答へ得たり。



「あゝ、みねさん、みいちゃんだねえ。」

「えゝ、」

かくて予を抱ける右の手に力を籠め、

「もうこんな處へ来るんぢやありません、母様がお案じだらうに、はやくおかへり。」

といふはしに衝とすりぬけて身をひきぬ。

「入れものはあるかい、」

と姫は此方に寄り添ひつゝ、予が手にさげたる螢籠の小さき口にあてがひて、彼の螢を入れむとして、軽くいきかけて吹き込みしが、空へそれて、潑と立ちて、梢を籠めて螢は飛びたり。

「あれ、」

と空を見上げたる、ぬれ髪は背にあふりて、兩の肩に亂れかゝりぬ。

「取つても可いかい、取つても可いんなら私がとらうや。」

笹の葉一束結附けたる竹棹を持ちたれば、直に瀑におし浸して、空ざまに打擽るにぞ、小雨の如くはら／＼と葉末を鳴して打散りたる、螢は岩陰にかくれ去りき。

やがて地藏の肩に見えぬ。枝のあたりをすいと飛びたり。また葉裏をぞつたひたる。小石の際よりばつと立ちぬ。つと瀑を横ぎり行く。蒼き光の見えがくれに、姫は予が前後、また右左に附

添ひつ。

予はたゞ螢を捕らむとばかり、棹を打ふり／＼て足の浮くまであくがれたる、あたり忽ち月夜となりぬ。

唯見れば舊の廣野なりき。螢狩の人幾群か、わがつれも五七人、先刻には居たりし川も見ゆれど、何時の間にか歸りけむ、影一つもあらざりき。あたりはひろ／＼と果見えす、草茫茫と生茂れる、野末には靄を籠めて、笠岡山朧氣なりし。

上の丘と下なる原とは、年長けてのち屢々行けど、瀑の音のみ聞きて過ぎつ。われのみならず、蓑谷は恐しき魔所なりとて、其一叢の森のなかは差覗く者もあらざるよし。優しく、貴く美しき姫のおもかげ瞳につきて、今もなつかしき心地ぞする。



五  
の  
君



今もなほ朽ちず、高崇寺の門は其門に帯を釣りて縊れ死したる老人ありしを以て、縣下に聞えたり。

門内廣ければ、近隣の少年等の此處を遊びどころとなしたれども、黄昏まで居たるはなし。物の怪ありなど、人のおどしたれば恐れてなりき。

其寺に養はれたまひしかば、尼君、尼君と皆陰にては囁きたれど、まことは舊藩主菅氏の第五の姫にて、香折と呼ばれ給へる君なり。

八歳九歳のころは男女をわかつたず、學校はひとつ教場なりし、位高き方といふにぞ皆彼の君を隔て參らせつ、席のならびたるも多くのいふことあらざりき。

ある時、前の卓子に居たる貧家の兒、習字の時間に、墨のあまり堅ければとて、水に灰を交ぜて摺りたるを、監生といふものに發見され太く罵られて泣きたりしに、姫の哀れとや見たまひけむ、御持料なる貴き墨を渠に與へむとのたまひぬ。

「いゝえ、いゝえ。」

とばかり臆して手をだに出さむとせざりし。姫は傍なる附添の腰元を顧み給へり。

「それをお遣はしになりますと、今日姫様のおつかひ遊ばすのがございませぬ。明日に遊ばしまし、他のをもつて来てやりますから。」

と腰元は低聲にすかしぬ。姫はかぶりを振り給ひて、  
「二ツに、わけて。」と強ひ給ふ。

「ま、およろしいではございませぬか、お折り遊ばしては勿體なうございます。」

腰元はなほ肯ぜざりき。姫はものをものたまはで、御顔颯とあかうなりぬ。  
「可い！」と少しく聲鋭く、直ちに墨の兩端を取りて、ひしと壓させたまひしが、力足らで折れざりき。

腰元は手を束ねて見たり。  
姫は傍なる少女に向ひて、

「折つて、折つて。」

と言ひかけつ、件の墨を推着給ふに、少女は諾ひて取らむとせしが、腰元のソト目づかひしたれば、心後れて手を控へぬ。



いひがひなしとや、姫は奇立ち給へる状にて、卓子の上にありあはす一個水晶の卦算の扇の形に造りたるを取りあげて、領きつゝ、墨を硯にもたせかけ、斜にしたる只中を力を籠めて丁と打てば、墨の三段に折るゝとともに、水晶の卦算なかばより碎けて散りぬ。

腰元は興覚顔なり。

姫は嬉しげに微笑みて、一片を渠に、他の一片を禮心にや少女にたまひぬ。かくて後渠等は打とけて隔てなくものいひ交すやうにぞなりたる。姫は不思議のものすきにて、其ことのありてより、取かへ引かへ持ち來給ふ墨といふ墨は残らず隙だにあれば打折りて、二ツにし、三ツにし、四ツにし、果は二三分ばかりになしては、人に分たるゝこともあり、はた濃き墨の膠の氣を以て一ツ一ツ継ぎあはせては丁寧に日に乾かし、かたまるを待ちてまたつかふことあるなど、癖のやうになりたまひき。

二

御寺に育ち給ひしかば、うまれつき心さまの雄々しきにも似たまはず、ものの情は知りたまひぬ。

五月雨晴れし夕なりき。姫はお居室の障子を開きて、欄干に凭れ俯して、庭なる池を見たまひ

ぬ。池は瓢の形したるに、石の反橋かゝりたり。其下あたり燕子花咲き亂れつ。水を限れる築山には、石燈籠に苔蒸して、幹は低けれど枝曲りて風情をかき五葉松の笠の形したる下、殘の躑躅ちりくゝなり。山吹もすがれながら七重八重伏しかさなる、雨上りの水さ、濁りて、葉の雫ほたくと落つるごとに、緋鯉など驚き跳ぬる。

空は處々晴れたれど、夕榮もせで暮れて行く、御背には早や灯のともりたるを、姫はなほ懸念なく池の面を見入りておはす。本堂にて撞き鳴せる鐘の響のやみたるトタンに一尾の鯉あり、潑と跳ねて、三尺ばかり飛上れる、鱗きらりとかがやきし、勢あまりて築山の裾なる土に横はりぬ。「あれ。」と腰元立上る。

姫は見返りて呼留たまひ、

「うつちやつてお置き。」

「でも姫様、はやく水中へ入れてつかはしませぬと、姫様。」

腰元の急き立つを、姫は極めて落着きつゝ、

「自分の勝手ではないか。」

とて髪一筋も動かし給はず、冷然として居給へり。いつも御氣にもとれるあとの良きことなきを知りたれば、腰元は心ならずも手を空しうして、たゞあはれとのみぞ。



鯉は動かす、風なく、音なく、雫も小止み、水の輪も其時消えつゝ、庭一面に立蔽へる、沈々たる黄昏の、ものに觸れて動くと見れば、一頭茶褐色の鼯あり、細長き胴を腕らし來りて、矢庭に鯉に齒を懸けけり。一目見て、あと打叫びたまひし姫の、咄嗟に欄干より身を躍らし、腰元の魂消る隙に、ざんぶと、池に飛入り給へり。

鼯を追はむと思してなるべし。あまりにことの急なりしかば、縁側にめぐり出でて、庭に下りて行くひまには、と心あわて給ひけむ、腰元はアツケに取られて、あれよくとたゞ騒ぎつ。

やがて聲をあげて人を呼び、雪洞あちこち入交ひて、露地に庭下駄の音けた、ましや、紅の裳、白き脛、池のめぐりに走せ寄る頃は、鼯も失せて鯉も見えず、姫は濡れしをれてイみたまひぬ。

御いきづかひや、忙しかりしのみ、顔の色常の如く平然として居給ひぬ。お附の人胸をなでて、御るまはりを取圍み、

「まあおそばにおつき申して居ながら勿體ないことをおさせ申して、ひよつともし、お怪我でも遊ばしたら何うなさいます、あなた飛んでもない。」

と年嵩なるにたしなめられ、心弱き腰元の涙ぐみてわびたるを、姫の笑止と御覽じて、

「うつかりして。わたしが悪いの、お叱りでない。」

とのたまふはしに、背よりそと搔抱き、御居室に連れ戻り、おぐしを直せ、おめしかへと、一

しきり騒ぎてのち、ものに紛れておくれたる、ゆふげの膳を参らすれば、むかうづけの尾頭を見給ふより色をかへて、みぶるひをしたまひしが、それより形のそなはりたる魚は、箸をもつけたまはぬやうなりゆきぬ。

## 三

築地の外は山續きにて水は澄めれど古き池なり。

逢魔時に麗なる御身の端居しておはしたれば、ものの魅入りしや、などひそめきあひて、其後は皆注意しつ。夕になれば相戒めて縁近くもいだし参らせず。

しばし何事もなく過ぎたり。

晝は起居の活潑にわたらせたまへど、夜に入れば御心靜に、もの書き、文を読みなどしたまふ。今宵は思ひたちたまふことあり。御手習にもなればとて、普門品を寫し給ひき。

お居室の時計九時を打てども、なほ臥床に就き給はず、籠行燈あかゝと頭近く引寄せつ、傍目も觸らでぞおはしたる、御目をばつと遮る蟲あり、驚きてひかへ給ふ筆のあたりに羽ばたきして、寫しかけの紙の上に足を留めてしづまりぬ。

螢よりはや、大なる身の、頭は蜻蛉に似て小さき蟲なり。短き太き髻二筋いかめしう左右に分



れて生ひ、總體黒味がちの褐色にて、羽がまへの巖乗なるを、姫の見たまひて二度ばかり呼吸をかけて吹やらむとしたりしが、動くべくもあらざれば、筆の軸を打返して拂ひ落とし給ひしに、忽ち飛びて障子にあたり、衝と引返して行燈に羽音を立てしが見えずなりぬ。

其ま、筆を運び給ふ。や、ありて御机の、向うて左の隅の方より彼の蟲のそくと這出でて卦算の上へのぼりたるを、再び筆もて搔退け給へば、はたと疊の上に落ちて、机の脚に形を隠しつ。

間もなく膝下よりぱつとたちて、お顔をば掠めて飛びて、やがて机の上にご乗りける。爾時筆を擱き給ひ、御膝に手を置きて、ちつと打まもり給ひし目を、傍なる腰元に見向けつ、

「うるさい、うるさい。」と續けて仰する。

「は。」

と腰元はるざり寄りて、  
「おや、何處から入りましたでございませう。只今取棄てますでございませう。」

腰元は火箸を取りて然も氣味わるげに挟みかけしが、其さきの觸るゝとともに、彼の蟲の動くにつれて、おのが身も動けば手の震ひて、左右なくは押へ得ざりし、やがてのことなり、不意に蟲の飛びたるにぞ、あれと背後ざまに身をそらしてフト立てる袖のあふりに、行燈の灯をはたき消しつ。

ひたすら恐入りて狼狽し、裾音を立てながら闇夜の中を慌てまはり、何とも別たず搔探る手の、  
姫の御袖に觸れたるに、膽を冷して、  
「只、今、只、今。」

と震聲。お次の人のあかしもて急ぎ入りたる、ひかげに顔を照されて、腰元はおどくして、  
消えも失せたくひれふしぬ。

姫は微笑みたまひしのみ、人の怪みてうかゞひたるには、何事をものたまはで、  
「灯を。」とばかり點けなほさせ、靜に又ものを書き給ひぬ。

ことなければ人は去りたり。腰元はや、ありて、おづ／＼頭をもたげしが、「おや」と思はず呟きぬ。蟲はまた行燈の柱をぞつたひたる。

「あ、れ。嫌な、まあ、嫌な蟲だよ。」

腰元は遠くより袂を以て拂ひしに、忽ち蟲の狂ひ出でて、障子ともいはす、壁ともいはす、どんとあちこちぶつかりては、バサと飛び、くるりと跳ね、縦横にめまぐるしく、居まはり狭う立ちまはるに、さきより身動きもしたまはざりし、姫の眉キト動き、流星の如きおん目を睜りて、ハタと其方をねめたまひし。



姫はあまりうるささに、折から蟲の羽を休めて疊の上に居すくみたるを、恐氣もなう指以て抓みて、棄てよと腰元に差着け給ひぬ。

懐紙にて恐るゝ受け參らせ、押ひねりて、ソト捻ぢて、

「嫌な蟲つたらない！もうゝゝ二度と來てはなりませんよ。」

池にのぞみたる雨戸をすかして、腰元ははふりすてつ。

「もうよろしうございます。」

「何といふ蟲？」

「つい存じませぬが。」

「さう。」

とばかり姫はのたまひすてて、また餘念もなくもの書き給へり。

「餘りお詰め遊ばしてはおからだの毒になります。もうお休み遊ばしませんか。」

「あゝ。」

「それでは一寸お床をのべて參じます。」

と腰元はまかんでぬ。

しきり鳴く蛙の聲、遠くきこえてもの淋しく、襖のたてつけかたりと鳴りて、雨の音はらゝと池にたばしる。姫は筆をさしおきて、ひらきたる經を閉ぢ、卦算を傍に取りのけて、うつしもの紙をすらし給ふ。其下に又こそ居たれ。いかにして何時の間にか來りけむ、見給へば同一蟲なり。

まじろぎもし給はで、瞻りたまへる眉逆立ち、見るゝ氣色ばむ御顔の色蒼くなりつ。矢庭に蟲の胴に、頭に、左右の指を懸け給ひて、キキ、と絲切齒をかみ鳴し、唇をふるはせたまひし、もののはすみは希有なるものかな。蟲のむくろはのけざまに眞黒なる腹を見せて、拗げ離れたる頭の髻、心ばかり蠢きぬ。

やゝありて上を下、水よ薬よとて立騒ぎつ。それより御枕あがらせ給はず。あくる日も人心地なく惱み給ふに、醫師も首を傾けたり。附人等安き心も無くてあるに、一人の不圖心着きしは、かつて姫の救ひ給ひし鯉の、今もなほ恙なくて、朝曇夕風折々には、悠々と浮び出で、泰に一わたり水を掻きては藻を漕りて沈み行くが、日に月に大きくて、このころはハヤ二尺あまりにもなりたらむ、たゞ其片目は盲ひたり。馳にかけられし齒の痕の毒に囚りて然はなりぬと、人々のいひあへる。これにぞおもひあたりて、



「何うでせう、あの怨念を一つ鯉にくはしたらば。」  
と屈託のなかへ打出しぬ。

「だつて、もう死骸はうつちやつたではありませんか。」

「い、え、處がね、ちやんとお手箆の引出に、紙にくるんで錠をおろしてしまつてあるの。」

「あら、嫌だ。まあ何だつてそんなものを。」

「其がね、斯なの。一度うつちやつてしまつただけれど、姫様が何處へ行つたくといつてお氣にお懸け遊ばすから棄てましたと申したらばね、さあ、大變、あすこに居る、こゝへ來たといつて夢中でお騒ぎ遊ばすもんだから、相談して又拾つて來たの。首だけの別個さ。これんばかりな蟲の癖に、また變な處からちぎれたもんだね。而して改めてお目にかけて、お身には決して着きませんと申上げると、少しお氣が休まつたわね。それで、あすこへ入れて錠をおろして置けとおつしやるので、何でもお心の休まるやうにと、だいじにしてしまつてあるの。」

「それぢやあなるほど、思ひつきだ。屹と御恩を返すでせうよ、姫様は、あのめツかちの仙人には、命の親でおいで遊ばすから。」

五

明治十五年の春は姫早や十六にならせ給へり。

さきをと、しあたりより學校には出だし參らせず、然るべき婦人の心さま正しくて、學の道に長けたるを保姆として附け置きぬ。

見附の本堂の扉の陰に、半ば其姿を見せて、繻珍の帶胸高に、打紐の帶上凛々しう、襲着の袂引緊りて、白綾の衣紋正しく、ふさ／＼とある黒髪を夜會結に引結へる、細面の色白く、眉つきの屹としたるぞ其の保姆なりける。

姫は腰元等と打群れて、門内なる鐘撞堂の傍の一條の小川流るゝあたりに、保姆が守護の届くかぎり、彼方此方追羽根して遊び給ふ。不斷もあるを、松の内けふ五日、御姿の端麗なる、これを何にかたとふべき。

姫はへだて給はねど、振袖詰袖打かこふ御あたりの神々しく、うまれつき備はりたまふ威にうたれて、界限の女子たち、嘗て學校をともしたるも、われと控へて近よらず。恐しきもの見らむ氣勢して、遠く門外に退きながら、群れつゝ、此方を透すもあり。行交ふ壯俊ども耳打して人知れず此方を指すは、花の名を知らぬなるべし。舊藩士の年老いて、頭に尙白髪結ひたる昔氣質の人などは、あれを五の君よ、香折姫よと思ふから、佛には然もなくて、恭しく伏拜みて通るもありき。



然るに、貴きと、賤きと、世界を分けたるこの御寺の門の高き敷居を、足もとの危なげながら、無雑作に、怯めずに入り来る老人あり。

「屑はござい、屑は、屑は、屑屋でござい。」

と呼懸けつ。

折から日脚傾きて、松立てたるあたりには烟薄く立ちわたり、空高う風の一際さゆるものさびぬ。屑屋は足の重たげに、吐くいき忙しく喘ぐに似ず、荷へる籠の中空しく、肩の骨尖りたるが、薄着に著くいたくしげに、腰も屈めば丈低き、年紀六十を越えたるべし。

「屑や、屑や。」

と呼びながら身を捻向けて今入りたる、門の前を睨め廻しつ。

「何でえ、何でえ、何をいやがるんでえ。姫様が何でえ。商賣だ、屑を買ひに入るが何うした。

うぬら祿をもらつたら姫様でもな、おらあ平民だい、塵木ツ葉も殿様の世話にやあならねえ。平民だい、足輕ぢやあねえぞ。留めるならとめて見ろ、極道め。」

「屑屋、屑屋でござい。」

蹠跟とあるきつ、又呟きぬ。

「人おもしろくもねえ、勝手にしやあがれ。氣にくはねえけりや殺すがい、やい、ざまあねえ。」

親仁は絶ず獨言して、思ひ出したるやう調子高に、屑屋と時々聲立てつ、地をみつめてよたよたと歩を移して、思はず、羽子の線を切つて通る、腰元の手より今羽根はひらくと空をまひて、姫の方に渡りたるを、受けむとせられし羽子板の、其妨げにツトそれて、はずみをくれて流に落ちぬ。

「誰！」

と見たまひ、

「いやな。」と姫は羽子板もて、屑屋の胸を突き退けたまひし、氣象の力籠りけむ、餓ゑたる者の意氣地も無う、後ざまに怪し飛びつ。よろ／＼として踏こたへし、屑屋はいかに口惜かりけむ、赤き眦を睨きて、底光りする瞳凄く、姫を屹と睨まへたる、睫毛に涙つたひしが、や、ありてニタリと笑ひ、くるりとあちらむきて、門を出でたり。

六

姫は目じろぎもしたまはで、屑屋に顔を睨められながら、石に化して立ち給ひし。其立去るを御覽じて、引着けらる、かの如くする／＼と歩を移して、親仁のあとを追はれしが、不圖門際に立停まりて、此方をば見も返らぬ、屑屋の背形を見送り給ひつ。



腰元呆れて視つむれば、姫はお手より迂らす如く羽子板を落したまひ、一文字に本堂まで傍目もふらず馳せ返りて、

「關。」と其名を呼びかけながら、すらりとしたる保母の腰に、犇と縋りて御顔を、渠が胸にあて給ひぬ。御ありさまのたゞならぬに、關は胸を打ちて、はつとばかり、背搔さすり参らせながら、  
「姫様、何う遊ばしました。屑屋が何ぞ申しましたか。え、え、姫様。」  
と口忙しく、問ひ慰む。

「あやまつて、あやまつて。」と息の下にてのたまひぬ。  
腰元等來り集ひて、しかくのよし物語れり。

「あれはあなた、名代のもう酷い因業爺でござんすの。舊は金持だつたつて言ひますが、何うせあの根性です。然うかといつて、何も悪いことをいたしたんぢやあないんでせうけれど、頑固で、恐しい強情で、あゝして屑屋をして居りましてね、あなた無愛想のなんのつて、これはいくらいくらといふのを、もう少しお買ひといへば、ふいと行つてしまふんださうではございませんか。それで誰もあひてにはいたしません。からもうひどい困窮者で。米屋だの、薪屋だのが、きびしく催促でもしようもんなら、手前の軒で首を釣るから然う思へつて、恐しい顔をして睨みますつて。」

「恐ないやうだねえ。」

「それから役場からね、あなた、戸籍割なんか取りに行らつしやるお役人が困るんださうでございますよ。いくら滞らすか知れないもんですから、財産をね、處分するつて申しますと、そんな事が出来るならして見るがい、おのれ、うちへ火をつけて、町中焼きまくつて遣るからつて、もう無茶なんですね。どうしてあれですもの。ひよつとすると、爲兼ねまいだらうぢやあございませんか。それですから係りの人が少しづつ、出あひで、おかみの帳面前を合せますとさ。」

「いやな老爺だねえ。罰あたりが、姫様を睨んでさ。親を睨むと鰥になるつていひますから、あいつはいまに比良目にでもなりませうや。」

「姫様、何をおむづかり遊ばします。もう堪忍しておやり遊ばせな。そのかはり罰があたりますから。」

と取違へてすかすもありき。

關は腰元の言ふことを、無言にて前より聞きたりしが、頷きて打微笑み、少し肩を斜めにして、わが胸に埋めたまへる姫の顔差覗き、

「これは、ようお心着き遊ばした。すぐお使をつかはしませう。」

「い、え。」



「はい、それでは私がおわびを申しに参りませうか。」

「い、え、お前一所に来て。わたしが行かう。」

とのたまひかけて、涙の御目に見上げたまひぬ。關はしばらく考へしが、

「すぐ、お腕車を。」

と顧みて腰元たちに命じたり。破格のおんおぼしたちに心なき婢女ども、驚きしは、道理にこそ。

## 七

姫まづ戸口を出でたまへば、關は後に續きて出でたり。御車をば早や引寄せつ。車夫は蹴込を拂ひて待ちぬ。此のあたりは町の場末にて、小家あまた建續きたる、人々皆お姿を拜まむとて、軒にイむさへ數多きに、通がかりの禮者、羽織袴にて、萬歳、烏帽子素袍にて、半被股引なるもあり、兒を背に負へるもの、孫の手を曳けるもの、用を抱へて居るものまで、所狭く集ひたるが、姫出給ふと見るよりも、人波うつて颯と別れて、後前に除けたる路を、三間ばかりお歩行にて、御車近くぞ寄り給ふ。

少しおくれて煤黒き破屋の内より、よぼく出でたるは屑屋なり。

見るから身のまはりに殺氣失せて、恐しかりし相好破れつ。笑ひたき、泣きたき、物いひたき、得も言はれざる面色にて、小腰を屈めて這ふが如くあとに跟きて出来れり。

「召しまし。」

と關の申して、ソト御帯に手を懸けて、扶け乗せ参らす時、車夫は土に手を支きぬ。

恚る處へ人押分けて、小走りに女一人、小包小脇に抱へたるが、うろくと來懸りつ、それと控へて躊躇ひたり。屑屋は見るより兩手を上げて、

「おう、雪か。ちやつとく。」

「あい、あい。」と進み寄るを、老夫は傍に引きつけつ、笑傾けて、頭をさげ、

「え、く、これが、唯今申しました一人の娘でござりまする。はい、な、な、何分よろしく、

このかたさへ着きますれば、もうお年貢が納まりまする。」

といふ聲震ふばかりなり。

「い、お兒でござんすの。」

關は腕車に乗り懸けながら、

「姫様。」とお顔を見たり。



「これ、え、御挨拶を申さぬか、うろたへものめ。」と、どきまぎする女を老夫は叱りなごす。姫は顧みて御覽じて、

「年紀は？」

「姫様がお二つばかりお年紀上でいらつしやいます。」

「む、」と頷きて微笑みたまへる。

御顔を屑屋はつくつく見まらせて、

「え、勿體ない。蟲虻同然な屑屋風情が、お姫様におつむりを下げさしました。ば、罰があたります。罰もあたれ、ようこそ、おいで下さりまして、おわびなされて下さりました、あやまられまして泣きまする。」

と心激して人目も恥ぢず、轍に老の身を投かくれば、あれ、日本一の因業親仁が涙を流して泣くわ、見よとて、どつと群集の動搖を造る、折から三人、高崇寺より、迎ひの腰元取乗りて、腕車を飛ばして来りしが、それと一同乗りすて、お車の左右にばらばらと立ちならびぬ。

姫が氣色のうらゝかさ。花やかにさす夕日影を颯と御色に染めたまひつ。人目の晴や、四邊まばゆう、手すさみに持たたまひ、胸にあてたまひたる、扇半ば、押開きて、御顔にかざしたまふ時、梶棒すつと上げければ、老夫も女も腰元等も、再びはつと首を低れ、見送り参らす敬禮を、

姫は目を以て受け給ひつ。御後姿頸白う、銀地の扇きらりと月の光の流るゝ如く、矢よりも疾く過ぎ給ひぬ。



紫  
陽  
花



色青く光ある蛇、おびたゞしく棲めればとて、里人は近よらず。其野社は、片眼の盲ひたる翁ありて、昔より齊眉けり。

其片眼を失ひし時一たび見たりと言ふ、几帳の蔭に黒髪のたけなりし、それぞ神なるべき。ちかきころ水無月中旬、二十日餘り照り續きたる、けふ日ざかりの、鼓子花さへ草いきれに色褪せて、砂も、石も、きら／＼と光を帯びて、松の老木の梢より、絲を亂せる如き薄き煙の立ちのぼるは、木精とか言ふものならむ。おぼろ／＼と霞むまで、暑き日の静さは夜半にも増して、眼もあてられざる野の細道を、十歳ばかりの美少年の、尻を端折り、竹の子笠被りたるが、跣足にて、

「氷や、氷や。」

と呼びもて來つ。其より市に行かんとするなり。氷は筵包にして天秤に釣したる、其片端には、手ごろの石を藁繩もて結びかけしが、重きもの荷ひたる、力なき身體のよろめく毎に、石は、ふ

ら、この如くはすみて揺れつ。

とかうして、此の社の前に來りし時、太息つきて立停りぬ。

笠は目深に被りたれど、日の光は遮りて、白き頸も赤らみたる、渠はいかに暑かりけむ。

蚯蚓の骸の干乾びて、色黒く成りたるが、なかばなま／＼しく、心ばかり蠢くに、赤き蟻の群りて湧くが如く働くのみ、葉末の揺る、風もあらで、平たき焼石の上に何とか言ふ、尾の尖の少し黒き蜻蛉の、ひたと居て動きもせざりき。

かゝる時、社の裏の木蔭より婦人二人出で來れり。一人は涼傘疊み持ちて、細き手に杖としたる、いま一人は、それよりも年少きが、伸上るやうにして、背後より傘さしかけつ。腰元なるべし。

丈高き貴女のつむりは、傘のうらに支ふるばかり、青き絹の裏、眉のあたりに影をこめて、くらく光るものあり、黒髪にきらめきぬ。

怪しと美少年の見返る時、彼の貴女、腰元を顧みしが、やがて此方に向ひて、

「あの、少しばかり。」

暑さと、疲勞とに、少年はものも言ひあへず、纜に領きて、筵を解きて、笹の葉の濡れたるをざわ／＼と搔分けつ。



雫落ちて、雪の塊は氷室より切出したるまゝ、未だ角も失せざりき。其一角をば、鋸もて切取りて、いざとて振向く。睫に額の汗つたひたるに、手の塞がりたれば、拭ひもあへで眼を塞ぎつ。貴女の手には捧げたる雪の色は眞黒なりき。

「この雪は、何うしたの。」

美少年はものも言はず、直ちに鋸の刃を返して、さらりと削り落すに、粉はばらりとあたりて散り、ぢ、ぢ、と蟬の鳴きやむ音して、焼砂に煮え込みたり。

二

あきなひに出づる時、繼母の心なく嘗て炭を挽きしまゝなる鋸を持たせしなれば、さは雪の色づくを、少年は然りとも知らず、削り落し拂ふまゝに、雪の量は掌に小さくなりぬ。

別に新しきを進めたる、其もまた黒かりき。貴女は手をだに觸れむとせで、

「きれいなのでなくつては。」

と静にかぶりをふりつゝいふ。

「え、」と少年は力を籠めて、ざらりと掻いたりける。雪は崩れ落ちて砂にまぶれつ。

澁々捨てて、新しきを、また別なるを、更に幾度か挽いたれど、鋸につきたる炭の粉の、其都

度雪を汚しつゝ、はや残り少なに成りて、笹の葉に蔽はれぬ。

貴女は身動きもせず、瞳をすゑて、冷かに瞻りたり。少年は便なげに、

「お母様に叱られら。お母様に叱られら。」

と訴ふるが如く呟きたれど、耳にもかけざる状したりき。附添ひたる腰元は、笑止と思ひ、

「まあ、何うしたと言ふのだね、お前、變ぢやないか。いけないね。」

とたしなめながら、

「可哀さうでございますから、あの……」と取做すが如くにいふ。

「いゝえ。」

と、にべもなく言ひすてて、袖も動かさず立ちたりき。少年は上目づかひに、腰元の顔を見しが、涙ぐみて俯きぬ。

雪の碎けて落散りたるが、見る／＼水になりて流れて、けぶり立ちて、地の濡色も乾きゆくを、怨めしげに瞻りぬ。

「さ、おくれよ。いゝのを、いゝのを。」

と貴女は急込みてうながしたり。

こたひは鋸を下に置いて、筵の中に残りたる雪の塊を、其まゝ引出して、両手に載せつ。



「み、みんなあげよう。」

細りたる聲に力を籠めて突出すに、一掴みの風冷たく、水氣むらりと立ちのぼる。流るゝ如き腫動きて、雪と少年の面を、貴女は屹とみつめしが、

「あら、こんなぢや、いけないッていふのに。」

といまは苛てる状にて、はたとばかり搔退けたる、雪は迂り落ちて、三ツ四ツに碎けたるを、少年のあなやと拾ひて、拳を固めて掴むと見えし、血の色颯と頬を染めて、右手に貴女の手を扼り、ものをも言はで引立てつ。

「あれ、あれ、あれえ！」

と貴女は引かれて倒れかゝりぬ。

風一陣、さらりと木の葉を渡れり。

三

腰元のあれよと見るに、貴女の裾、袂、はらくと、柳の絲を絞るかのやう、細腰を振りてよろめきつゝ、ふたゝび悲しき聲たてられしに、つと駈寄りて押隔て、

「えゝ！失禮な、これ、これ、御身分を知らないか。」

貴女はいき苦しき聲の下に、

「いゝから、いゝから。」

「御前——」

「いゝから好きにさせておやり。さ、行かう。」

と胸を壓して、馴れぬ足に、煩はしかりけむ、穿物を脱ぎ棄てつ。

引かれて、やがて蔭ある處、小川流れて一本の桐の青葉茂り、紫陽花の花、流にのぞみて、破垣の内外に今を盛りなる空地の此方に來りし時、少年は立停りぬ。貴女はほと息つきたり。

少年はためらふ色なく、流に俯して、掴み來れる件の雪の、炭の粉に黒くなれるを、その流れに浸して洗ひつ。

掌にのせてぞ透し見たる。雫ひたゝと滴りて、時の間に消え失する雪は、はや豆粒のやゝ大なるばかりとなりしが、水晶の如く透きとほりて、一點の汚もあらずなれり。

きつと見て、

「これでいゝかえ。」といふ聲ふるへぬ。

貴女は蒼く成りたり。

後馳せに追續ける腰元の、一目見るより色を變へて、横様にしつかと抱く。其の膝に倒れかゝ



りつ、片手をひしと胸にあてて。

「あ。」とくひしばりて、苦しげに空をあふげる、唇の色青く、鐵漿つけたる前齒動き、地に手を

つきて、草に縫れる眞白き指のさきわな、きぬ。

はつとばかり胸をうちて瞻るひまに衰へゆく。

「御前様——御前様。」

腰元は泣聲たてぬ。

「しづかに。」

幽なる聲をかけて、

「堪忍おし、坊や、坊や。」とのみ、言ふ聲も絶え入りぬ。

呆れし少年の縫り着きて、いまは雫ばかりなる氷を其口に齎しつ。腰元腕をゆるめたれば、貴女の顔のけざまに、うつとりと目を睜き、胸をおしたる手を放ちて、少年の肩を抱きつ、ちつと見てうなづくはしに、がつくりと咽喉に通りて、桐の葉越の日影薄く、紫陽花の色、淋しき其笑顔にうつりぬ。

## 毬栗



人の妻なりし、よき君の世を避けて隠れ住みたまふよし。いつも閉したるまゝなれば、隠れ家の門内を見たるものなかるべし。門を潜れば古井戸あり。井げた、雨に朽ちて苔蒸したるに、ひと蓋して、其上を磐石もて壓へたり。こゝより見附の式臺までは半町ばかり距りたらむ。右には竹垣を結ひたり。左に小さき藁小屋ありて、爐のふちに髪白き老夫一人、ゆたかに胡坐かきて柴折りくべつ。小屋の傍に一本の檜の大樹ありて、爐の煙薄くその梢を籠めたり。樹蔭の開戸を潜り入れば、芝の園見ゆ。梅五六本ありて、地の色すべて赤し。井戸また一つあり。老木の楓、井の頭に臨みて、あたりを蔽へるなかより、弓形の石の橋あらはれて、築山の岩にかゝれるが、水は涸れて、芝はこゝにも生ひたり。縁少し見えて、朱塗の欄干に二葉三葉いま散りかゝる。夏は白百合の丈高きが咲く。枝折戸の際に、枇杷を植ゑたり。この枝折戸の外は、見渡す限り、萩、薄の原とも見ゆ。桔梗、刈萱、女郎花、いろくゞに咲き亂れつ。月もこゝよりやのぼるべき。庭のはてなる森のなかには、風の音

常に絶えず、恰も海鳴を聞くが如し。

中庭とこの裏庭とを隔てたる一帯の土塀につきて、左の方にめぐり行けば、路四五間があひだ竹藪なり。通り越せば檜と藁小屋とならびたる、其側にはあらぬ處、一方の庭の入口に至りつべし。

眞闇き土臭き藪をまれて、奥の方に、人のものいふが幽に聞ゆ。

「もうそんなに深い處へ入らつしやつては恐うございますよ。私は、もう、恐いんですもの、あれ。」

といふく聞えずなりぬ。

折から花やかなる夕日影の、大檜の梢より、斜に小屋の屋根を照したるに、曇りもせで、大粒の雨まばらに、ばらくゞと降り出でつ。一しきりさつと竹藪に音たてしが、時の間に晴れて茜さしたり。同時に、

「きいッ。」

と魂消る聲して、竹の葉一齊に烈しくゆれつ。眞蒼になりたる腰元一人、取亂して、藪の中より轉び出でたり。老夫は爐にいぶる煙の中より、窪みたる眼を光らして透し見つ、

栗 毬

「何うさした。これ、何とさした。」



と怪み問ふ時、まだ十歳ばかりなる美少年の續きて藪より走出でつ。

「何う遊ばしたの。私や、ほんとに、まあ、およし遊ばせと申すのに、ずん／＼奥へ入らつしやつて、はあ／＼思つてる處へ、だしぬけに、わつとおつしやるんだもの。」

と胸を撫でて、身のふるひ止まらず。

美少年も息をつきぬ。

「あの中にお前、深い／＼谷があつて、水が少し流れて居るの、其處にねお前、あれ、と井の上を蓋したる磐石を見遣りて言ひぬ。

「あれよりか少し小さな、赤い色の蛙が居てね、背中の筋が黄金の色をして光つて居たもの。」

老父は眉を擧めて頷きたり。

「もう一足踏込んで見さつしやれ、危い、それそこだ。」

二

里の壯俊の一人は、不意に頬を刺されて、苦と叫びて背後に退きたり。門内よりうち出す栗の毬の如く、五七人群る中へばら／＼と亂れかゝるに、驚破や天狗の暴るゝわと、あわてふためき、ひとなだれにどつと遁げぬ。

山中の森に早や日の入りつ。秋の日の暮れかゝる隠家の門前の廣場には、松の葉一葉の塵もあらで、うつくしく筈目立つ。あたりは寂として、もの靜に、鳥の鳴く聲も聞えず、人のけはひもせで、なほ栗の毬の縦横に門内より飛び出でて、門前の此處彼處に落ち留りては、二つ、三つ、二つ、三つ、おなじ處にかさなり合ふあり、遠くそれで見えずなるあり、地の上にくろげるあり、樹の枝に插まるあり。入交ひ飛交ひて、凡そ五分時ばかりの間、絶ゆる隙あらざりき。

やゝありて其の止みたる時、黄昏るゝ門の黒き色の、それかとも見えわかぬに、美しき少年の顔、ほのかに白くあらはれて、外の方を透し見つ。

そのうつくしき顔を一目見るより、壯俊の一人の、わなゝき／＼、門柱にひたと身を忍びて、密に様子をかゝひたるが、わつと絶叫して遁げ出せり。

不意の物音に、彼の兒、驚きたる面色なりしが、こけつまろびつ行く後姿を見送りて、につこ

と笑みぬ。

時に遙なる森の中より、途絶え／＼洩れ聞ゆる鱗爪の音せり。

少年は隠れ去りつ。

栗 毬

しばしありて、盛装せる武官の、従者一人も従へで、徐ろに手綱を操り、暮れ行く森を背にし



さやかに輝くは勳章なるべし。駒の進む毎に、きらりと揺れて胸に鳴れり。  
やがて、近くに寄りて、大杉の下に駒の頭を乗り入れたる、梢に颯と風立ちて、雨のなごり電  
の如くばらりと亂れかゝりつ。

前足を空に嘶ける、一聲高く、じり、と後にすさりたるを、

「叱！」とばかりに乗りしづめて、又しづくと打つて進め、門近くに來りて、ふとその手綱を  
控ふるトタンに、毬栗の一つ空を飛びて、頬のあたりを掠めたるを、よげさまに右手に掴みて、  
屹と見て微笑みぬ。

駒はまた嘶けり。

將軍はひらりと身を軽くおりたちつ。たて髪を撫でて乗り捨てて、佩劍の柄を握るとともに、  
靴音高く近寄りて、ひたと門の扉に耳をあてて、顔をば少し傾けぬ。

裡は寂として音なかりき。

一足退きて、もと來し方なる山の端を仰ぎしが、再び耳をおしあてぬ。

静さは、嚮にも増したり。

將軍はまた傍に寄りて身をすさらしつ、仰ぎて門の屋根を視めたるが、更に耳をつけて聞き  
ぬ。

同時にけたまはしき楚音の、一人ならず二人三人、鳥の立つらむ氣勢して、母屋の方に遠ざか  
りたる。其のちは葉の落つる音だもあらず。

暗くなる時、火の影ぱつと立ちて、將軍のうつくしき鬚、其光にうつりしが、既に馬上にあり  
て、葉卷の薰そ四邊を籠めし。

鱗爪の音木精に響きて、悠々と引還し、森を潛りて見えすなりぬ。

月の光梢をすべりて、落散りたる栗の毬、ひとつくに影さしたり。



照葉狂言



鞠唄 仙冠者 野衾 狂言 夜の辻 假小屋 井筒 重井筒  
峰の堂

鞠唄

一

二坪に足らぬ市中の日蔭の庭に、よくも恚う生ひ立ちしな、一本の青楓、塀の内に年経たり。  
然るも老木の春寒しとや、枝も幹も唯日南に向ひて、戸の外にはかり茂りたれば、廣からざる小路の中を横ぎりて、枝さきは伸びて、やがて對向なる、二階家の窓に達かんとす。其窓に時々姿一を見せて、われに笑顔向け給ふは、うつくしき姉上なり。

朝な夕な、琴弾き給ふが、われ物心覺えてより一日も斷ゆることなかりしに、わが母みまかり給ひし日より弗と止みぬ。遊びに行きし時、其理由問ひたるに、何故と云ふにはあらず、飽きたればなりとのたまふ。然れど彼家なる下婢の、密に其實を語りし時は、稚心にもわれ嬉しく思ひ染みぬ。

言狂葉照  
「其はね、坊ちゃん、あの何ですッて。あなたのね、母様がおなくなり遊ばしたのを、御近所に



「うむ、ぢやアありません。那樣ことをお言ひだと私や金魚を怨みますよ。そして貢さんのお見えなされない時に、焼火箸を押着けて、ひどい目に逢はせて遣るよ。」

「厭だ。」

「それぢや、まあお坐んなさい。そしてまた手鞠歌を唄つてお聞かせな。あの後が覺えたいからさ。何といふんだつね。……二兩で帯を買つて、三兩で紵けて、二兩で帯を買つて、それから三兩で紵けて、然うして何うするの、三兩で紵けて……」

「今年はじめて花見に出たら、寺の和尚に抱き留められて。」

「とわれは節つけて唄ひ出しぬ。」

「寺の和尚に抱き留められて、止しやれ、放しやれ、帯切らしやるな。」

居ながら鳴物も如何な譯だつて、お嬢様が御遠慮を遊ばすんでございますよ。」

其隣家に三十ばかりの女房一人住みたり。兩隣は皆二階家なるに、其家ばかり平家にて、屋根低く、軒もまた小かなりければ、大なる凹の字ぞ中空に描かれたる。此の住居は狭かりけれど、奥と店との間に一の池ありて、金魚、緋鯉など夥多養ひぬ。誰が飼ひはじめしともなく古くより持ち傳へたるなり。近隣の人は皆年久しく住みたれど、其處のみは屢々家主かはりぬ。さればわれ其女房とは未だ新らしき馴染なれど、池なる小魚とは久しき交情なりき。

「小母さんく。」

此時髪や洗ひけん。障子の透間より差覗けば、膚白く肩に手拭を懸けたるが、奥の柱に凭り掛れり。

「金魚は、あの内に居るかい。」

「居ますとも、何故今朝ツから被入しやらないツて、待つてるわ、貢さん。」

「然う。」

「あら、然う、ぢやアありません、お入りなさいよ、一寸。」

「だつて開かないもの、此戸は重いねえ。」

手を空さまに、我が丈より高き戸の引手を押せば、がたくと音したるが、急にすらりと開く。

婦人は上框に立ちたるまゝ、腕を延べたる半身、斜に狭き脊脱の上に蔽はれかゝれる。其袖の下を搔潜りて、衝と摺抜けつゝ、池ある方に走り行くをはたくと追ひかけて、後より抱き留め、

「何故さうですよ。金魚ばかりせツつて、此の兒は。私ともお遊びツてば、厭かい。」

と微笑みたり。

「うむ。」

「うむ、ぢやアありません。那樣ことをお言ひだと私や金魚を怨みますよ。そして貢さんのお見えなされない時に、焼火箸を押着けて、ひどい目に逢はせて遣るよ。」

「厭だ。」

「それぢや、まあお坐んなさい。そしてまた手鞠歌を唄つてお聞かせな。あの後が覺えたいからさ。何といふんだつね。……二兩で帯を買つて、三兩で紵けて、二兩で帯を買つて、それから三兩で紵けて、然うして何うするの、三兩で紵けて……」

「今年はじめて花見に出たら、寺の和尚に抱き留められて。」

「とわれは節つけて唄ひ出しぬ。」



「おや、お上手だ。」と障子の外より誰やらむ呼ぶ者ありけり。

一一

「誰？」と言ひかけて走り出で、障子の隙間より戸外を見しが、彼は早や町の彼方に行く、其後姿は、隣なる廣岡の家の下婢なりき。

「貢さんが、お上手だもんだから。立つて聞いてたの。其はね、唄も節も全て私たちの知ッてるのと違ふんだもの。もつと聞かして下さい、後でまた昨日の續きのお話を上げてますから。」

此婦人、昔話の上手にて、稚きものにも能く分るやう、可哀なる、をかき物語して聞かす。何時もおもしろき節にて止めては、明くる日其續きをと思ふに、先づわれに鞠歌を唄はしむるなり。

「高い縁から突き落されて、笄落し、小枕落し……」

と唄ひ續けつ。頭を垂れて聞き果てたり。

「何だか可哀つばいのね。鬱いで来るやうだけれど、飛んだおもしろいよ。私たちの覺えたのは、内方袖方、御手に蝶や花、どうやどうんど、く、一丁、二丁、三丁、四丁ッて最う陽氣なことばかりで、譯が解らないけれど、貢さんのは又格別だねえ。難有うござんした。それでは丁ど隙

だし、昨日のあの、阿銀小銀のあとを話してあげませう。」

とて語り出づる、大方の筋は繼母の其の繼しき兒に醋きなりけり。

「昨日は何處まで話しましたッけね、然うく、然うするとね、貢さん、妹の小銀と云ふ子が感心ぢやありませんか。今の母様の子で、姉様の阿銀とはお肚が違つて居るのだけれど、それはそれは姉おもひの優しい子で、姉様が繼母の悪だくみで山へ棄てられると云ふのを聞いて、どんなにか泣いたらう。何てッて頼んでも、母様は肯入れないし、父様は旅の空。家來や小者は最う悉皆が母様におべつかつてゐるんだから、誰一人執成してくれようと云ふものはなし、爲方がないの、そつとね、姉様が冤の罪を被せられて——昨夕話したッけ——冤といふのは何にも知らない罪を塗りつけられたの。納屋の中に縛られて居る處へ忍んで逢ひに行つてね、言ふやうには、姉さん、私がどんなにか母様に頼んだけれど、何うしても堪忍しませんから、一旦連れられておいでなさいまし。後でまた何うにでもしてお助け申しませう。而して、被在ッしやる處が解らないでは、お迎ひに行くことが出来ませんから、是を……ッて、然う云つて、胡麻を一掴、姉様の袂へ入れてあげたの。行く道々、中の絶えないやうに、そこいらに撒いておいでなさい。其をたよりにして逢ひに行くッて、まあ、賢いぢやアありませんか、小銀はやうく九つ。其晩は手を取りあつて、二人が泣いて別れて、明日になると、母様の眼を忍んで小銀が裏庭へ



種のお伽譚なりけるが、此處をば語るには、誰もかく爲なりとぞ。婦人もいま悲しげなる小銀の

出て見ると、枝折戸の處から、點々づゝ、あの昨夜の胡麻が溢れ出して、細い、暗い、背戸山の  
坂道へかゝつて居るのを、拾ひく、ずつとく、遠い、路を歩いて、淋しい山の中へ入ッ  
て行つたの。然うするとな、新らしく土を掘りかへした處があつて、搔寄せたあとが小高くなッ  
てて、其上へ大きな石が乗つてあつて、其處まで小銀が辿つて行くと、一條細うく絶々に續い  
て居た胡麻のあとが無くなつて居たでせう。  
もう疑ふことはない。姉様は此の中に埋れられたな、と思ひながら、姉さん、姉さん、と地に  
口をつけて呼んで見ても返事がないから、はつと思つて、泣伏して、耳を恚う。  
言ひかけて婦人は頭を傾け、顔を斜に眼を瞑りて手を其の耳にあてたるが、「ね」とばかり笑顔  
寂しく、うつとりと眼を開きてわが顔をば見し。戸外には風の音、さら／＼と、我家なる彼の楓  
の葉を鳴して、町のはづれに吹き通る、四角あたり夕戸出の油賣る聲遙なり。

三

一しきり窓あかるく、白き埃見えたるが、早ものに紛れてくらくなりぬ。寂しくなりたれば、  
近寄りて婦人の膝に片手突きぬ。彼方も寒くなりけむ、肌を入れつ。片袖を掛けてわが背を抱き  
て蔽ひながら、顔さし覗く状して、尙ほ肅かにぞ語れる。

「然うすると、深い、下の方で、幽に、姉の阿銀がね、貢さん、(あ、い。)てつて返事をしま  
したとぞ。

それからまた精一杯な聲で、姉さんくつて呼んだの。然うすると、あゝ、もう水が出て、足  
の裏が冷たくつてく、と姉さんがお言ひだとな。土を掘つたのだもの、水が出ますわ。

何うぞして、上の石を退けて出して進げようとお爲だけれど、大きな男が幾人もかゝつて掘る  
たものを、何うして小銀の手に合ふものかね。そちこちするうち日が暮れさうだから、泣きく  
其日は歸つてしまつて、翌日また尋ねて行つて、小銀が(小銀が來ましたよ、小銀が來ましたよ。  
姉さん、姉さん、何處まで水がつかました。)つて、問うたればね、膝まで水がつかましたつて、  
さうお言ひだとな。其あくる日は、もう股の處へついたつて。また其翌日行つた時は、お腹の上  
まで來たんですとね。而してもう然うなると、水足が早くなつて、小銀が、姉さん、姉さんつて  
聞く内に、乳の下まで着いたんだよ。山の中は寂りして、鳥の聲も聞えない。人ツ子一人通らう  
ではなし、助けて貰ふわけにはゆかず、といつて石は退けられないし、唯もう切めてのことに、  
お見舞をいふばかり、小銀が悲しい聲を絞つて。」

此時婦人は一息つきたり。可哀なる此物語は、土地の人口碑に傳へて、孫子に語り聞かす、一



聲を眞似むとて、聲繕ひをしたりしなり。

「(姉さんや、姉さんや、何處まで水がつかまりました。何處まで水がつかまりました。もう一度顔が見たいねえ！小銀が來ましたよう。)ツて、呼んでも呼んでも返事がないの。もう下で口が利けなくなつたんでせう。小銀の悲しさは、まあどんなだつたらうねえ。叶はないとは思つても、ひよつと聞えようかと、(姉さんや、姉さんや、何處まで水がつかまりました。)阿銀さん、姉さんツて、はッと泣き倒れて、姉さん、姉さん。」

と悲しき聲す。先刻より我知らず悲しくなりしを押耐へて居たりしが、もはや忍ばずなりて、わツと泣きぬ。驚きて口をつぐみし婦人は、ひたと呆れし狀にて、手も着けでぞ瞻りける。

門の戸引開けて、衝と入りざま、沓脱に立ちて我が名を慌しく呼びたるは、隣家なる廣岡の琴弾く彼の美しき君なり。

「あれ。」とばかりに後にすざりて、後さまにまた其手を格子戸の引手にかけて、遁も出ださむ身のふりして、面をば赧らめたまへる、可懐しと思ふ人なれば、涙ながら見て、われは莞爾と笑ひぬ。

「まあ私は何うしたといふのでせう。」

かく言ひかけて俯向きたまへり。

「何うぞ、さあ何うぞお入りなさいまし。お嬢様まことに散らかして居りますが。」  
此方も周章てていふ。

「はい、まだ染みく御挨拶にも上りませぬのに、失禮な、つい、あの、まあ、何うしたら可ういふませう。」

詮方なげに微笑みたまひつ。果は笑ひとこそなりたれ、わが其時の泣聲の殺されやすと思ふまで烈しき悲鳴なりしかば、折しも戸に倚りて夕暮の空を見たまひしが、われにもあらで走入り給ひしなりとぞ。されば、わが泣きたるも、一つはこの姉上の母の、繼母ぞといふことをば、豫て人に聞きて知ればなりき。

四

うつくしき君の住ひたるは、わが町家の軒ならびに、比びなき建物にて、白壁いかめしき土蔵も有りたり。内證は太く富めりしなりとぞ。人数は少なくて、姉上と、其父と、母と、下婢とのみ、もの靜なる仕舞家なりき。

財産持てりといふには似で、繼母なる人の扮装の粗末さよ。前垂も下婢と同じくしたり。髪は鶉の尾の如きものの笏ね出でたる都髻といふに結びて、齒を染めしが、ものいふ時、上下の齒



ぐき白く見ゆる。

年紀は四十に餘れり。われをば睨みしことあらざれど、遊びに行けば餘り嬉しき顔せず。嘗て夜に入りて、姉上と部屋にて人形並べて遊びしに、油こそ惜しけれ、然ることは日中に爲るものぞと叫びぬ。

われを憎むとは覺えず、内に行くことをこそ好まざれ、外にて遊ぶ時は、折々ものくれたり。されど彼の繼母の與へしものに、わが好ましきはあらざりき。

節句の粽貫ひしが、五把の中に篠ばかりなるが二ツありき。杏、青梅、李など、幼き時は欲しきものよ。廣岡の庭には實のなる樹ども夥多ありし、中にも何とかいふ一種李の實の、またなく甘かりしを今も忘れず。繼母の目のなきひまに、姉上の潛に取りて、兩手に堆く盛りてわが袂に入れたまひしが、袖の振あきたれば、喜び勇みて走り歸る道すがら大方は振り落して、食べむと思ふに二ツ三ツよりぞ多からざりける。

繼母はわづかに柿の實二ツくれたり。其の一顆は澁かりき。他の一顆を味はむとせしに、眞紅の色の黒ずみたる、臺なきは、蟲のつけるなり。熟せしものにはあらず、毒なればとて、亡き母棄てさせたまひぬ。

何時なりけむ、母上の給ひたる梨の、核ばかりになりしを地に棄てしを見て、彼處の繼母眉を

顰め、其重寶なるもの投ぐることは、磨りおろして汁をこそ飲むべけれど。老實だちてわれに言へりしことあり。

さる繼母に養はる、姉上の身の思はるゝに、いひ知らず悲しくなりて、かくはわれ小銀の譚に泣きしなる。其理由を語るべき我が舌は餘り稚かりき。

「まあ、恚うなんですよ。お嬢様、ちよいと御覽なさいまし、子供ですなえ。」

女房は笑みつゝ言ふ。其まゝにも出でかねてや、姉上は内に入りたまひ、

「まことに失禮いたしました。私もそゝつかしい、考へたつて解りますのにねえ。小母さん、悪く思召さないで下さいまし、ほんとに何うしよう私は。」と、ひたすらに詫びたまひぬ。

此方は只可笑しがりて、

「いゝえ、しかし何ですわ。うつかりした話はいたされませぬね。私も吃驚しました、だつて泣きやうが太いのですもの。厭な人ねえ。貢さん、私や懲々したよ。もういゝ恚麼ことは聞かせません。」と半ばは怨顔なるぞ詮方なき。

「でも賢いのね。貢さん、よくお解りだつた。」

と優しく頭撫でつゝ、姉上の愛でたまふに、やゝ面を起せり。

「お嬢様」とものありげに戸外より下婢の聲懸けたれば、彼の君はいそがはしく辭し去りたまひ



ぬ。あと追うて出でむとせしを、女房の遮りて、笑ひながら、  
「あら其まんまで遁げちやするいよ。もうひとつ手鞠唄をお聞かせてなくッちやあ……」  
再び唄ひたり。辭みて唄はざらむには、うつくしき金魚もあはれまた繼母の手に掛りやせむ。

### 仙冠者

我が居たる町は、一筋細長く東より西に爪先上りの小路なり。

兩側に見好げなる仕舞家のみぞ並びける。市中の中央の極めて好き土地なりしかど、此町は一端のみ大通りに連りて、一方の口は行留りとなりたれば、往來少なりき。

朝より夕に至るまで、腕車、地車など一輛も過ぎるはあらず。美しき妾、富みたる寡婦、おとなしき女の童など、夢おだやかに日を送りぬ。

日は春日山の巔よりのぼりて粟ヶ崎の沖に入る。海は西の方に路程一里半隔りたり。山は近く、二階なる東の窓に、彼の木戸の際なる青楓の繁りたるに蔽はれて、峰の松のみ見えたり。欄に倚りて伸上れば半腹なる尼の庵も見ゆ。卯辰山、霞が峰、日春の丘、一帯波の如く連りたり。空蒼

く晴れて地の上に雨の餘波ある時は、路なる砂利うつくしく、いろ／＼の礫あまた洗ひ出さる、が中に、金色なる、又銀色なる、緑なる、樺色なる、鳶色なる、鳶色なる、細螺おびたゞし。轍の跡といふもの無ければ、馬も通らず、をさなきものは懸念なく踞居てこれを拾ひたり。

あそびなかまの暮ごとに集ひしは、筋むかひなる縣社乙劍の宮の境内なる御影石の鳥居のなかり。いと廣くて地をば綺麗に掃いたり。榊五六本、秋は木犀の薫みたり。百日紅あり、花桐あり、また常磐木あり。梅、櫻、花咲くは此處ならで、御手洗と後合せなる彼の君の庭なりき。

この境内と其庭とを、廣岡の繼母は一重の木槿垣を以て隔てたり。朝霧淡くひとつ／＼に露もちて、薄紫に藥青く、純白の、藥赤く、あはれに咲重なる木槿の花をば、繼母は粥に交せて食するなり。こは長壽する藥そとよ。

梨の核を絞りし汁も、木槿の花を煮こみし粥も、汝が口ならば旨かるべし。姉上にはいかならむ。其姉上と、大方はわれ此處に來て、この垣をへだてて見えぬ。表より行かむは、繼母のよき顔せざればなり。

時は毎に定まらねど、垣根にイめば姉上の直ちに見え給ふ。垂籠めて居給ふ其居間とは、樹の梢ありて遮れど、それと心着きてや必ず庭に來給ふは、蟲の知らするなるべし。一時は先立ちて園生をそゞろあるきし給ふことあり。然る折には、われ家を出づる時、心の急がざることあ



らざりき。

行きて差覗けば、悄れて樹の間に立ちて、首をさげ、肩を垂れ、襟深く頤を埋めて力なげにイ  
みたまふ。病氣にやと胸先づ轟くに、やがて目をあげて此方を見給ふ時、莞爾として微笑み給へ  
ば、病にはあらじと見ゆ。かゝること屢々あり。

獨居給ふ時はいつも然なりけむ。われには笑顔見せ給はざること絶えてなかりしが、わがため  
に慰めらるゝや、さらば勉て慰めむとて行く。もどかしき垣を中なる逢瀬のそれさへも隨意なら  
で、ともすれば意地悪き人の妨ぐる。

國麿といふ、舊の我が藩の有司の兒の、われより三ツばかり年紀たけたるが、鳥居の突あたり  
なる黒の冠木門のいと厳しきなかにぞ住ひける。

二

肩幅廣く、胸張りて、頬に肥肉つき、顔丸く、色の黒き少年なりき。腕力もあり、年紀も長け  
たり、門閥も貴ければ、近隣の少年等みな國麿に従ひぬ。

厚紙もて烏帽子を作りて被り、拂を腰に挿したるもの、顛巻をしたるもの、十手を携へたるも  
の、物干棹を荷へるものなど、五三人左右に引着けて、渠は常に宮の階の正面に身構へつ、稻葉

太郎荒象園の鬼門なりと名告りたり。さて常にわが廣岡の姉上に逢はむとて行くを、など然は女  
女しき振舞する。ともに遊べ、なかまにならば、仙冠者牛若三郎といふ美少年の豪傑になさむと  
言ひき。仙冠者は稻葉なにかしの弟にて、魔術をよくし、空中を飛行せしとや。仙冠者をわれ嫌  
ふにあらねど、誰か甘んじて國麿の弟たらむ。

言ふこと肯かざるを太く憎み、きびしく其手下に命じて、われと遊ぶことなからしめたり。さ  
らぬも近隣の少年は、わが袖長き衣を着て、好き帯したるを疎じて、宵々には組を造りて町中を  
横行しつゝ、我が門に集ひては、軒に懸けたる提灯に磔を投じて口々に罵りぬ。母上の名、假名  
もて其神燈に記されたり。亡き人に磔打たしては、佛を辱かしめむとて、當時わが家をば預りた  
まへる、伯母の君他ののに取りかへたまひぬ。

かゝりし少年の腕力あり門閥ある頭領を得たるなれば、何とて我威を振はざるべき。姉上に逢  
はむとて木槿垣に行く途、まづ一人物干棹をもて一文字に遮り留む。十手持ちたるが引添ひて眼  
を配り、顛巻したるが肩をあげて睨め着くる。其中にやさしき顔の彼の烏帽子被れる兒の拂をば、  
國麿の引取りて、背後の方に居て、片手を尻下りに結びたる帯にはさみて、鷹揚に指揮するなり。  
わびたりとて肯くべきにあらず、しをく引返す本意なき日數こそ積りたれ。忘れぬは我た  
めに、此時嬉しかりし楓にこそ。



其枝のさき近々と窓の前にさしいでたれば、廣岡の彼の君は二階にのぼりて、此方の欄に摺ま  
りたるわが顔を見て微笑みたまひつゝ、腕さしのべて、葉さきをつまみ、撓ひたる枝を引寄せて、  
折鶴、木菟、雛の形に切りたるなど、色ある紙あまた引結びてはソト放したまふ。小枝は葉摺れ  
してさら／＼と此方に撓ひて來つ。風少しある時殊に美しきは、金紙、銀紙を細く刻みて、蝶の  
形にしたるなりき。

雨の日はいかにしけむ、今われ覺えて居らず。麗かなる空をば一群の鳩輪をつくりて舞ふが、  
姉上とわれと對ひあへるに馴れて、恐氣なく、此方の軒、彼方の屋根に颯と下しては翼を休めて、  
廂にも居たり。物干場の棹にも居たり。棟にも居たり。みな表町なる大通の富有の家に飼はれし  
なりき。夕越くれば一齊に時に歸る。や、人足繁く、戸外を往來ふが皆あふぎて見つ。楓にはい  
ろいろのもの結ばれたり。

其まゝ置きて一夜を過すに、あくる日はまた姉上の新たに結び給はでは、昨日なるは大方失せ  
て見えすなりぬ。

手届きて人の奪ふべくもあらねば、町の外れなる酒屋の庫と觀世物小屋の間に住めりと人々の  
言ひあへる、恐しき野衾の來て攫へて行くと、われはをさなき心に思ひき。

野 衾

一

其翼廣げたる大きさは鳶に較ぶべし。野衾と云ふは蝙蝠の百歳を経たるなり。年紀六十に餘れ  
る隣の扇折の翁が少き時は、夜毎に其の姿見たりし由、近き年は一年に三たび、三月に一度など、  
たま／＼ならでは人の眼に觸れずといふ。一尾ならず、二ツ三ツばかりあり。普通の小さきもの  
とは違ひて、夏の宵、夕月夜、灯す時、黄昏には出來らず。初夜すぎでのちともすれば其翼もて  
人の面を蔽ふことあり。柔かに冷き風呂敷の如きものに蓋するよと見れば、胸の血を吸はるゝ  
とか。幻の如く軒に閃きて、宮なる鳥居を掠め、其まゝ隠れ去る。彼の酒屋の庫と、觀世物小屋  
の間まで、わが家より半町ばかり隔りし。真中に古井戸一ツありて、雑草の生ひ茂りたる舊空地  
なりしに、其の小屋出來たるは、もの心覺えし後なり。

興行ある毎に打囃す鳴物の音頼母しく、野衾の恐れも薄らぐに、行きて見れば、木戸の賑ひさ  
へあるを、内は如何におもしろからむ。母上いませし折は、わが見たしと云ふを許したまはず、  
野衾の居て恐しき處なるに、いかで斯の可愛きもの近寄らしむべきとて留め給ひぬ。



亡き人となりたまひて後は、わが寂しがるを慰めむとや、伯母上は快よく日毎に出だし給ふ。場内の光景は見馴れて明に覺えたり。

土間、引船、棧敷などいふべきを、鶉、出鶉、坪、追込など稱へたり。舞臺も、花道も芝居の如くに出来たり。人數一千は入る、を得たらむ。

木戸には櫻の造花を廂にさして、枝々に、赤きと、白きと、數あまた小提灯に、「て。」「り。」「は。」と一つひとつ染め抜きたるを、夥しく釣して懸け、夕暮には皆灯すなりけり。其下あたり、札をかゝげて、一人々々役者の名を筆太にこそ記したれ。小親といふあり、重子といふあり、小松といふあり、秋子といふあり、細字もてしのぶといふあり。小光、小稻と書きつらねて、別に傍に小六と書いたり。

二

印半纏被たる壯俊の、軒に梯子さして昇りながら、一つ宛提灯に灯ともすが、右の方より始めたれば、小親といふ名、ぱつと墨色濃く、鮮かに最初の火に照されつ。蠟燭の煮え込まざれば、其他はみな臙氣なりき。

ありたけの提灯あかくなりたる後に、一昨日も、其前の日も、昨日も來つ。この夕は時や、早かりければ、少時われ木戸の前に歩行ともなくイみつゝ、幾度か小親の名を仰ぎ見たり。名を見るさへ他のものとは違ひて、そゞろに興ある感起りぬ。かねて其牛若に扮せし姿、太くわが心にかなひたるなり。

見物は未だ來り集はず。木戸番の燈、大通より吹きつくる風に揺れて、肌寒う覺ゆる折しも、三臺ばかり俵をならべて、東より颯と乗着けしが、一齊に轆をおろしつ、と見る時、女一人お立ちたり。續いて一人片足を下せるを、後なる俵より出でたる女、つと來て肩を貸すに手を掛けてひらりと下りたり。先なるは紫の包を持ちて手に捧げつ。左右に二人引添ひたる、眞中に丈たかきは、あれ誰やらむ、と見遣りしわれを、左なる女木戸を入りさま、偶と目を注ぎて、

「おや、お師匠様。」  
また一人、

「あの、此のお子ですよ。」と低聲に言ひたり。聞棄てながら一步を移せし舞の師匠は振り返りつ。訝かなる眼にキトわれを見しが、互に肩を擦合せて小走りに入るよとせしに、つか／＼と引返して、冷たき衣の袖もてわが頸を抱くや否や、アと叫ぶ頬をしたゝかに吸ひぬ。  
良ありてわれ眼を睜りたり。三人は早や木戸を入りて見えざりき。あまり不意なれば、茫然として立つたるに、ふと思ひ出でしは野衾の事なりき。俄に恐しくなりて踵を返す。通の角に、わ



れを見て笑ひながらイみたるは、其頃わが家に抱へられたる染といふ女なり。  
走り行きて胸に縋りぬ。

「恐かつたよ、染ちゃん恐かつたよ。」

「さう、恐かつたの、貢さんは彼が恐いのかい。」

「見て居たの。」

「あ、見て居たとも、私が禁厭をしてあげたから何とも無かつたんですわ。危ないことね。」

「恐かつたよ。染ちゃん、顔をね、包んで了つたから呼吸が出なかつたの。さうして酷いの、彼の頬べたを吸つたんだ。チュツて然う云つたよ、痛いよ、染ちゃん。」

染は眉を擧めて仔細らしく、

「どれ、一寸お見せ。」

と言ひつゝ、「て」「り」「は」の提灯のあかりに向けて透し見るより、

「おや、おや、おや、大變。まあ。」とけたましく言ふに、わが胸轟きたり。おどくすれば眞顔になりて、

「亂暴だ、酷いことをするわ、野衾が吸つたんだね、貢さん、血が出てるわ。……おや。」  
驚きて、

「あら、泣くんぢやありません。何ともないよ、直ぐ治るから往來で何のこつたね、あら、泣かないでさ。」

と小腰を屈めて、湯に行きし歸途なれば、手拭の濡れたるにて、其の血の痕と云ふもの拭ひたり。

「さあ、治りました。もう何ともないよ。」

と賺す、血の出たるが、斯う早く癒ゆべしとは、われ信ぜず。

「嫌だ、嫌だ、痛いよ、治りやしないや。」

「困るね。」

いふ折しもまた此處に來懸りしは、むかひなる彼の女房なりき。われは又彼方に縋りぬ。

「小母さん、恐かつたよ。あのね、野衾が血を吸つたの。恐かつたよ。」

「え、何うしたつて云ふの、大變だ、あの野衾がね。」

傍より、

「姉さん眞個ですよ、あのね。」

と言ひつゝ、ひたと身を寄せ、染は耳朶に囁きて、

「ね、眞個でせう……ですからさ。」と再笑へり。



女房は微笑みながら、

「不可いよ。貢さんは何でも眞個にするから欺されるんだよ。此賑かなのに、何だつて又野衾なんかが出るものかね。嘘だよ、綺麗な野衾だから結構さ。」

「あら姉さん。」

「お止しよ。そんなこと謂つて威すのは蟲の毒さ、私も懲りたことが有るんだからね、欺しっこなし。貢さん、何血なもんかね、御覽よ。」

中指のさきを口に含みて、やがて見せたる、血の色つきたり。

「紅さ。野衾でも何でも可いやね。貢さんを可愛がるんだもの、恐くはないから行つて御覽、折角、氣晴に行くものを、ねえ。此奴が、」

「あれ。」

「あばよ。」とばかり別れたる、囃子の音おもしろきに、恐しき念も失せて、忙しく又木戸に行きぬ。

能は始まりたり。早くと思ふに、木戸番の男、鼻低う唇厚きが、わが顔を見てニタ／＼と笑ひ居たれば、何をか思ふと、其心はかり兼ねて猶豫ひぬ。

三

「坊ちゃん、お入んなさい、始めましたよ。」

わが猶豫ひたるを見て、木戸番は聲を懸けぬ。日毎に行きたれば顔を見識れるなりき。

「何うなすつたんだ。さあ、お入んなさい、え、何うしたんだね。もう始めましたぜ。何でさ、木戸銭なんか要りやしません。お入んなさい、無錢で可うござ。木戸銭は要りませんから、菓子でも買つておあがんなさい。」

大胡坐搔きたるが笑ひながら言示せり。然らぬだに、われを流眊にかけたるが氣に懸りて、其まゝ歸らむかと思へるなれば、堪へず腹立たしきに、伯母上がたまひし銀貨入りたる緑色の巾着手に持ちたるまゝ、ハタと擲ちたり。銀貨入を誰が惜む。投ぐると齊しく駈け出しぬ。疾く歸りて胸なる不平を伯母上に語らばやと、見も返らざりし背後より、蹙音忙しく追迫りて、手を捉へて引留めしは年若き先の女なり。

「坊ちゃん、まあ、あなた、まあ何う遊ばしたんですよ。何處へ入らつしやるのさ。え、何かお氣に入らない事があつたんですか。お怒りなすつて、まあ、飛んだ御機嫌が悪いのねえ。堪忍して頂戴な。よう、入らつしやいよ。さあ、私と一所においでなさいませね。何です、そんな顔



をなさるもんぢやありません。」

「嫌だ。」

「あれ、そんなこと有仰らないでさ。あのね、あのね、小親さんがお獅子を舞ひますツて、ね、可いでせう、さあ、入らつしやい。」

と手を取るに、さりととも拒み得で伴はれし。木戸に懸る時、木戸番の爺われを見つゝ、北叟笑むやうなれば、面を背けて走り入りぬ。

人大方は來揃ひたり。棧敷の二ツ三ツ、土間少し空きたる、舞臺に近き棧敷の一間に、女はわれを導きぬ。

「坊ちゃん、ぢやあね、此處で御覽なさいまし。」

意外なる待遇かな、恚りし事われは有らず。平時はたゞ人の前、背後、傍などにて、妨とならざる限り、處定めず觀たりしなるを。大なる棧敷の眞中に四邊を朧して、小き體一個先づ突立てり。

只ばかりありて、假花道に亂れ敷き、支へ懸けたる、見物の男女が袖肱の込合うたる中をば、飛び、飛び、小走に女の童一人、しのぶと言ふなり。緋鹿子を合せて両面着けて、黒き天鷲絨の縁取りたる綿厚き座蒲團の、胸に當てて膝を蔽ふまでなるを、兩袖に抱へて來つ。

見返る女に顔を見合せて、

「あのね、姉さんが。」と小聲に合めて渡す。受取りて女は棧敷に直しぬ。

「さあ、お敷き遊ばせよ。」

われは又蒲團に乗りて、坐りもやらで立つたりき。女は手もて足を押へて顔を見て打笑みたり。「さあ、おゆつくり。」

われは据ゑられぬ。

「しのぶさん、お火鉢。」

「あい。」と云ひしが朧して、土間より立つたる半纏着の壯俊を磨き、

「ちよいと、火鉢をね。」

「おい。」と此方向く。其土間なる客の中に、國麿の交りしをわれ見たり。顔を見合せ、そ知らぬ顔して、仙冠者は舞臺の方に眼を轉じぬ。牛若に扮したるは小親にこそ。

四

髪の毛いと黒くて艶かなるを、元結かけて背に長く結びて懸けつ。大口の腰に垂れて、舞ふ時靡



いて見ゆる、また無き風情なり。狩衣の袖もゆらめいたり。長靴をば討つて棄て、血刀提げて吻と呼吸つく状する、額には振分たる後毛の先端少し懸れり。眉凛々しく眼の鮮なる、水の流る、如きを、まじろぎもせで、正面に向ひたる、天晴快き見得なるかな。

囃子の音止み寂然となりぬ。肅然として身を返して、三の松を過ぎると見えし、くるりと捲いたる揚幕に吸はる、如く舞込みたり。

「お茶はよろし、お菓子よろしかな、お茶はよろし。」

と幕間を賣歩行く、賣子の数の多き中に、物語の銀六とて癡けたる親仁交りたり。茶の運びもし、火鉢も持て來、下足の手傳もする事あり。をりく、小幾、しのぶ、小稻が演ずる、狂言の中に立交りて、ともすれば屹となりて居直りて足を構へ、手拍子打ち、扇を揚げて、演劇の物語の眞似するが最と巧なれば、皆をかしがりて、然は渾名して囃せるなり。

眞似の上手なるも道理よ、銀六は舊俳優なりき。

曾て大槻内藏之助の演劇ありし時、渠淺尾を勤めつ。三年あまり前なりけむ、其頃母上居たまひたれば、われ伴はれて見に行きぬ。

蛇責こそ恐しかりけれ。大釜一個先づ舞臺に据ゑたり。背後に六角の太き柱立てて、釜に入れたる淺尾の咽喉を鎖もて縛めて、眞白なる衣着せたり。顔の色は蒼ざめて、亂髪振りかゝれるなかに輝きたる眼の光の凄まじさ、瞻り得べきにあらす。夥兵立懸り、押取巻く、上手に床几を据ゑて侍控へ居て、何やらむいひ罵りしが、薪をば投入れぬ。

どろ／＼と鳴物聞えて、四邊暗くなりし、青白きものあり、一條左の方より閃きのぼりて、淺尾の頬を掠めて頭上に鎌首を擡げたるは蛇なり。啊呀と見る時、別なるがまた頸を絡ひて左なるとからみ合ひぬ。恐しき聲をあげて淺尾の呻きしが、輪になり、棹になりて、同じほどの蛇幾條ともなく釜の中より蜿蜒り出でつ。細く白き手を拵きて、其の一條を搔摑み、アと云ひさま投げ棄てつ。交る／＼取つて投げしが、はずみて、矢の如くそれたる一條、土間に居給ひたる母上の袖もてわれを抱きてうつ向き給ひし目の前にハタと落ちたるに、フト立ちて歸りたまひき。

此時其役勤し後、渠はまた再び場に上らざるよし。蛇責の釜に入りしより心地悪くなりて、はじめは唯引籠りしが、俳優厭になりぬとて罷めたるなり。や、物狂はしくなりしよしなど、伯母上のうはさしたまふ。

何地行きけむ。久しく其名聞えざりしが、此一座に交りて、再び市人の眼に留りつ。彼の時の倅は、露ばかりも残り居らで、色も蒼からず、天窗兀げたり。大聲に笑ひ調子高にもものいひ、身軽く小屋の中を馳せ廻りて獨快げなる、わが眼にも此をぢが、彼の恐しき事したりとは見えず。赤き顚巻向うさまにしめて、裾を括げ、片肌脱ぎて、手にせる菓子の箱高く捧げたるが其の



五

「人氣だい、人氣だい。や、すてきな人氣ぢや。お菓子、おこし、小六さん、小親さん、小六さんの人氣おこし、おこしはよしか。お菓子はよしか。」

いまの能の品評やする、がうくと鳴る客の中を、勢ひよく賣ありきて、やがてわが居たる棧敷に來りて、

「はい、これを。」

と大きく言ひて、紙包にしたる菓子わが手に渡しつ。

「樂屋から差上げます。や、も、皆大喜び、數ならぬ私まで、は、は、は。何てッてこれ坊ちゃんやうなお小さいのが毎晩見て下さる。當興行大當、滅茶々に面白い。すてきに面白い。おもしろ狸のきぬた巻でも、あんころ餅でも、鹿子餅でも、何でもございぢや、はい、何でもござい、人氣おこし、お菓子はよしか。小六さん、小親さん、小六さんの人氣おこし、おこしはよしか。」と呼びかけて前の棧敷を跨ぎ越ゆる。

こゝに居て見物したるは、西洋手品の一団なりし。顔あかく、眼つぶらにて、頤を髻に埋めた

る男、銀六の衣の裾むすと取りて、

「何を！」と言ひさま、三ツ紋つきたる羽織の片袖まくし揚げつ、

「何だ、小六さん、小六さんの人氣おこしたあ何だ。」

「へい。」

「へいぢやあ無い、小六さんたあ何だ。客の前を何と心得てるんだ。獸め、乞食藝人の癖に様づけに呼ぶ奴があるもんか。汝あ何だい、馬鹿め！」

と言ふより早く拳をあげて、其胸のあたりをハタと撲ちぬ。背後に踰躑けて澁面せしが、忽ち笑顔になりて、

「許させられい、許させられい。」

と身を返して遁げ行きぬ。

此時、人聲静まりて、橋がかりを摺足して、膏藥練ぞ出で來れる。其の顔は前にわれを引留めて、此處に伴ひたる彼の女に肖たるに、弗と背後を見れば、別なるうつくしき女、何時か來て坐りたり。黒髪を束ねて肩に懸けたるのみ、それかと見れば、倂は舞臺なりし牛若の凛々しげなるには肖で、いと優しきが、涼しき目もて、振向きたるわが顔をば見し。打微笑みしまゝ、未だものいはざるにソト頬摺す。われは舞臺に見向きぬ。



背後見らるゝ心地もしつ。

やゝありて吸競べたる膏藥練の、西なる方吸寄せられて、不状に轉けかゝりたる状いと可笑きに、われ思はず笑ひぬ。

「おもしろうござんすか。」

と肩に手をかけて潛めき問ひぬ。

「よく来て下さいますね。一寸、あの、これを。」

渠は先にわが投げ棄てし銀貨入を手にしつゝ、

「私これ頂いときますよ。ね、頂戴。可うござんすか。」

「あゝ。」

また領けば軽く頂き、帯の間に挟みしが、

「木戸のがね、お氣に入りませんだつたら叱つて貰つてあげますから、腹を立てないで毎晩、毎晩、入らつしやいませ、ね。ちやんと此處を取つて、私の此のお蒲團敷いてあげますわ。而してお前さんの好きなことをして見せませう。何が可いの、狂言がおもしろいの。」

「ぢやあ、お能の方なの。」

「牛若が可いんだ、刀持つて立派で可いんだ。」

「さう。」と言ひかけて莞爾とせしが、見物は皆舞臺を向いたり。人知れずこそ、また一ツ、爰にも野食居たりしよ。

### 狂言

一

見物みな立ちたればわれも立ちぬ。小親が與へし緋鹿子の蒲團の上に、廣き棧敷の中に、小さき體一ツ再こそ此時突立ちたれ。扱いかせむ。前なるも、後なるも、左も右も、人波打ちつゝ、どや／＼と動揺み出づる、土間棧敷に五三人、此處彼處に出後れしが、頭巾被るあり、毛布纏ふあり、下駄の包提げたるあり、仕切の板飛び飛びに越えて行く。木戸の方は一團になりて、數百の人聲推合へり。われは唯茫然として爲む術を知らざりき。

「おい、歸らないか。」

と聲を掛け、仕切の板に手を支きて、われを呼びたるは國麿なり。釦三ツばかり見ゆるまで、胸を廣く搔廣げて、袖をも肱まで捲し上げたる、燃立つ如き紅の襯衣着たり。尻さがりに結べる



帯、其色此時は紫にて、

「何うした、一所に歸らうな。」

「後から。」と低く答へぬ。

國麿は不満の色して、

「だつて皆歸るぢやあないか。一人ぼっちで何しに殘るんだ。」

「だつて、まだ、何だもの。」

と尙ほ猶豫ひぬ。女來て歸れと言はず、座蒲團このまゝにして、いかで、われ行かざるべき。

國麿はものあり顔に、

「可いぢやあないか、一所に歸つたつて可いぢやあないか。」

「だつて何だから……何うしたんだなあ。」

只管樂屋の方打見遣る。國麿は冷かなる笑を含み、

「用があるんか。誰か待つてるか、おい。」

「誰も待つてやしないんだ。」

「嘘を吐け。いまに誰か來るんだらう。云つたつて可いぢやあないか。」

「誰も來るんぢやあないや。然うだけれど……困るなあ。」

「何を困るんだ。え、何うしたんだ。」

「何うもしないさ。」

「ぢやあ困る事はないぢやあないか。な、一所に歸らうと云ふに。」

顔の色變りたれば恐しくなりぬ。兎も角も成らば成れ、ともに歸らむか。鳥居前のあたりにて、

如何なる事せむも計られずと思ひて逡巡するに、國麿は早や肩を揚げぬ。

「疾くしないかい、おい。」

「だつて何だから。」

「何が何だ、をかしいぢやあないか。」

「この座蒲團が……」

國麿はいま見着けし顔にて、

「や、すばらしい蒲團だなあ。すばらしいものだな、何うしたんだ。此蒲團は何うしたんだ。」

「敷いてくれたの。」

「誰が、と聞くんだ、敷いてくれたのは分つてらい。」

「お能のね、お能の女。」

「ふむ、あんな奴の敷いたものに乗つかる奴が有るもんか。彼奴等、おい、皆乞食だぜ。踊つて



な、謡唄つてな、人に錢よウ貰つてる乞食なんだ。内の父様なんか、能も演るぜ。む、謡も唄はあ。而して上手なんだ。而して然ういつてるんだ。眞個のな、お能といふのは男がするもんだ。男の能は眞個の能だけれど、女のは乞食だ。そんなものが敷いて寄越した蒲團に乗るとな、汚れるぜ。身が汚れらあ。しちりけつばいだ、退け！

踏みこたへて、  
「何をやる。」  
「何でえ、おりや士族だぜ。退け！」

二

國麿は擬勢を示して、  
「汝平民ぢやあないか、平民の癖に、何だ。」  
「平民だつて可いや。」  
「ふむ、豪勢なことを言はあ。平民も平民、汝の内や藝妓屋ぢやあないか。藝妓も乞食も同一だ。だから乞食の蒲團になんか坐るんだ。」  
われは恥かしからざりき。娼家の兒よと言はるゝ毎に、不斷は面を背けたれど、慙ういはれし

此時のみ、われは恥しと思はざりき。見よ、見よ、一たび舞臺に立たむか。小親が輕き身の働、躍れば地に棲を着けず、舞の袖の翻るは、宙に羽衣懸ると見ゆ。長刀かつぎてゆらりと出づれば、手に抗つ敵の有りとも見えず。足拍子踏んで大手を擴げ、颯と退いて、衝と進む、疾きこと電の如き時あり、見物は喝采しき。輕きこと鷲毛の如き時あり、見物は喝采しき。重きこと山の如き時あり、見物は襟を正しき。うつくしきこと神の如き時あり、見物は恍惚たりき。かくても見てなほ乞食と罵る、然は乞食の蒲團に坐して、何等疚しきことあらむ。われは傲然として答へたり。

「可いよ乞食、乞食だから乞食の蒲團に坐るんだ。」  
「何でえ。」  
國麿は眼を圓にしつ。  
「何でえ、乞食だな、汝乞食だな、む、乞食がそんな、そんな縮緬の蒲團に坐るもんか。」  
「可いよ、可いよ、私、私はね、こんなうつくしい蒲團に坐る乞食なの。國ちゃん、お孤敷いてるんぢやないや。うつくしい蒲團に坐る乞食だからね。」

言狂葉照  
「何よウ言つてんだい。おい貢、汝そんなこと言つて可いのかな、歸途があるぜ。」



威されてわれは其顔を見たり。舞臺は暗くなりぬ。人大方は立出ぬ。寒き風場に満ちて、釣洋燈三ツ四ツ薄暗き明映すに心細くこそなりけれ。

「歸途があるつて。歸途が何うしたの、國ちゃん。」

國麿は嘲笑へり。

「知つてるだらう。鳥居前の俺が關を知つてるだらう。」

手下四五人、稻葉太郎荒象園の鬼門彼處に有りて威を恣にす。われは黙して俯向きぬ。國麿はじり、と寄りて、

「皆知つてるぜ、おい、皆見て居たぜ。汝婦人とはかり仲好くして、先刻もおれを見て知らない顔して談話してたぢやあないか。然うするが可いや、うむ、たんと然うするさ。」

「國ちゃん、堪忍おし。」

「へ、あやまるかい。うむ、あやまるなら可いや。ぢやあ可いから、な、其座蒲團に一寸己をのツけてくれないか、其處を退いて。さあ、」

國麿は又ト立ちつゝ、褻取りからげて、足を、小親がわれに座を設けし緋鹿子に乗せんとす。止むなく、少しく身を退きしが、唯見れば足袋を穿きもせで、そこら跣足にてあるく男の、足の裏太く汚れて見ゆ。こゝに乗せなばあとつけなむ、土足に此の優しきもの踏ますべきや。

「いけないよ。」

「何だ……」

覺悟したれば身を交して、案の如く踵をあげたる、彼が足蹴をば外してやりたり。蒲團持ちながら座を立ちたれば、拳の楯に差翳して。

三

「あら。」

國麿の手は弛みぬ。われは摺抜けて傍に寄りぬ。

「否です、否です、あなたは否です。」

緋鹿子の片隅に手を添へて、小親われを庇うて立ちぬ。國麿は目を怒らしたり。其帯は紫なり、其襦衣は紅なり。緋鹿子の座蒲團は、われと小親片手づゝ掛けて、右左に立護りぬ。小親此時は樂屋着の裾長く緋縮緬の下着踏みしだきて、胸高に水色の扱帯まとひたり。髪をばいま引束ねつ。優しき目の裡凜として、

「もし、旦那様、あの、乞食の蒲團は、否です、私が貴方にや敷かせないの。私の蒲團です。渡すことはなりません。」



と聲最とす、しくいひ放てり。

「よく敷かせないで下さいました。お前さん、何處も何ともないかい。酷いよ、亂暴ツちやあない。よくねえ、よく庇つて下さったのね。樂屋で皆がせりあつて、やうく私が、あの私の上げたんですもの。他人に敷かれて堪るものかね、お歸りよ、お歸り遊ばせよ。あなた！」

「何でえ、乞食の癖に、失敬な、失敬ぢやあないか。お客に向つて歸れたあ何だい。」

「おからだの汚になります。ねえ。」

とわが顔に頬をあてて、腫は流る、如く國麿を流眄に掛く。國麿は眉を動かし、

「馬鹿、年増の癖に、ふむ、赤ん坊に惚れやがつたい。」

「え、」

と顔を赧らめしが、

「何ですなえ、存じません。何の、最眞になすつて下さるお客様を大事に爲たつて、何が、何ををかしようござんすえ。」

「をかしいや、そんな小ッぽけなお客様があるもんか。」

「あら、私ばかりぢやありません。姉さんだつて、然ういひました。そりや御最眞になすつて下さるお客も多いいけれど、何の氣なしに唯おもしろがつて見て下さるのは此のお兒ばかり。あな

た御存じないんでせう。當座ではじめてから毎晩、毎晩来て下さつて、あの可愛らしい顔をして傍見もしないで見て居て下さるぢやありませんか。此お年紀で、お一人で、行儀よく終番まで御覽なすつて、欠伸一ツ遊ばさない。

手品ぢやアありません、獨樂廻しぢやありません。球乗でも、猿芝居でも、山雀の藝でもないの。狂言なの、お能なの、謡をうたふの、母様に連れられて、お乳をあがつて在らつしやる方よりほか、こんな罪のない小兒衆のお客様がもう一人ござんすか。

目につきました、目立ちました。他のお客様には何うであらうと、此の坊ちゃんだけにや飽かしたくない。退屈をさしたくない、三十日なり、四十日なり、打ち通すあひだ来ていたゞきたい、おもしろう見せてあげたいと、然う思つたが何うしました。……

眞個に藝人冥利、恚ういふ御最眞を大事にするは當前でござんせんか。しのぶも、小稻も、小幾も、重子も、みんな弟子分だから控へさせて、姉さんのをと思つたけれど、私の方が少いからお相手に似合ふといふので、私の座蒲團をあげたんですわ。何も年増だの、何のつて、貴方に、

そ、そんなことを言はれる覺えはない！」

と太く氣色ばみ言ひ開きし。聲高なりしを怪みけむ。小稻、小幾、重子など、狂言囃子の女ども、樂屋口より出で來りて、はらりと舞臺に立ちならべる、大方あかり消したれば、手に手に白



と赤との小提灯、「て」「り」「は」と書けるを提げたり。

四

舞臺なりし装束を脱替へたるあり、未だなるあり、烏帽子直垂着けたるもの、太郎冠者あり、大名あり、長上下を着たるもの、髪結ひたるあり、垂れたるあり、十八九を頭にて七歳ばかりのしのぶまで、七八人ぞ立ならべる。

「何うしたの、何うしたの。」

と赤き小提灯さしかざし、浮足してソト近寄りたる。國麿の傍に、しのぶの何心なく來懸りしが、

「あれ。」

恐しき顔して睨めつけながら、鼻の前にフ、と笑ひて、

「何か言つてらい、おたふくめ。」

と言棄てに身を返すとて、國麿は太き聲して、

「貢！」

「牛若だねえ。」

とて小親、兩袖を以てわが背蔽ひぬ。

「覚えて居れ、鳥居前は安宅の關だ。」

と肩を揺りて嘲笑へる、渠は少しく背屈みながら、紅の襯衣の袖二ツ、むらさきの帯に突挿しつ、腰を振りてのさりと去りぬ。

「濟まなかつたね、みつぎさん、お前さん、貢さんて言ふの？」

「あゝ。」

「樂屋に少し取込みが有つたものだから、一人にして置いて飛んだめに逢はせたこと。氣が着いて、悪いことをしたと思つて、急いで來て見ると如彼だもの。よくねえ、そして、あの方はお友達達？」

「友達になれつていふのよ。」

「おや、さう。しない方が可いよ。可厭な人つちやあ無い。それでもよく蒲團を敷かせないで下すつた。それは私や嬉しいけれど、もしお前さん疵でも着けられちや大變だのに、何うして、何故敷かせて遣らなかつたの。」

「だって、あんな汚い足をつけられると、この蒲團が可哀さうなもの。きれいだね、きれいな座蒲團、可愛んだねえ。」



真中を絞<sup>しぼ</sup>りて、胸<sup>むね</sup>に抱<sup>いだ</sup>き、斜<sup>なめ</sup>に頬<sup>ほ</sup>を押<sup>おし</sup>當<sup>あ</sup>つるを、小親<sup>こぢかみ</sup>見て、慌<sup>あわ</sup>しく、  
「あら、そんな事<sup>こと</sup>をなすツちや、お前<sup>まへ</sup>さんの顔<sup>かほ</sup>に。まあ、勿<sup>もつ</sup>體<sup>たい</sup>ない。」  
とて白<sup>しろ</sup>き掌<sup>たなこし</sup>もて拭<sup>ぬぐ</sup>ふ眞似<sup>まね</sup>せり。

「あの眞個<sup>ほんど</sup>に、毎晩<sup>まいばん</sup>入<sup>い</sup>らつしやいよ。私<sup>わたし</sup>もついあんな事<sup>こと</sup>を云<sup>い</sup>つたんだから、彼<sup>か</sup>の人<sup>ひと</sup>につけても、  
お前<sup>まへ</sup>さんが毎晩<sup>まいばん</sup>來<sup>き</sup>てくれなくツちや極<sup>きまり</sup>が悪いわ。後生<sup>ごせう</sup>ですよ。其<sup>そ</sup>の代<sup>か</sup>り、この蒲團<sup>ふとん</sup>は、誰<sup>だれ</sup>の手<sup>て</sup>も  
觸<sup>さは</sup>らせないで慫<sup>か</sup>うやつて、」

二隅<sup>ふたすみ</sup>を折<sup>を</sup>りて襟<sup>えり</sup>をば搔<sup>か</sup>きあげ、胸<sup>むね</sup>のあたりいと白<sup>しろ</sup>きに其<sup>その</sup>紅<sup>くわ</sup>を推<sup>おし</sup>入<sup>い</sup>れながら、

「かうやつて、お守<sup>まもり</sup>にしておくの。さうしちや暖<sup>あつた</sup>めて置<sup>お</sup>いて、入<sup>い</sup>らつしやる時敷<sup>ときし</sup>かせますからね、  
屹<sup>きつと</sup>度<sup>ど</sup>よ。」

「あゝ。」

「眞個<sup>ほんど</sup>かい。」

「きつと！」

「嬉<sup>うれ</sup>しいねえ。」と莞爾<sup>にこり</sup>として、

「ぢやあね、晩<sup>おそ</sup>くなりましたから今夜<sup>こんや</sup>はお歸<sup>かへ</sup>んなさいな。母<sup>おつかさん</sup>様<sup>さん</sup>がお案<sup>あん</sup>じだらうから。」  
母<sup>は</sup>はあらず。

「母<sup>おつかさん</sup>様<sup>さん</sup>ぢやあないの。伯母<sup>おば</sup>さんなの。」

「おや、母<sup>おつかさん</sup>様<sup>さん</sup>ないの。」

「亡<sup>な</sup>くなつたの、また入<sup>い</sup>らつしやるんだツて、皆<sup>みんな</sup>さう云<sup>い</sup>ふけれど、嘘<sup>うそ</sup>なの。もうお歸<sup>かへ</sup>りぢやない、  
亡<sup>な</sup>くなつてしまつたんだ。」

「まあ。」と言<sup>い</sup>ひかけて再<sup>また</sup>瞻<sup>みま</sup>りしが、頷<sup>うなづ</sup>く狀<sup>さま</sup>にて、

「ぢやあ其<sup>その</sup>伯母<sup>おば</sup>さんがお案<sup>あん</sup>じだらうから、私<sup>わたし</sup>が送<sup>おく</sup>つて行<sup>い</sup>つてあげませう、ね。鳥居<sup>とりかま</sup>前<sup>まへ</sup>ツて言<sup>い</sup>ふの  
は何<sup>ど</sup>處<sup>こ</sup>? 待<sup>まち</sup>伏<sup>ふせ</sup>をしてると不可<sup>いけ</sup>ないから。」

「直<sup>ぢま</sup>、其<sup>その</sup>處<sup>こ</sup>だよ。」

五

「わけ無しだね。ちよいと衣<sup>きもの</sup>物を着<sup>きか</sup>替<sup>か</sup>へて來<sup>く</sup>るから待<sup>まち</sup>つて入<sup>い</sup>らつしやいよ。小稻<sup>こいな</sup>さん、遊<sup>あそ</sup>ばして  
あげておくれ。」

「はい。」

「ばら／＼と女<sup>おんな</sup>ども五六<sup>ご</sup>人<sup>にん</sup>、二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>を中<sup>なか</sup>に取<sup>とり</sup>卷<sup>ま</sup>きたり。小稻<sup>こいな</sup>と云<sup>い</sup>ふが先<sup>ま</sup>づ笑<sup>わら</sup>ひて、  
「若<sup>わか</sup>お師<sup>しやうさま</sup>匠<sup>じやう</sup>様<sup>さま</sup>、おめでたう存<sup>ぞん</sup>じます、おほ／＼／＼。」



小親は素知らぬ顔したり。重子といふが寄添ひつゝ、

「ちよいと、何がおめでたいのさ。」

「おや、迂濶だねえ。知らないのかい。」

「はあ、何ですか。」

「何ですか存じませんが、小稲さんのいひますとほり。若お師匠様、おめでたうございます。」

傍より小幾がいふ。小松がまた引取りて、

「私もお祝ひ申しますわ。」

「それでは私も。あの、若お師匠様おめでたう存じます。」

小親は取巻れてうろくしながら、

「お前達は何をいふのだ。」

「何でも、おめでたいに違ひませんもの。」

「姉さん、何なの、何うしたの。」

と差出でて、しのぶの間ひければ、小稲は静に領きて、

「お前は嬰兒だから解るまいね、知らない道理だから言つて聞かせよう、あのね、若お師匠様に

ね、御亭主が出来たの。」

大勢、

「おや〜〜〜。」

小親は顔を赧らめたり。

「知らないよ！」

小稲また立懸り、

「お祕し遊ばしても不可ません。而して若お師匠様、あなた最うお兒様が出来ましたではござい

ませんか。」

「へい。」

「何を言ふのだね。」

「争はれませんがね。最うおなかが大きくおなり遊ばしたよ。」

「む、此かえ。」と俯向きて、胸を見て、小親は艶麗に微笑を含みぬ。

一同目を着け、

「ほんにね。おや〜〜！」

「だから、お芽出たからうではないの。」

「そして旦那様は何方でございます。」



「馬鹿だねえ、嘘だよ。」

「それでは何でございます、何うしてそんなにお成り遊ばしたの。」

「何でもないので、知らないツツ言ふのに。」

「いえ、御存じないでは済みません。あなた私たちにお隠し遊ばしては水臭いぢやアありませんか。是非何卒、何誰でございますか聞かして下さいましな。」

「若お師匠様、何卒私にも。」

「私にも。」

「うるさいね、いま一寸出懸けるんだから。」

「いえ、お身持で夜あるきを遊ばすのはお毒でございます。それはお出し申されません。ねえ？」

「お身體に障りましたは大變ですとも。何うして、何うして、お出し申すことではございませぬよ。」

「うるさいよ、詰らない。」

「ぢやあお見せ遊ばせ、一寸其お腹ン處を、お見せ遊ばせ。」

「然うはゆかない、ほ、ほ、ほ。」

「擦りますよ！」

「然うはゆかない、あれ！」

と言ふより身震せしが、俯伏にゆらめく挿頭、眞白き頸、手と手の間を抜けつ、潜りつ、前髪ばらりとこぼれたるが仰げざまに倒れかゝれる、裳蹴返し踵を空に、下着の紅宙を飛びて、技利のことなれば、二間ばかり隔りたる舞臺にひらりと飛び上りつ。すらりと立つて向直り、胸少し揺あけて、緋鹿子の座蒲團の片端見せて指さしたり。

「稻ちゃん、此のことかい。」

「は。」と小稻は前に出でて、

「もうお幾月ぐらゐる？」

「さやうさ、九ツ十……」とばかり、小親われを見てまた微笑みぬ。

六

「さあ、こん度は坊ちゃんの番だよ。」

とて、小稻つツと差寄りつ、

「坊ちゃん、お相手をいたしませうね。何をして遊びませう。」  
われは黙して言はざりき。



「だつて、それではお能の装束しないで居る時はお氣にや入りませんか。今なんざ、あんなしだらな装をして居たぢやありませんか。」  
われは考へぬ。いかに答へて可からむ。言ひ損はば笑はるべし。

か。

然ることは聞かざりき。

「そんなこと、言やあしないや。」

「あら、お隠し遊ばすと操りますよ。」

「眞個、そんなこと聞きやしない。」

「それぢや堪忍してあげますから、今度は祕さないで有仰いよ。あのね、坊ちゃんは毎晩入らつしやいますが、何が第一お氣に入つたの。」

「牛若が可いんだ。そしてお獅子も可いんだ。」

「ぢやあ小親さんが可いんですね。うつくしいからお氣に入つたんでせう。え、坊ちゃん。」

「立派で可いんだ。刀さげて、立派で可いんだ。」

「うそをおつしやい。綺麗だから可いんですわ。」

「いゝえ。」

「おや、私ではお氣に入らないさうだよ。重子さん、一寸お前伺つて御覽。」

「はい。」と進み、「さあお相手。」と言ふ。

「そんな藪から棒な挨拶がありますか！」

「おや！おや！」と退いたるあと、小松なるべし立替れり。

「私では不可ませんか。」

「遊ばなくツてもいゝ。」

「まあ、素氣なくツていらつしやる。」

小稲は笑ひぬ。

「坊ちゃん、私にね、そつと内證でおつしやいな、小親さんが、あの、坊ちゃんに何かいつたでせう。」

「言はない。」

「うまくおつしやるのよ、可愛い坊ちゃんだつて、然ういつたでせう。」

「あゝ、言つた。」

皆どつと笑ひたり。

「驚きましたね、そして何でせう。あの、外の女と遊ぶ事はなりません、然う言やあしません。」

「驚きましたね、そして何でせう。あの、外の女と遊ぶ事はなりません、然う言やあしません。」



「やつぱり可いんでせう。ね、それ御覽なさい。美女だからだよ。坊ちゃんはお小親さんに惚れたのね。」

皆哄と笑ふ。

「惚れやしない、惚れるもんか。」

「だつてお氣に入つたんでせう。佳い人だと思ふんでせう。」

「あゝ。」

また聲をあげて笑ひしが、

「ぢやあ惚れたもおんなじだわ。」

「あらゝ、惚れたの、をかしいなあ。」

しのぶ手を拍きて遁げながら言ふ。

哄と笑ひて、左右より立懸り、小稲と重子と手と手を組みつゝ、下より揃ひて、足をからみて、

われをば宙に昇いて乗せつ。手の空いたるが後前に、「て」「り」「は」の提灯ふりかざし、假花道より練出して、

(お手々の手車に誰様乗せた。)

(若いお師匠様の婿様乗せた。)

(二階棧敷の坊ちゃん乗せた。)

と口々に唄ひつれて舞臺を横ぎり、花道にさしかゝる。ものうければ下せとて、上にてあせるを許さばこそ。小稲はわが顔を仰向き見て、

「坊ちゃんも何ぞお唄ひなさい。然うすると下してあげます。」  
止むなく聲あげてうたひたり。

(一夜源の助がまけたに借りた。)

(負けたかりたはいくらほど借りた。)

(金子が三兩に小袖が七ツ。)

(七ツ七ツは十四ぢやあないか。……)

しのぶは聲を合せてうたひぬ。

(下谷一番伊達者でござる。)

(五兩で帯を買うて三兩で締めて、)

(締目々々に七房さげて。)

木戸の外には小親ハヤわれを待ちて、月を仰ぎてイミたり。



夜の辻

一

頭巾着て肩掛引絡へる小親が立姿、月下に斜なり。横向きて目迎へたれば衝と寄りぬ。立並べば手を取りて、

「寒いこと、此處へ。」

とて、左の袖下搔開きて、右手を添へて引入れし、肩掛のひだしとくくと重たくわが肩に懸りたり。冷たき帯よ。其肩のあたりに熱したる頬を撫でて、時計の鎖輝きぬ。

「向うなの、貢さんの家は。」

衣ずれの音立てて、手をあげてぞ指さし問ひたる。霞ヶ峰の半腹に薄き煙めぐりたり。頂の松一本、濃く黒き影あざやかに、左に傾きて枝垂れたり。頂の兀げたるあたり、土の色も白く見ゆ。雑木ある處だんだらに隈をなして、山の腰遠く瓦屋根の上にて隠れ、二町越えて、流の音もす。

東より西の此方に、二ならび兩側の家軒暗く、小さき月に霜凍てて、冷たき銀敷き詰めたらむ、踏心地堅く、細く長き此の小路の中を横截りて、廂より軒にわたりたる、わが青楓眼前にあり。

「彼處、あの樹のある内。」

「近いのね。」

と歩を移す、駒下駄の音先づ高く堅き音して、石に響きて辻に鳴りぬ。

「大分晩くなつたね、伯母さんが嘸お案じだらうに、悪いことをしたよ。貢さん、直送つてあげれば可かつたのに、早いと人だかりがして煩いので、つい。」

「否、案じてやしないよ。遊びに出て居ると伯母さんは喜ぶよ。」

「何うして？まあ。」

小親は身を屈めてわが耳を覗いて聞く。

「皆で、餘所の叔父さんと、兄さんと、染ちやんと、皆でね、お酒を飲んで而して遊んで居るの、賑かだよ。私ばかり寂しいの、一所に遊びたいんだけど、お寢、お寢つて言ふもの。」

小親はまた歩行きかけつ、

「それはね、貢さんが睡がる故でせう。」

「然うぢやあなくつて、私床中に入つてからね、母様が居なくつて寂しくつて寢られないんだ。伯母さんも、染ちやんも、餘所の人も皆おもしろさうだよ。賑かなの。私一人寂しいんだ。」

「ふっかこ。」



「鼠が出て騒ぐよ。ぐわたくつて、……怖いよ。」

「まあ。」

「恐かつたよ、それでね、私、貰つといたお菓子だの、お前餅だの、ソツと袂たもと中なかへしまつとくの、そしてね、紙の上へ乗せて枕頭へ置いとくの。そして鼠にね、お前、私を苛めるんぢやありません。お菓子を遣るからね、おとなしくして食べるんだつて、然う云つたよ。」

「利口だねえ。」

「然うするとね、床とこ中で聞いて、ソツと考へて居るとね、コトコトツてつちや喰べるよ。而して些ちつとも恐なくなつたの。毎晩やるんだ。いつでも来ちやあ食べて行くよ。もう恐くはなくなつて、可愛らしいよ。寝るとね、鼠が来ないか来ないかと思つて目を塞いぢやあ待つてるの。然うすると寝てしまふの。目を覺すとねえ、皆食べて行つてあつたよ。」

われは小親の名呼ばむとせしが猶豫ひぬ。何とか言ふべき。

「ねえ。」

「あいよ。」

「ねえ、鼠は可愛いんだねえ。」

「ぢやあ貢さん家に猫は居ないのかい。」

「居るよ、三毛猫なの。此間ね、四ツ兒を産んだよ、伯母さんが可愛がるよ。」

「貢さんも可愛がつておくれかい。」

われは肩掛の中に口籠りぬ。袖面を蔽ひたれば、搔分けて顔をば出しつ。冷たき夜なりき。

二

小親の下駄の音不圖止みて、取り合ひたる掌に力籠りしが、後うしろざまに退りたり。鳥居の影の横ふあたり、一人立つたが、動き出づるを、それ、と胸轟く。果せるかな。蝨の飛ぶよ、と光を放ちて、小路の月に閃めきたる槍の穂先霜を浴びて、柄長せながく一文字に横へつ、

「来い！」とばかりに呼はりたる、國麿は、危きもの手にしたり。

「何だ、其は何だい。」

われは此方に居て聲かけぬ。國麿は路の中央に突立ちながら、

「寶藏院の管槍よ！」

小親は前に出でむとせず、固く立ちて瞻りぬ。

「出て来い、出て来い！出て来い！」

と最と誇顔にほざいたり。小親わが手を放たむとせず。



「出て来い。男なら出て来い。意氣地なし、女郎の懐に挟つてら。われは振放たんとす。小親は聲低く力を籠めて、

「いけない、危いから。」

「可いんだ。」

「可いちやアありません。お止し、危ないわね。如彼がむしやらの向うさき見ずは、何んな事を爲ようも知れない。怪我をさしちやあ、大變だから……あれさ！」

「構ふもんか、厭だ！ 厭だ。」

「厭だつて、危いもの。返りませう。あとへ返りませう。大人でないから恐いよ。」

「國麿は快げに、

「様あ見ろ、女の懐を出られやしまい、牛若も何もあるもんか。」

「厭だ、厭だ、女と一所にや厭だ。放して、放してい。」

「堪忍おし、堪忍おし、堪忍して頂戴、私が悪いんだから堪忍おしよ。」

「犇と抱きて引留むる。國麿は背ゆるぎさして、

「勝つたぞ、ふむ、己が勝つた。眞、汝が負けた。可いか、能のな、能の女は己がのたせ。」

言葉てて槍を繰り込み、流刃に掛けながら行かむとす。

「負けない、負けやしないや。」

「國麿は振返り、

「それぢやあ来るか。」

「恐かあ無いや。」

「む、来るなら来い！ 女郎の懐から出て来て見ろ。」

小親啊呀と叫びしを聞き棄てに、振放ちて、つか／＼とぞ立出でたる。背後の女は如何にすら

む、前には槍を抜いたり。

「さあ、来い。」

と目の前に穂尖危なし。顔を背け、身を反し、袖を翳して、

「牛若だ、牛若だ、牛若だ。」

「安宅の關だ。」

「何するもんか、突かれるもんか。」

「突くよ、突くよ。藝妓屋の乞食なんか突つてて勿ね飛ばさあ。」

爲兼ねまじき氣勢なれば、氣はあせれども逡巡ひぬ。小親背後に見てあらむと、われは心に恥ぢたりき。